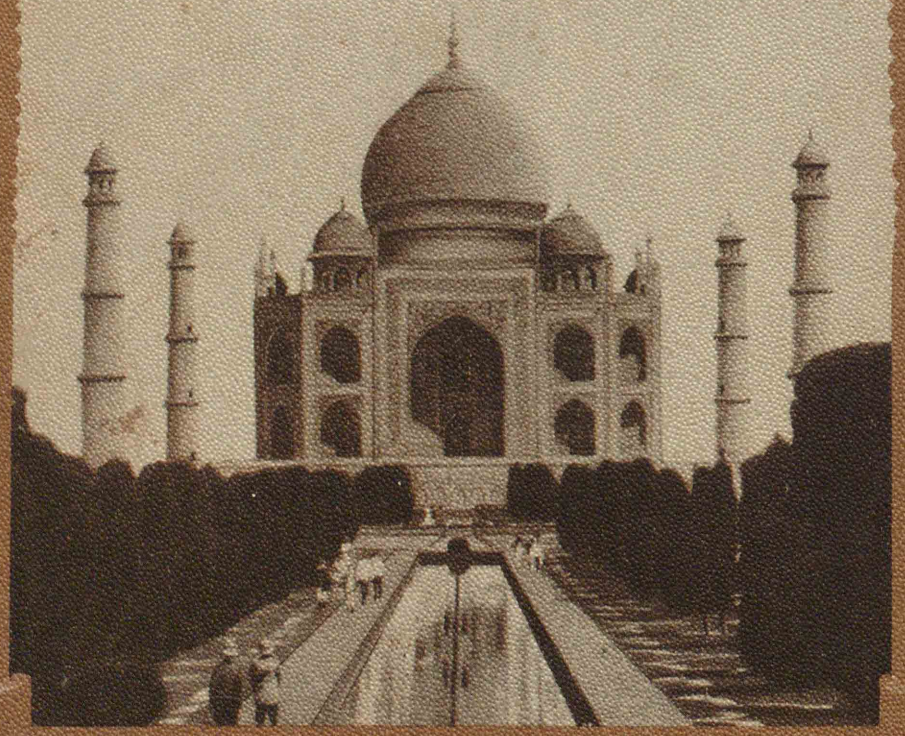
教科書文庫
4
220
42-1933
2000064447

三省堂編輯所編

訂三

用校學女

東洋歷史教科書



東京・三省堂・大阪

42983
教科書文庫
4
220
42-1933
2000064447

資料室

昭和八年一月十九日
文部省檢定濟
高等女學校歷史科用

教科書文庫
4
220
42-1933
2000064447

三訂
女學校用

東洋歷史教科書

三省堂編輯所編

東京・三省堂・大阪

広島大学図書
2000064447

375.9
Sd 16

例言

(一)本書は、さきに高等女學校及び之と同程度の諸學校の東洋歴史教科書に供する目的を以て發行した「改訂女學校用東洋歴史教科書」に對し、更に教官各位の御垂教を仰いで改訂を加へたものである。

(二)本書は、上古・中古・近古・近世の四編に分ち、各編毎に概説及び年表を附し、また小活字を以て、明君・賢相・忠臣・烈士・偉人・才子・賢婦・貞女等の言行、その他有益で面白い話などを本文の所々に附載した。これは要するに學生をして自ら讀ましめ、以て歴史に對する興味をひき起さしめ、且つ知らず知らずの間に、德性を涵養せしめんがためである。

(三)東洋歴史の教授に於て、學生の最も困難を訴へるのは人名・地名であるから、編者は特にこの點に注意し、必要の少い人名・地名は成るべく省略することにした。また人名を記するに漢字を用ふるのも、學生の困難を訴へる一點であるから、本書に於ては、漢字で書く必要のないものは、

広島大学
教
64447
図書

成るべく日本假名で書き、漢字名を括弧内に註記した。たとへば弩爾哈赤をヌルハチ（弩爾哈赤）と記したるが如くである。また支那の地名が時代によつて屢〻變更するのも、學生の困難を訴へる一點であるから、本書に於ては、終始一貫、現今我が國に於て慣用する名を主として記し、古名を括弧内に註記した。たとへば、普通の東洋歴史教科書に於て、大抵、大都・燕京と記してゐるのを、本書に於ては、今の北平（當時の名は大都）・今の北平（當時の名は燕京）と記したるが如くである。また本書は西洋歴史との聯絡にも注意して記述した。たとへば、普通の東洋歴史教科書では大抵大秦國と記してゐるのを、本書では羅馬帝國と記し、大食國と記してゐるのをサラセン國（Saracen）と記したるが如くである。なほ本書に挿入した地圖もまた大抵この趣意によつて作つた。

(四)本書の年表は、普通の東洋歴史教科書のものと聊か趣きを異にし、學生がこれを見てゐる間に、自然に時代の長短や事件と事件との間隔などを會得し得られるやうに編成した。

(五)本書は年を記するに、我が明治以前は西暦紀元を用ひ、明治以後は我が年號（明治・大正・昭和）を用ひ、なほ日本歴史との聯絡を圖るため、必要に應じて括弧内に皇紀・重要事蹟・天皇御名・將軍名などを適宜註記し、また鼇頭に太い文字を以て、最も重要なる事蹟を標記し、且つそれが今から凡そ幾年前のことであるかを註記した。

(六)本書は、上記の外、初版に對する教官各位の御垂教に基き、教材・繪畫・地圖・諸表その他諸般に亙つて注意して記述した筈であるが、なほ實地教授の經驗に富まれる教官各位の御垂教を仰ぎ、將來改善を加へて完全な良教科書としたい考であるから、何とぞ及ばない所を補ひ、惡い所を指摘せられんことを切望する。

昭和七年八月

編者しるす

三訂 女學校用

東洋歷史教科書 目次

緒言……一

第一編 上古史……二

第一章 上代の支那……二

第二章 周の盛衰 春秋戰國の世……四

第三章 周代の制度及び文化……七

第二編 中古史……一三

第四章 秦の興亡 兩漢の盛衰……一三

第五章 漢代の文化 佛教の興起……一八

第六章 後漢の衰亂より隋の滅亡までの變遷……二三

第七章 六朝時代の文化……二八

第八章　唐の興亡……三〇
第九章　唐代の制度及び文化……三六

第三編　近古史……四一

第十章　五代　遼・宋の對立　宋・金の對立……四一
第十一章　宋代の文化……四八
第十二章　元の興亡……五〇
第十三章　明の盛衰……五六
第十四章　蒙古帝國の復興　西洋人の東航……六〇
第十五章　元・明時代の文化……六四

第四編　近世史……六七

第十六章　清の興起及び其の盛世……六七
第十七章　清の內亂及び外戰……七二
第十八章　西洋諸國の亞細亞侵略……七六
第十九章　西洋諸國の清國壓迫……八一

第二十章　清朝の滅亡　支那共和國の成立……八六
第二十一章　支那共和國の政變……八九
第二十二章　日・支の交渉　日・露の關係……九四
第二十三章　約說……一〇〇

目次終

三訂 女學校用

東洋歷史教科書

緒言

東洋歷史

東洋歷史は、支那を中心として、東洋諸國の變遷及び東洋文明の發達などについて記述するものであるが、東洋の大國民たる日本人にとつて、其の研究は極めて必要である。

東洋諸國民の所屬

東洋の諸國民は、大部分黃人種に屬し、一部分のみ白人種に屬する。黃人種の中で最も主なるものは、漢族（漢人卽ち支那人等之に屬す）で、韓族（朝鮮人等之に屬す）・滿洲族（滿洲人等之に屬す）・蒙古族（蒙古人等之に屬す）・西藏族（西藏人等之に屬す）・印度支那族（安南人・シャム人等之に屬す）・トルコ族（トルコ人等之に屬す）など之につぎ、又白人種の中で最も主なるものは印度人である。

本書の目的

これらの諸民族は、これまで如何に活動したか、又それが如何に我が國に影響を及ぼしたかについて述べるのが本書の目的である。

漢族の移住（前約五〇〇〇年）

黄帝の統一（前約四五〇〇年）

堯・舜の世（前約四〇〇〇年）

＊民國十三年、黄帝即位の年を西紀前二千六百九十八年とし、これを紀元元年とした。民國二十一年（昭和七年）はその四千六百三十年に當る。

第一編　上古史（太古より秦の始皇帝の一統に至る。）

第一章　上代の支那

㊀支那の建國　支那は、今の世界諸國中（我が國を除く）、第一の舊國である。古い傳（ツタヘ）によると、漢族は、今から五千餘年前に、西北方から漸く黄河の岸に移つて來て、土人（苗族（ミヤウゾク）、印度支那族に屬す）を逐ひはらひ、數多の部落を造り、農業・牧畜を營み、醫藥を發明し、商業などを開いたが、やがて、黄帝といふ英雄が出て、諸部落を統一して國家を建て、又始めて舟・車を製し、文字を作り、音樂を定め、養蠶を教へたといふ（約四千五百年前）。これが卽ち支*那帝國の起りである。

㊁堯・舜　其の後、堯といふ聖人は帝となり、孝子舜（シユン）（支那二十四孝の一人）を擧げて政を輔（タス）けさせ、其の女をこれにめあはし、遂に位を之に讓つた（今より約四千年前）。この二帝はよく國を治めたので、後世の支那人は、之を聖天子として

夏

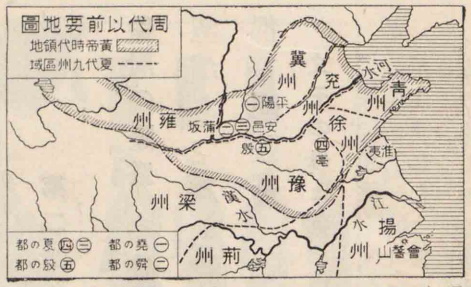
＊夏は國號で且つ朝號である。

禹王の像　漢代の石刻による。笠をかむり、手に鍬を持つてゐる姿である。

龍門の禹王廟　龍門は陝西省の黄河のほとりにある。後方に見ゆるのは龍門山で、前方にある河は禹の掘つたものだと傳ふ。右方にあるのは禹王の廟である。ついでにいふ。支那の廟は我が國の神社の如きもので賢君・忠臣等を祀つてある。

夏の滅亡（前約三六五〇年）

夏—十七代・四百餘年



尊び、其の治世を理想的の國家として慕（シタ）つてゐる。

㊂夏　舜の賢臣禹（ウ）は、黄河の洪水を治めて大功があり、遂に舜の讓（ユヅ）りを受けて王位に卽き、國號を夏（カ）と稱した。禹王はよく勤儉を守り、仁政を行つたから、人民は喜んで之に從ひ、其の子を推（オ）して王位を繼（ツ）がせたが、これは世襲（シヤウ）の始（ヒツ）。これまでは禪讓（ゼンジヤウ）といつて、君主の位は德望のある者に讓るならはしであつたが、これから子孫に傳へることになつた。禹の子孫桀（ケツ）王に至り、暴政を行ひ、遂に部下の諸侯の湯（タウ）（卽ち殷（イン）の湯王）に滅ぼされた（約三千六百五十年前）。

㊃殷　やがて、湯は諸侯に推されて王位に卽き、國號を殷（イン）と稱した。これが蓋（ケダ）し支那の革命（前の統治者が滅ぼされ他の者が代つて統治者となること）の始めであらう。湯王の子孫紂（チウ）王は、

殷の滅亡（約三〇〇〇年前）

殷―二十八代・約六百五十年

暴政を行ひ、遂に發（即ち周の武王）に攻め滅ぼされた（約三千年前）。

支那人の革命思想　支那人は、昔から桀王・紂王を暴君の標本とし、之を討つた湯王・武王を聖君として尊敬してゐる。抑も不德の君主は、其の名は君主でも、其の實君主でないから、之を討つは當然であるといふのが即ち支那人の考である。孟子は『仁を賊ふ者を賊といひ、義を賊ふ者を殘といひ、殘賊の者を一夫（賤しい者の意）といふ。一夫の紂を誅したことを聞いてゐるが、未だ君を弑した者を聞かない』といつてゐる。之を見ても我が國と支那との國體が根本的にちがふことがわかる。

第二章　周の盛衰　春秋・戰國の世

周の文王と武王

一 周の隆盛　發の父（即ち周の文王）は、殷の諸侯となつて仁政を行ひ、頗る人望があつたが、發に至り、殷を滅ぼして王位に即き、今の長安（當時の名は鎬京）に都し、國號を周と稱した。これが即ち周の武王である。

文王の母と妻　周の文王の母太任は非常な賢婦人で、其の姙娠の時、目に惡色を見ず、耳に惡聲を聞かず、口に惡言を出さず、能く胎教に注意したので、文王の如き聖人が生まれたと傳へられてゐる。又文王の妃太姒も婦德甚だ高く、武王・周公の如き聖人の出たのは、畢竟其の教育の力であるといはれてゐる。

周公と成王

周の最盛時代

周の文王と其の妻子

漢代の彫刻による。左より侍者・太姒・文王・伯邑孝（長子）・武王發（次子）・周公旦等である。

周の東遷（約二七〇〇年前）

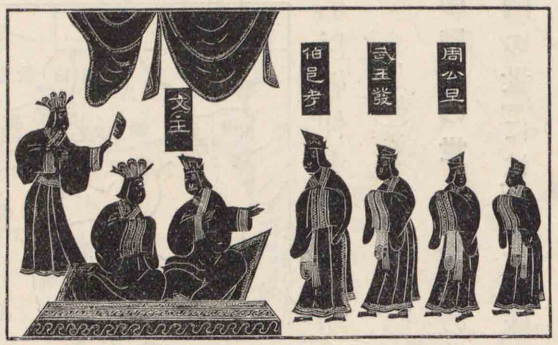
春秋の世（前七七〇―四〇三年約三百年間）

武王の死後、其の弟周公は幼主成王（武王の子）を輔けて、種々の制度を定め、後世に模範を示した。成王及び其の子康王の治世六十餘年間は、天下よく治まり、周の最盛時代であつた。

三代　支那人は夏・殷・周を三代と稱し、其の盛時を堯・舜の世と同じく理想的の國家として之を慕つてゐる。孔子は特に周代の政治を賞讃し、又常に周公を慕つてゐた。孔子及び其の學徒の理想は、實に周公の政治にならつて、周の初めの隆盛時代を再現するにあつたのである。

二 周の東遷　其の後、周の國運が漸く衰へ、夷狄（漢族以外の野蠻人を指す）がしきりに中國（漢人の自稱する國名）に寇したが、幽王に至り、遂に西方の蠻族に攻め殺された。これまで、周の王は、代々、西の方、今の長安に居つたが、幽王の子平王は、難を避けて、東の方、今の洛陽（當時の名は洛邑）に遷つた（皇紀前一一〇年、西紀前七七〇年）。世に之を『周の東遷』といふ。

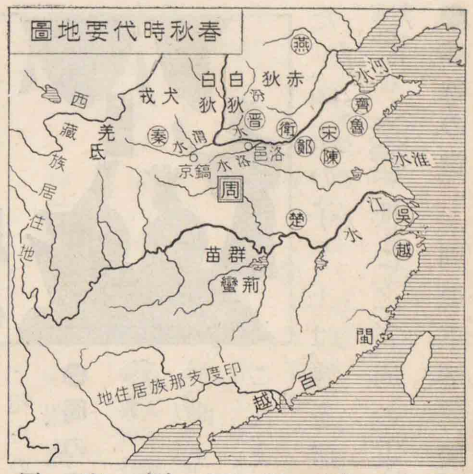
三 春秋の世　『周の東遷』の後、約三百年間を『春秋の世』（又は春秋時代）といふ。『春



戰國の世（前四〇一―三二一年）（約二百年間）

齊の貨幣

桓公の頃、齊の國に流通した貨幣で、其の形が刀に似てゐるから刀貨といふ。右方の面の三字は古文字『齊法貨』である。

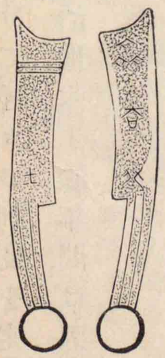


秋の世』には、周王の威光が益〻衰へ、夷狄の侵入が益〻甚しかつたが、この時、大諸侯の中に尊王・攘夷（周王を尊び、夷狄を逐ひ攘ふこと）を名とし、周王に代つて小諸侯を支配するものが出來た。世に之を覇者といふ。覇者の中で最も名高いのは齊（山東）の桓公（神武天皇頃の人）で、名臣管仲を用ひて功業を立て、夷狄を逐ひ攘つて漢族を保護した。

倉廩（倉庫）實ちて禮節（儀）を知り、衣食足つて榮辱（名譽、不名譽）を知る。（管仲の名言）

周（約八百年）
- 西周（約三百年）
- 東周（約五百年）
  - 春秋の世（約三百年）
  - 戰國の世（約二百年）

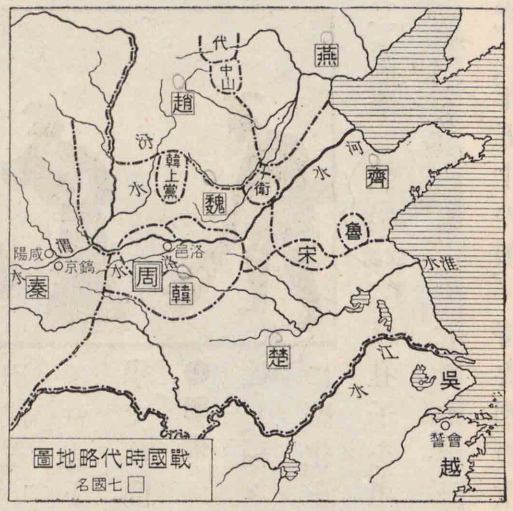
四　戰國の世　『春秋の世』の後、約二百年間を『戰國の世』（又は戰國時代）といふ。『戰國の世』には、周王の威光が全く衰へ、諸侯は大抵自ら王（後の皇帝と同じ意味）と稱し、特に秦・楚・燕・齊・韓・魏・趙の七大國が互に競爭した。この中、秦は最も強大で、



蘇秦の合從說（約二二五〇年前）

張儀の連衡說

秦の一統（約二二五〇年前）



して支那を一統した（皇紀四四〇年、西紀前二二一年）。

第三章　周代の制度及び文化

支那の文明は、今より五千餘年前に起り、それから漸く進歩し、周代に至つて燦然たる光を放つやうになつた。

他の六國を壓倒する勢があつたが、やがて、辯士蘇秦の六國同盟說（即ち合從說）及び張儀の秦・六國聯合說（即ち連衡說）が起り、六國の君主は、いづれも其の方針に迷ふ有樣であつた。然るに、秦は最初から侵略の方針を定めて、先づ周を滅ぼし、次に其の王、政（即ち秦の始皇帝）の時、遂に六國を滅ぼ

周（三七代・八六七年）
- 武王①―成王②―康王③……幽王⑫―平王⑬
- 春秋時代㉜ 威烈王
- 戰國時代㊲ 赧王

封建政治

井田法

大學・小學

古代農民圖
漢代の石刻による。右は桑をとる農婦で、左は鍬を持つ農男である。

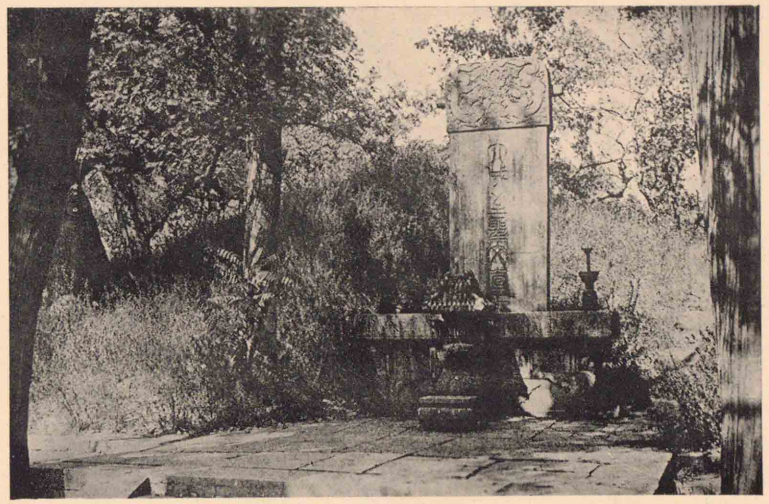
孔子
（前五五一年生、前四七九年死、前約二五〇〇年）

一 制度　(一)政治　周代の政治は封建制度で、周王は中央の地を直接に治め、其の外方に諸侯を分封して治めさせた。(二)田制　周代では土地を國有とし、田地（九百畝、即ち我が約四町平方の田地）を井字形に九分し、其の八分を八家に分配し、一分を公田として八家に共同耕作せしめ、其の收穫を官に納めさせた。世に之を井田法といふ。(三)學制　學校を二つに分け、大學では、主として、身を修め、國を治める道を教へ、小學では簡易な學科と禮式とを教へた。

二 學術　支那の學術は、春秋・戰國時代に大に發達し、種々の學説が出たが、其の中最も多く後世に感化を與へたのは、儒學と老莊學とである。

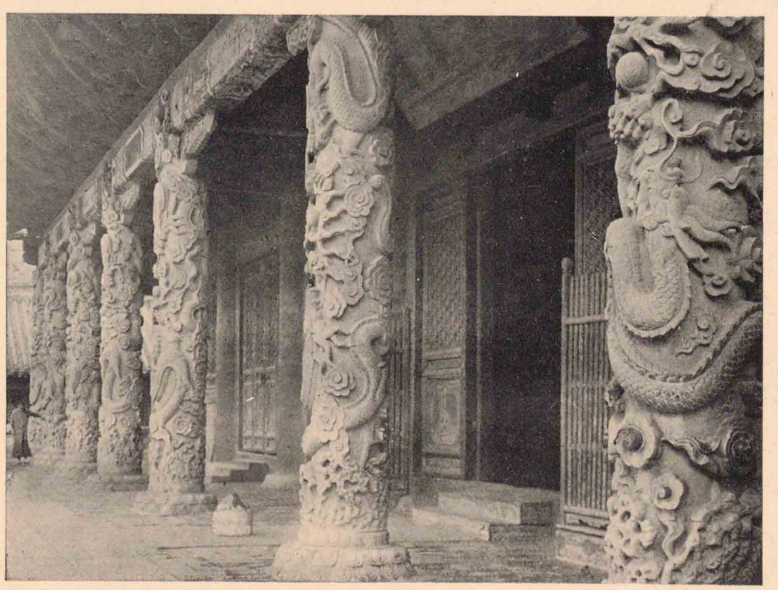
(一)儒學　儒學（即ち儒教）は孔子を祖とする。孔子は春秋時代の末頃（西紀前五五一年、緩靖天皇の世）、魯（周公の封ぜられた國、山東省）に生れ、年三十の頃、周の都に行つて禮・樂（禮式・音樂）を研究し、年五十の頃、一時魯國の政をとつたが、間もなく之を辭し、それか

孔子聖像



孔子の墓（名孔林）

曲阜県の北門外十町の所に孔子の墓があるが、今から約百六十年前の乾隆帝の贈つたものであるといはれてゐる。内に孔子の子孫が住してゐて、この聖墓を守つてゐる。



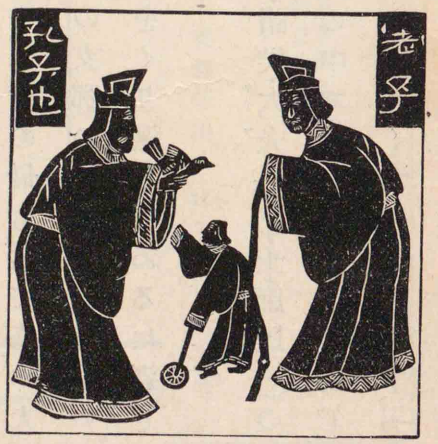
曲阜県の東山の南麓に在る。殿堂は孔子を祭る殿で、上に掲げた孔子の像は大成殿に表面に掲げた中和殿は大成殿の東側に出來たものである。

孔子老子に教を乞ふ圖
漢代の石刻による。

孟子

孟子の像
元代の石刻による（轉載を禁ず）。

ら諸國をめぐつて、諸侯を說いたが、容れられないので、魯に歸り、天下・後世の爲に道を傳へようと考へ、弟子を教へるかたはら、專ら著作に從事し、年七十三で歿した（西紀前四七九年、懿德天皇の世）。孔子の思想・言行は、後世に偉大な感化を與へ、支那の政治及び教育の標準となつた。孔子の歿後約百年を經て、戰國時代に孟子（西紀前三七〇年頃生）が出た。孟子は孔子の道を學び、諸國をめぐつて之を實地に行はうとしたが、諸侯に用ひられず、退いて書（孟子）を著はし、年八十四で歿した。



孟子の母　孟子の母は非常な賢婦人で、其の子の教育の爲に、墓場の附近から商家の附近に、それから又學校の附近に轉居した。世に之を『孟母三遷の教』といふ。又孟子が年やや長じて遊學し、學未だ成らざる中に歸つて來たところ、母は直に刀をとつて織つてゐた布を切斷

して之を戒しめた話は、甚だ有名である。

(二)老莊學　老莊學は老子(孔子とほぼ同時代)を祖とする。老子は自然に任せるのを以て、修身・治國の道だと說いたが、後、莊子(孟子とほぼ同時代)等は書を著はして其の說を弘めた。この學派を世に道家とも稱してゐるが、後世に至り、道家の學說(卽ち老莊派の學說)に附會して道教が起つた。

以上の外、春秋・戰國時代に、多くの學者が出て、種々の學說を唱へた。支那に於て、學術の最も盛であつたのは、實にこの時代で、後世の支那の學者は、極端にいへば、殆どこの時代の學說をくり返してゐるに過ぎない有樣である。

祖先の墓を拜する圖
漢代の石刻による。
支那學術最盛時代

老子
莊子

階級制度

(三)風俗　周代では、一般に門閥を尊び、天子・諸侯・大夫(上級の士)・士・庶民(平民)の階級があつて、各〻其の衣・食・住を異にし、庶民の中で、最も農民を重んじた。又男女の別が甚だ厳重で、七歳以上は席を同じくするを許さず、男

概說　上古期

(支那の太古より秦の一統に至る。我が孝靈天皇以前。漢族が黃河の岸に移住してから約三千年間。)

東方亞細亞の最大民族たる漢族は、今より凡そ四千五百年前、始めて支那帝國を建て、内に於ては

代	東	西
夏	前二〇〇〇	二二六〇頃 有巢氏住す。
		二二〇〇頃 夏興る。
殷	一七六〇頃 夏亡び、殷興る。	
	一一二〇頃 殷亡び、周興る。箕子古朝鮮國を建つ。	

◎一區劃は各〻一千年間とす。

代	東	西
周	前五〇〇	五六五頃
戰國時代	四九四頃 吳王夫差越王勾踐を破る。	五五一 釋迦生る。孔子生る。
	四八四頃 釋迦歿す。	
	四七九頃 孔子歿す。	
	四七三 越王勾踐吳を滅ぼす。	
	四二五 周の威烈王卽位す。	
	四〇三 韓・魏・趙三氏諸侯となる。戰國時代始まる。	
	三八六頃 田氏齊侯となる。	
	三七一 孟子生る。	
	三六一 この頃商鞅秦の孝公に說く。	
	三三三 蘇秦合從の謀を立つ。	
	三一一 張儀の連衡の謀成る。	
	二四九 周亡ぶ。秦支那を一統す。	

◎一區劃は各〻五百年間とす。

建國發展時代

概說　上古期

（支那の太古より秦の一統に至る。我が孝靈天皇以前。漢族が黃河の岸に移住してから約三千年間。）

東方亞細亞の最大民族たる漢族は、今より凡そ四千五百年前、始めて支那帝國を建て、內に於ては漸く文化を進め、外に於ては異族（卽ち夷狄）を逐ひはらつて益〻領土をひろめた。支那には、禹王より前に、王位の世襲がなかつたが、禹王の父子から、この事が始まつた。王朝もまた禹王に始まり、夏・殷・周の三代（卽ち三王朝）が相ついで興つた。支那の文化は、太古以來漸く進歩したが、周代に至つて燦然として大い光を放つやうになつた。周代の中期・後期は卽ち春秋・戰國時代で、この頃天下は大に亂れたが、文化はさまで衰へず、學術の如きは、かへつて大に發達した。又漢族は、建國以來、漸く異族を逐ひはらつて領土をひろめ、特に春秋・戰國時代に、大に其の勢力を擴張した。之を要するに、上古期は漢族發展時代であつた。因に云ふ。支那の歷史は、一方から之を見れば、漢族と異族との競爭の歷史である。そして大體からいへば、漢族は文化を以て優り、異族は武力を以て秀で、一盛一衰、一進一退、以て今日に至つたものである。

第一年表　上古史年表

支那王朝	西紀	東洋史	日本史	日本時代
殷	前二〇〇〇頃	黃帝支那を一統す。		神代
	二三四〇頃	帝堯卽位す。		
	二二六〇頃	帝舜卽位す。		
	二二〇〇頃	夏興る。		
夏	前二〇〇〇			
	一七六〇頃	夏亡び、殷興る。		
	一一二〇頃	殷亡び、周興る。箕子古朝鮮國を建つ。		

◎一區劃は各〻一千年間とす。

支那王朝	西紀	東洋史	日本史	日本時代
西周	前一〇〇〇			神代
東周 春秋時代	七七〇	周の東遷。春秋時代始まる。		
	六六七	齊の桓公始めて霸者となる。		
	六六〇	晉の文公立つ。		
	六三〇	楚の莊王立つ。		
	五六一頃	釋迦生る。		
	五五一	孔子生る。	神武天皇卽位。	
東周 戰國時代	前五〇〇			建國發展時代
	四九四頃	吳王夫差越王勾踐を破る。		
	四八四頃	釋迦歿す。		
	四七九	孔子歿す。		
	四七三	越王勾踐吳を滅ぼす。		
	四二五	周の威烈王卽位す。		
	四〇三	韓・魏・趙三氏諸侯となる。戰國時代始まる。		
	三八六頃	田氏齊侯となる。		
	三七一頃	孟子生る。		
	三六一	この頃商鞅秦の孝公に說く。		
	三三一	蘇秦合從の謀を立つ。		
	三一一	張儀の連衡の謀成る。		
	二四九	周亡ぶ。		
	二二一	秦支那を一統す。		

◎一區劃は各〻五百年間とす。

㊂風俗

周代では、一般に門閥を尊び、天子・諸侯・大夫（上級の士）・士・庶民（平民）の階級があつて、各〻其の衣・食・住を異にし、庶民の中で、最も農民を重んじた。又男女の別が甚だ嚴重で、七歲以上は席を同じくするを許さず、男

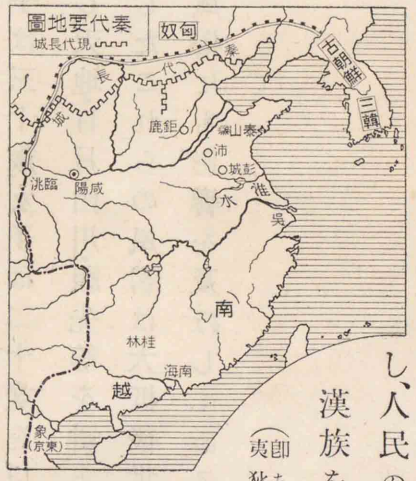
子は三十歳、女子は二十歳を以て結婚期とし、老人を敬ひ、孝行を奬勵し、天地・日月・山川・祖先等を神として祀り、祭祀を重んじ、葬禮を立派にした。これらの風習は、大抵後世の支那にも行はれ、又他の東洋諸國の風俗にも影響を及ぼしてゐる。

始皇帝
内治
外征
匈奴の風俗
支那の古書による。
匈奴征伐

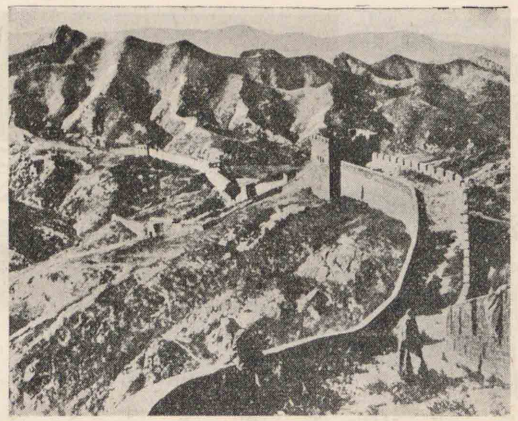
第二編　中古史（秦の始皇帝の一統より唐の滅亡に至る約千百年間。）

第四章　秦の興亡　兩漢（前漢後漢）の盛衰

㊀秦の始皇帝　秦王政（セイ）は支那を一統し、自ら始皇帝（シクワウテイ）と稱し（皇帝の稱號の始）、内は、(1)郡縣制度を立てて全國を皇帝の直轄（チヨクカツ）とし、(2)宮殿を壯麗にして皇帝の威光を示し、(3)民心を統一するために政治を評論する者を殺し、人民の所有する書籍（醫藥・卜筮（ボクゼイ）・農業（ウラナヒ）等の書を除く）を燒き、外は漢族を保護し、國家を維持する爲に、大に異族（即ち夷狄（エビス））を征伐した。當時支那の北方に匈奴（キヨウド）（トルコ族に屬す（フンヌ））といふ蠻族が居つて屢（シバ）漢族に寇（アダ）したが、始皇帝は大軍をやつて之を擊退し、なほ長城を增築して其の侵入を防ぎ、又今の安南（アンナン）地方までも征服した。是に於て、秦の盛名は遠く外國へ傳はつたが、外國人は秦（シン）（チン）をなまつてチナ（支那人は之を音譯して支那と書く）と呼ぶやうになつたといふ。



長城增築
萬里の長城
長城を築き始めたのは戰國の頃で、秦代以後屢〻之を修築し、明代に至つて大修繕を加へた。ここに示したのは八達嶺（北京の西北約二十里）、附近の長城で、明代に修築したものである。
支那國名の起り
秦の滅亡



㊁秦の滅亡　かくて、始皇帝は大に國威を輝かしたが、その政は壓制を極めたので、人民は之を怨み、其の死後、忽ち叛く者が四方に起つた。其の中で最も傑出したのは、項羽（カウウ）と劉邦（リウバウ）であつたが、劉邦は先づ進んで秦の國都（咸陽（カンヤウ）。長安（の北にある））を陷れ、秦朝を滅ぼした（皇紀四五五年（西紀前二〇六年））。

㊂前漢の興起　秦が亡んでから、項羽は最も勢を振つてゐたが、やがて、劉邦は項羽を攻め滅ぼして帝位に

秦（三代・一五年）
始皇帝①
扶蘇
□
子嬰③
二世皇帝②

漢の高祖の卽位（約二一〇〇年前）

卽き（皇紀四五九年、西紀前二〇二年）、長安に都し、國號を漢と稱した。之を漢の高祖（カウソ）といふ。高祖の子文帝（支那二十四孝の一人）は仁孝の名甚だ高く、勤儉をつとめ、租稅を輕くし、大に人望を得た。文帝及び其の子景帝の時、天下は大抵太平で、人民も富み、國庫も充實した。

項羽（右）・劉邦（左）の像
元代の石刻による（轉載を禁ず）。

天成の英雄　漢の高祖は天成の英雄であつた。其の臣韓信（カンシン）が之を評して『臣は能く兵に將たるも、陛下は能く將に將たるものである』といつたのは實に適評である。支那で、純然たる平民から起り、自己の武力によつて帝王となつたのは、高祖を以て始めとする。

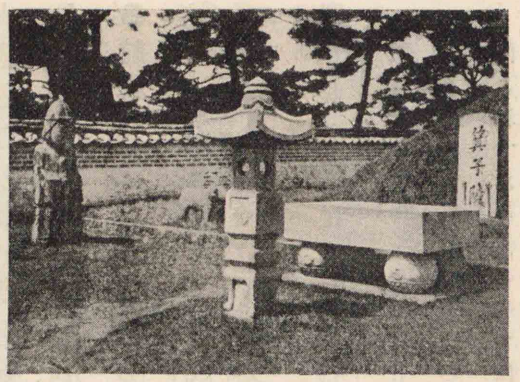
四　前漢の隆盛　景帝の子武帝は、卽位の翌年（西紀前一四〇年、開化天皇の世）年號を建てて建元（ケンゲン）といふ（年號の始）。又武帝は、內、儒學を奬勵し、外、異族を征伐して、大に漢族の勢力を擴張した。

年號の始

(一)朝鮮征服　古傳說によると、殷（イン）の王族箕子（キシ）は、周の武王に封ぜられて、遼河（レウガ）・大同江の間に國を建て、今の平壤（ヘイジヤウ）（當時の名王險（檢））に都したが（西紀前一〇〇年頃）、

箕子の建國

武帝の朝鮮征服（約二一〇〇年前・神功皇后新羅征伐前約三〇〇年）



箕子の陵
朝鮮平壤乙密臺の西麓に在る。陵碑は今より四百三十餘年前の建造にかかる。

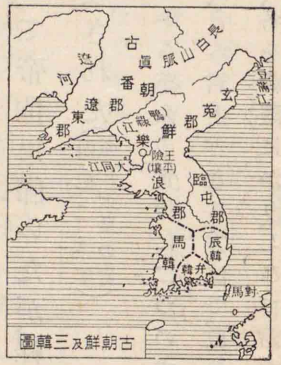
韓といふ。朝鮮國が亡んでから、三韓と漢との間に直接の關係が起り、從つて當時三韓と關係を有する我が國人と漢との私交もだんだん開けるやうになつた。

(二)匈奴征伐　匈奴は、漢の初頃、最も勢力を得て、屢漢の北邊を侵したが、武帝は大軍をやつて之をゴビ砂漠の北方に驅逐（クチク）させた。

漢と西域との交通　當時、漢の西方に大月氏（ダイゲツシ）などの諸國があつた。世にこれらの諸國を總稱して西域（サイキ）といふ。武帝は西域諸國と同盟して匈奴を討たんと欲し、張騫（チヤウケン）を

武帝の匈奴征伐

*玉門關・陽關以西葱嶺の間を指したが、時としてはその以西の西方アジヤまでも總稱することがある。



世にこれを古朝鮮國といふ。この國は凡そ一千年間續いてゐたが、武帝は遂に之を攻め滅ぼして、漢の領土とした（西紀前一〇八年、開化天皇の世）。

朝鮮半島南部の形勢　かくて、朝鮮半島の北部は漢の領土となつたが、其の南部は、當時、馬韓（バカン）・弁韓（ベンカン）・辰韓（シンカン）の三部に分れ、其の各部內に多くの小國があつた。世に之を三

遣はした。張騫の西行によつて、西域及び印度等の事情が始めて漢人に知られ、漢と西域との交通もこれから開け、西方の文化及び物産（葡萄（ギリシヤ語ボトルスのボトの音譯）胡麻・胡桃・胡瓜・柘榴等）が漸く支那に入つて來た。

武帝の死後、其の曾孫宣帝は西域三十餘國を屬國とした。是に於て、漢は支那空前の大國となり、其の盛名が遠く傳はり、漢土・漢人の名は、いつの間にか、支那・支那人の別名となつた。

五　前漢の衰亡　宣帝の後、宦官（或る種の刑を受け、宮中に仕へる者）及び外戚（母方の親戚）の專横により、國勢が漸く衰へた。やがて、外戚の王莽は漢（即ち西漢）を簒つて帝位に即いたが、程なく叛亂が起り、遂に亂兵に殺された（西紀二一三年、垂仁天皇の世）。

禪讓と簒奪　支那では、昔から革命の實行に二つの方法が用ひられた。其の一つは、暴力を以て君主を滅ぼし、自ら君主となる方法で、殷の湯王・周の武王等の革命方法はこれである。他の一つは、名を禪讓にかり、しひて君主をして位を己に讓らせる方法で、之を簒奪といふ。王莽がこの簒奪の方法で革命を行ひ、自ら帝位に即いてから、後世之に倣ふ者が甚だ多くなつた。簒奪の多いのは支那歴史の一大特色である。

武帝の像及び陵
像は元代の石刻による（轉載を禁ず）。陵は陝西省咸陽縣城（秦始皇帝の舊都附近）の西に在る。

前漢の滅亡

後漢の興起（約一九〇〇年前）

光武帝の像
元代の石刻による（轉載を禁ず）。

後漢の極盛時代

六　後漢の興起　王莽の時、漢の皇族劉秀（景帝の子孫）もまた兵を起して王莽を討ち、遂に衆に推されて帝位に即き、都を洛陽に奠めて漢朝を再興し（西紀二年）、群雄を平げて、支那を一統した。之を後漢の光武帝といふ。光武帝は善政を行ひ、特に士風の養成につとめたので、節義の士が多く現はれた。其の子明帝は、賢皇后馬氏等の助けを得て益〻治績を擧げ、又班超をやつて西域諸國を服屬せしめたが、明帝の子章帝もまたよく國を治めた。この三帝の治世六十餘年間（垂仁天皇の世）は、實に後漢の極盛時代であつた。

班超　班超はもと家が貧乏で、筆耕を業としてゐた

前漢（二二代・二一〇年）

- ①高祖
- ②惠帝
- ③文帝
- ④景帝
- ⑤武帝
- ⑥昭帝
- ⑦宣帝
- ⑧元帝
- ⑨成帝
- ⑩哀帝
- ⑪平帝
- ⑫孺子嬰

漢委奴國王の印　天明四年（約百四十年前）筑前國博多灣の志賀島から掘り出したもので方八分弱ある。この邊の酋長が光武帝から受けたものと思はれるが、印文は『漢の委の奴の國王』と讀むべきものであるといふ。黒田侯爵家藏。

が、慨然筆を投じて功名を立てんと欲し、軍隊に入つた。彼は漢の使者として西域に行つた時、たまたま途中で匈奴の使者の大勢が來宿すと聞き、『虎穴に入らずんば虎子を得ず』と壯語し、夜襲つて之を殺した。そこで、西域諸國は其の勇猛に恐れて漢に服從するに至つたといふ。

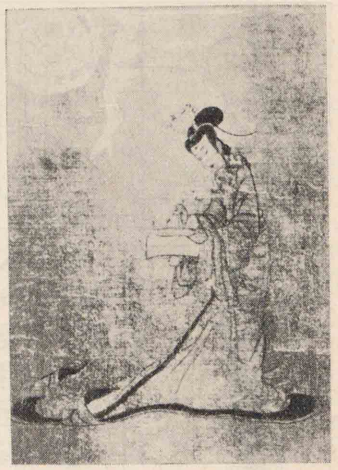
漢と羅馬　當時、西洋に羅馬帝國あり、漢と對立して世界の二大帝國であつたが、漢人は之を大秦國と稱した。班超は其の盛名を聞いて、之と交通しようと企てたが、成功しなかつた。其の後、羅馬皇帝マルクス＝アウレリウス（Marcus Aurelius）（支那人は之を大秦王安敦といふ）は、使を遣はして海路から漢（後漢の桓帝の時）と交通せしめた（西紀一六六年、成務天皇の世）。かくて、東西二大國の交通・貿易は始まつたが、當時、支那の輸出品の主なるものは絹であつた。絹は羅馬の富人に珍重せられ、一時黃金と同一の目方で賣買されたといふ。

漢・羅馬の交通の始（約一七五〇年前）

第五章　漢代の文化　佛教の興起

一　學術　さきに、春秋・戰國時代に種々の學說は出たが、漢の武帝が、特に儒學を尊び、之を以て政治及び教育の標準と定めてから、歷代の朝廷は、大抵この學說のみを奬勵した。又漢代には文章家が多く出たが、

儒學の尊重



班昭の像　原畫は東晉の大畫家顧愷之の作と傳ふ。ロンドン英國博物館所藏。

其の中で前漢の司馬遷（史記（太古より漢の武帝までの歷史）の作者）及び後漢の班固（前漢書（前漢の歷史）の作者）などは最も名高く、女で有名なのは班昭である。

班昭　班固は前に述べた班超の兄で、班昭は二人の妹である。班昭は博學で文才があり、兄の班固は前漢書の著作が出來ない中に死んだが、班昭は勅命を受けて之を完成し、後、和帝の宮中に仕へ、皇后以下女官の敎師となり、大家と敬稱された。世に之を曹大家（曹氏に嫁したる）が故にかくいふ）といふ。班昭は性質謙遜で婦德に富み、かつて『女誡』といふ書を著はしたが、この書は女子の修身書として我が國にも廣く行はれた。

二　發明　漢字は古く發明せられ、周代に至るまでに、其の形が種々に變化した。之を總稱して古文といふ。秦代に古文を略して篆

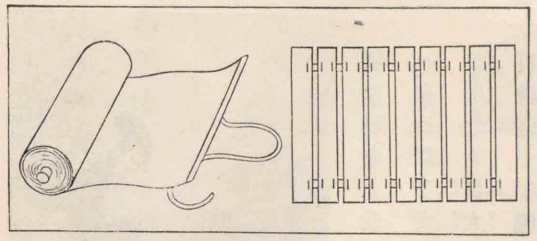
漢人の風俗　漢代の石刻による。中央は婦人、左右は男子、右方は水を汲み、左方は獸を料理してゐる有樣である。

漢字の變遷

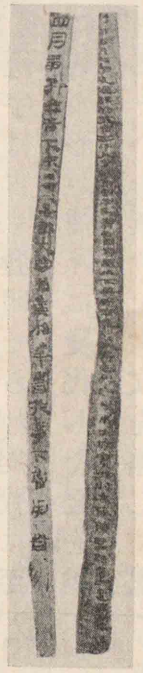
書寫用の木片　これは約二十年前、甘粛省敦煌縣附近から發掘されたもので、前漢の宣帝がこの邊の太守（知事の如きもの）に賜はつた詔書の一部であらうといふ。

書籍の變遷　右は韋で竹の札を綴ぢたもので古代より漢代の頃までの書籍の想像圖、左は卷物で、漢代から唐代の頃までの書籍圖である。

指南車の飾り　支那の古書による。指南車の上に取附けた飾りで、車は東西南北に方向を變じても、人形は常に南を指したと傳ふ。



書・隸書を作り、漢代以後に更に之を略して楷書・行書・草書を作つた。又書籍は初め大抵漆を以て竹簡又は木片に書し、韋を以て之を編み、卷いて所藏したが、秦代に筆、後漢時代に紙が發明されてから、書籍も漸く今日の如き體裁となつた。磁石もまた支那人の發明にかかり、夏・殷・周の頃から既に用ひられてゐたものの如く、彼の指南車と稱するのは、磁石を車に取りつけたものと思はれる。



㊂ 古代の印度　漢代の文化史上、特筆大書すべきものは印度の佛教の傳來である。抑も、

アーリヤ種族の南遷（約五〇〇〇年前）

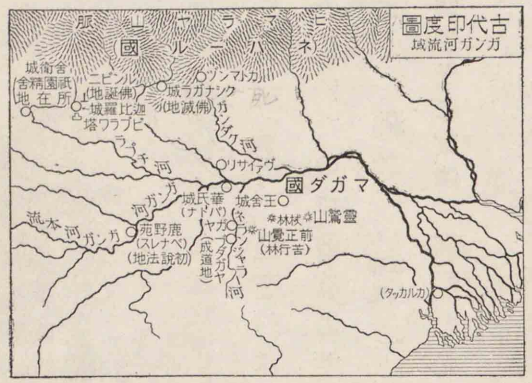
四階級（四種姓）

婆羅門教

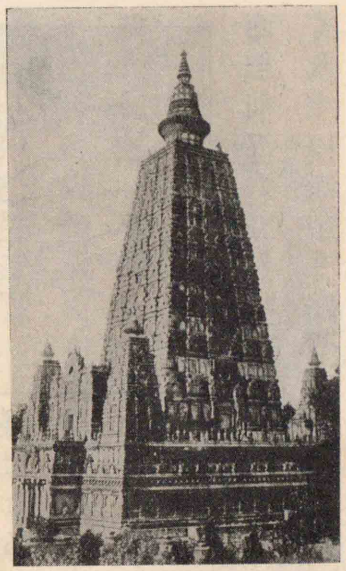
僧族の專横

釋迦（前五六五年頃生、前四八四年頃死、孔子と略同時代）

印度は支那と共に東洋文明の發源地である。今より凡そ五千年前、アーリヤ種族（白人種に屬す）Arya (Aryan) の一派は、中央亞細亞から南に下つて印度に入り、漸く土人を征服し、ここに社會を造り、文明を開いた。古代印度の社會は、僧族（ブラーマン・クシャトリヤ）・士族（政治・軍事に從事す）・平民（農・工・商・牧に從事す）・奴隸（スドラ）の四階級に分れ、其の中、僧族（原名婆羅門（ブラーモン））は婆羅門教の祭祀（マツリ）及び制度・學術をつかさどつてゐた。然るに、婆羅門教は元來階級制度を維持し、僧族の特權を保護するを主義としてゐたので、この教が盛になるにつれて、僧族は專横を極めて他の階級の者を壓制し、弊害が甚しくなつて來た。



㊃ 釋迦　釋迦は中印度の迦比羅城主の子で、西紀前五六五年頃（皇紀九六年頃、綏靖天皇の誕生前十年頃）に生れたが、年長ずるに及び、漸く人生の無常を感じて出家し（年二十九）、苦行凡そ六年、大悟（即ち成道）して、佛陀



釋迦成道記念の高塔

中印度のブダガヤにある。もとアショカ王の建てたのを、近時修復したもので、塔の傍にある菩提樹（ボダイジュ）は、佛教徒の甚だ尊崇するものである。

佛教

アショカ王の像

西藏所傳の古畫による。

し、何人でも正道（シヤウダウ）を行へば、佛陀となり、死後極樂に往くことが出來ると說いたので、僧族の壓制に苦しむ人々は、皆喜んで之を信仰（シンカウ）した。世に之を佛教（卽ち佛陀の說ける教）といふ。

㊄佛教の東傳　釋迦の死後二百餘年を經て、中印度にアショカ（阿育）王が出で（戰國時代の末頃）、更に約三百五十年を經て、中央亞細亞の大月氏國（西藏族の建てた國）にカニシカ王があらはれ（後漢の中頃）、いづれも大に佛教を弘めた。後漢の明帝は、使

（略して佛（ブツ）ともいふ。眞理を悟つた者の意）となり（年三十五）、それから普く世人を救はんと欲し、ガンガ河（恒河）（Ganga(Ganges)）の流域地方に布教すること四十餘年で、遂に歿した（西紀前四八四年頃、懿德天皇の世、孔子の歿する數年前、年八十位）。釋迦は婆羅門教に反對して人類の平等（ビヤウドウ）を主張

釋迦成道圖

この圖は印度ハイデラバッド州のアヂャンターに在る石窟寺第一洞中の壁畫の一部で、釋迦が菩提樹の下の金剛座に端座し、あらゆる誘惑・恐喝・壓迫に打ち勝つて、遂に成道したことをゑがいたものである。傳へ云ふ。魔王パピヤ＝マーラーは、釋迦の成道すること（即ち悟りを開くこと）を恐れて。或は美女に命じて之を誘惑せしめ、或は惡鬼をして之を恐喝せしめ、或は大雷を起し、熱鐵を飛ばし、火箭を雨ふらすなどすること四十九日に及んだ。されど釋迦は泰然として動かず、遂に四十九日目の曉、明星の出づる頃、豁然大悟して佛陀となつた。時に二月八日であつたといふ。この傳說は蓋し釋迦が心の中に起つた種々の疑問を解き、誘惑を退けて、遂に悟りを開いたことを譬へたものであらう。

釋迦成道圖

釋迦が歿してから、其の遺骨（即ち佛舍利）を八個國に分葬し、各、舍利塔を建てたと傳へられてゐる。今より二十餘年前に、ピプラワの廢塔の中より、こゝに示した佛舍利壺を發見し、現にそれをカルカッタの印度博物館に收藏してゐるが、それは其の分葬したものゝ中の一つであらう。英國印度政廳は、この壺の中にある佛舍利（即ち佛骨）を暹羅王に贈つたが、暹羅王は更に其の一部を我が國の佛教徒に贈つた。そこで、我が國の佛教徒は、名古屋市外に日暹寺を建てゝ之を安置してゐる。

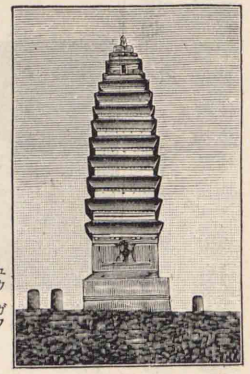
白馬寺の齊雲塔

白馬寺は洛陽の東に在り、寺の東に齊雲塔がある。今の寺も塔も後世修築したものである。

佛教の支那傳來
釋迦成道後約六〇〇年
（約一八五〇年前）

後漢末の大亂

曹操・孫權・劉備



を大月氏國に遣はして佛經・佛像・佛僧を求めさせ、ついで、白馬寺を國都（洛陽）に建てたが（西紀六八年頃、垂仁天皇の世）、これから佛僧の支那に來る者が多く、佛教はだんだん支那に流行した。かくて、支那・印度兩文明の融合が漸く始まり、後に東洋文明の大潮流を見るやうになつたのである。

第六章　後漢の衰亂より隋の滅亡までの變遷

㊀ 後漢の衰亂

後漢は、其の末頃に至り、外戚・宦官の專横の結果、政治が亂れて遂に大亂となり、群雄蜂起したが、其の中で最も傑出したのは、曹操・孫權・劉備の三人であつた。その中曹操は最も智謀に富み、漢の天子を擁して黃河の南北を平定し、更に揚子江南の孫

後漢（一三代・一九六年）

光武帝①―明帝②―章帝③―和帝④―殤帝⑤
□―安帝⑥―順帝⑧―冲帝⑨
□―□―質帝⑩
□―少帝⑦
□―□―桓帝⑪
□―□―靈帝⑫―獻帝⑬

赤壁の戰

天下三分の形勢

後漢の滅亡（約一七〇〇年前）

前漢・後漢合計二十五代・四百六年

三國の鼎立

曹操（中）・劉備（右）孫權（左）の像元代の石刻による（轉載を禁ず）。

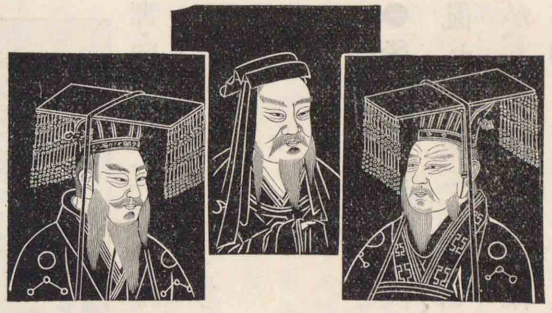
三國時代（約六十年間）

諸葛孔明

權を討つたが、孫權は劉備と同盟し、曹操の大軍を赤壁（セキヘキ）（湖北省）にうち破つた（西紀二〇八年、神功皇后新羅征伐の頃）。これから曹操は揚子江の北方に、孫權は其の南方に、劉備は西方（今の四川雲南・甘肅地方）に據り、かくて、天下三分の形勢となつた。

（劉備の子を戒めた金言）

惡は小なりとも爲すことなかれ。善は小なりとも爲さざることなかれ。



㈡三國の分立　曹操の死後、その子曹丕（ヒ）（即ち魏の文帝）は漢をうばつて帝位に卽き、國號を魏（國都洛陽）と稱し、ついで、劉備も帝位に卽いて國號を漢（世に之を蜀漢（ショクカン）といふ。國都成都）と稱し、後、孫權もまた帝と稱し、國號を吳（ゴ）（國都建康（今の南京）と稱した。世に之を三國といふ。三國時代には人材が多く出たが、其の中、人格・智謀共に傑出したのは、劉備の臣諸葛孔明（ショカツコウメイ）（名は亮（リヤウ））である。孔明は劉備の死後、其の子を輔けて漢朝の再興を圖り、しきりに魏を伐つたが、半途で病死し（西紀二三四年、神功皇后攝政の世、年五十四）、蜀漢は遂に魏に滅ぼされた。やがて、魏の宰相司馬炎（サイシヤウシバエン）は

晉の一統（約一六四〇年前）

諸葛孔明の像と廟

像は元代の石刻による（轉載を禁ず）。廟は有名なる定軍山（陝西省）の麓に在り、孔明が魏を伐つた時、この處に久しく軍を駐めたといふ。

魏をうばつて帝位に卽き、國號を晉（シン）と稱し、都を洛陽に奠（サダ）め、ついで、吳を滅ぼして支那を一統した（西紀二八〇年、應神天皇の世）。之を西晉の武帝といふ。

諸葛孔明　孔明（武內宿禰と同時代の人）は今の山東省の人で、初め戰亂を避けて山林にかくれてゐたが、劉備が三度之を訪問して禮をつくしたので、感激して之と君臣の約束を結び、それから一身をささげて忠義を盡した。孔明が魏を伐つ時、其の主（劉備の子）に上つた（タテマツ）前後二回の『出師（スイシ）ノ表』（出征についての上書）は、至誠忠烈、讀む人をして感動せしめ、昔から『これを讀んで泣かざる者は忠臣にあらず』といはれてゐる。

㈢西晉の衰亡　西晉の武帝は、其の子弟を要地に封じて王としたが、其の死後、諸王は權力を爭つて亂を起し、加ふるに、當時淸談*の風が流行して、士人に眞面目な氣風が缺けたために晉の國勢は急に衰へた。この時支那內地に雜居する異族（卽ち胡人）は之に乘じて蜂起（ホウキ）し、中にも、匈奴の一派は、洛陽・長安を陷れて西晉を滅ぼした（西紀三一六年、仁）。

*禮節を卑しみ世務を省みず、ひたすら空論に耽（フケ）ること。

西晉の滅亡（約一六〇〇年前）

西晉—四代・五十二年

東晉の興起

北方胡人の風俗

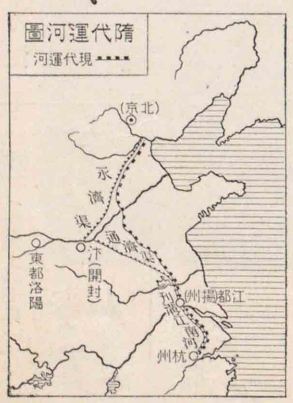
南北朝時代の石刻による。この胡人の服裝は我が古代の服裝に甚だ類似してゐるといふ。

五胡・十六國の世（約百三十年間）

前秦王苻堅

亡び、混亂を極めた。世に之を『五胡・十六國の世』といふ。五胡・十六國の君主中、最も名高いのは、前秦（氏族の建てた國）の國王苻堅で、苻堅は既に揚子江北を一統し、更に大擧して江南の東晉（漢族の建てた國）を伐つたが、かへつて淝水（安徽省）のほとりで大敗し（西紀三八三年仁德天皇の世）、其の國が忽ち分裂して遂に滅亡した。

㊄ 南北朝　其の後、宋は東晉をうばつて揚子江南の地方を領し、後魏（鮮卑族の建てた國）は江北の地方を一統し（西紀四三九年允恭天皇の世）、かくて、宋・後魏の二國は南北に對立するやうになつた。これからちやうど、百五十年間を南北朝時代といふ。南北朝の變遷は、大體表示の通りであるが、最後に楊堅（漢人）は長安に都し、南北朝を合一した（西紀五八九年）。之を隋の文帝といふ。かくて、支那はまた漢人に支配される一統の帝國となつた。

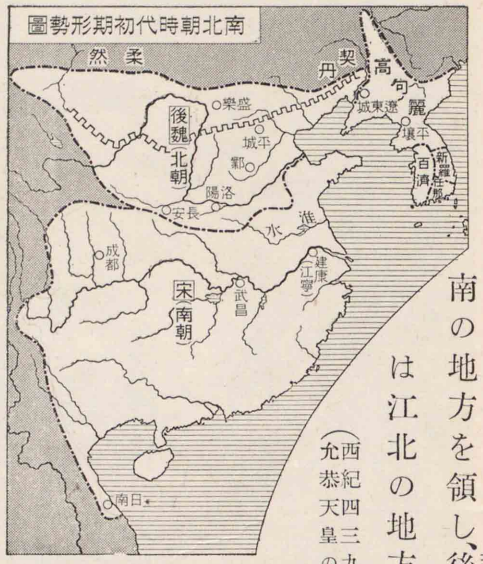


東晉—十一代・百〇三年。西晉・東晉合計十五代・百五十五年。

南北朝時代（四三九—五八九年）

隋の一統（約一三三〇年前）

隋の文帝と煬帝



㊅ 隋の滅亡　隋の文帝は勤儉を勵み、よく國を治めたが、其の子煬帝は奢侈を好み、盛に宮殿を造り、運河を開き、又屢〻無益の外征を起し、大に人民の怨みを招いた。やがて、煬帝は高句

隋の滅亡

麗（高麗）を攻めて大敗するに及び、叛亂が忽ち四方に起り、帝は叛臣に弑せられたが、其の後間もなく、將軍李淵は隋をうばつて帝位に卽き、國號を唐と稱し、長安に都した（西紀六一八年、推古天皇の世）。之を唐の高祖といふ。これからまた支那は隆盛の時代になつた。

隋（四代・三七年）
文帝①—煬帝②—□—恭帝③（侑）
　　└恭帝④（侗）

日・隋の交通　推古天皇が小野妹子を隋に派遣したのは、煬帝の卽位三年で、これが日・支國交の始まりである。其の翌年、煬帝は其の臣裴世清を妹子と共に我が國に來らしめた。これが我が國に支那國使の來た始めである。

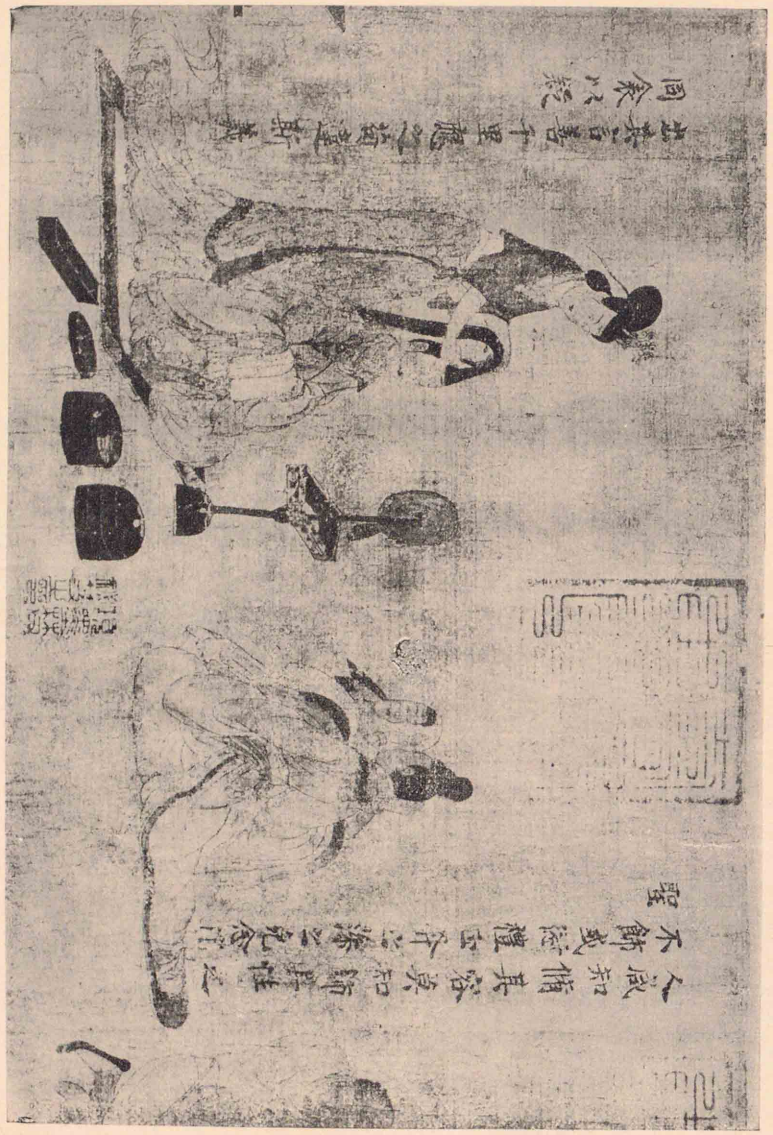
日・隋の交通（約一三〇〇年前）

第七章　六朝時代の文化

一　文藝　三國の頃から南北朝の頃までを世に六朝時代といふ。六朝時代の有樣を觀るに、揚子江を境として、一般に北方人は雄健をたつとび、

六朝時代
＊揚子江南に國を建て、今の南京に都した吳（三國時代）・東晉・宋・齊・梁・陳を六朝といふ。

王羲之の筆蹟
我が皇室の御物の寫眞による。



筆之愷顧・傳　圖籤史女

表面の圖は、英國博物館所藏（もと清國帝室所有）の女史箴圖といふ繪卷の一部を寫したもので、六朝時代の風俗を見るに最も良い材料である。この繪卷は、東晉の顧愷之の筆と傳へらるゝも、その實、顧愷之の原畫を後世の人が模寫したものと思はれる。抑も、女史箴圖は、西晉の忠臣張華が時の皇后賈氏（西晉第二代惠帝の皇后）の淫虐甚しきを憂へ、之を戒しめるために作つた女史箴といふ文章によつて、顧愷之がゑがいたもので、表面の圖は、右方の女史箴の文句によつて、一人の貴女（右方）が自ら鏡に對して髮を理し、一人の貴女（左方）が侍女をして髮を櫛けづらしめてゐる有樣をゑがいたものである。右方の文句は、『人咸知修其容。莫知飾其性。々（性）之不飾。或愆禮正。斧之藻之。克念作聖。』でその意味は、『女は皆其の容色を飾ることを知つてゐるが、其の性情を飾ることを知らぬ。性情を飾らなければ、或は禮儀の正しさを失ふものであるから、之を修飾し（之を斧し、之を藻し、しは修飾の意味）、克己勉勵して聖人とならねばならぬ』といふことである。

梁の武帝の像
元代の石刻による（轉載を禁ず）。

六朝文化の中心

六朝文藝の大家
六朝時代の文章は駢儷體（ベンレイタイ）といつて對句を用ひて言葉の流麗なのを主とした。

六朝時代の佛教

達磨

雲岡の石佛
山西省大同縣城の西なる雲岡の石佛寺に在り、後魏時代の作であるといふ。本圖は其の一部、釋迦說法のところを表はしたものである。

南方人は文雅（ブンガ）を愛した。東晉以來文藝趣味ある漢人は、大抵南方に移つたので、當時、南方は文化最も開け、今の南京（卽ち江寧）は六朝文化の中心であつた。そして、詩人陶淵明（タウエンメイ）・書家王羲之（ワウギシ）・畫家顧愷之（コガイシ）（以上皆東晉の人）は、いづれも六朝文藝の代表者である。

(二) 佛教　佛教は南北朝時代に至つて大に流行し、特に梁（リヤウ）の武帝は最も熱心なる信者であつた。その頃名僧が多く現はれたが、其の中最も名高いのは、達磨（ダルマ）（印度の僧、梁の武帝の時支那に來て禪宗を開く）である。そして、佛教の流行につれて、寺院の建築や彫刻・繪畫・音樂などは大に發達した。

佛教及び支那文化の傳來　佛教は、支那に傳來の後、三百餘年を經て、東晉から百濟に

佛教の日本傳來（約一三七〇年前）

傳はり、更に百六十餘年を經て、百濟から我が國に傳はつた（西紀五五二年、欽明天皇の世、梁の武帝死去の翌年）。又南北朝の頃、支那の文化は、大抵朝鮮半島を經て、漸く我が國に傳來したが、まれに我が國から南朝の諸國に工女などを求めたことがあつたので、直接に傳來したこともある。そして、南朝の地方は三國時代の吳の領地であつたので、我が國人は、もとのやうに、之を吳と書き、『くれ』と呼んでゐた。

道教

三 道教　道教は老子を本尊（ホンソン）とし、老莊の學說をかり、支那古來の民間の信仰（シンカウ）や佛教の教などを加味し、主に壽命を延ばし、幸福を得ることを教ふるものである。この教は後漢の末頃に起り、南北朝時代に至つて大に盛になり、それ以來、常に儒教・佛教と相ならんで人心を支配し、支那の三大教と稱せられてゐる。

支那の三大教

第八章　唐の興亡

唐の一統（約一三〇〇年前）

一 唐の隆盛　唐の高祖の子李世民（リセイミン）は、父を助け、群雄を平げて、殆ど支那を一統し、父についで帝位に卽いた（西紀六二六年、推古天皇の世）。之を唐の太宗（タイソウ）といふ。太宗は文武兼備（ケンビ）の英主（エイシュ）で、大に治績を擧げた。太宗及び其の子高宗

唐の最盛時（約六十年間）

唐の太宗の像と其の陵前の石像

像は元代の石刻による（轉載を禁ず）。陵は陝西省醴泉縣城の北に在る。この石像は唐代の初期に成り、太宗の愛馬の臣が太宗の戰に被つた箭を拔く所を刻したものである。

朝鮮三國の興起

の治世約六十年間（推古天皇の世より天武天皇の世まで）は、唐の最盛時代で、內は制度整備し、外は諸國服屬し、其の隆盛、秦・漢時代の上に出た。古より今に至るまで、漢族の隆盛を極めたのは實に唐代である。

太宗と其の皇后　唐の太宗は世にも稀なる明君で、一代の間、名言・善行が頗る多かつたが、其の皇后長孫（チヤウソン）氏もまた非常な賢婦人で、內助の功が頗る多かつた。太宗はかつて朝廷から歸り、『是非共あの田舍翁（ヰナカオヤヂ）をうち殺さねばならぬ。彼屢〻朕をのしるは無禮至極（シゴク）である』といつて大に怒つてゐた。皇后はそれが名臣魏徵（ギチヨウ）のことであると聞いて、一先づ帝の前を退き、禮裝して再び出た。帝は其のわけを尋ねると『君が明（賢）であれば臣は直（正）であると聞いてゐますが、魏徵の直は卽ち我が君の明なる證據でありますから、御祝ひ申上げる次第です』と答へて、巧に帝の怒りをやはらげた。魏徵は後に其の話をもれ聞いて大に感激し、益〻忠誠を盡したといふ。

二 唐の外國征服　（一）朝鮮半島征服　朝鮮半島では、前漢の中頃（卽ち漢の武帝が古

神功皇后の新羅征伐

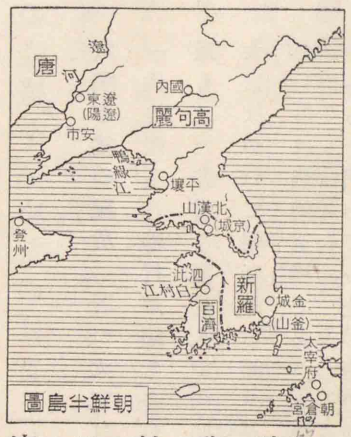
任那日本府の滅亡

百濟・高句麗の滅亡（約一二五〇年前）

百濟―卅一代・約六百八十年
高句麗―二十八代・約七百年

突厥征服

朝鮮を滅ぼした後）、新羅が起つて弁韓・辰韓を統一し、その後二十年、高句麗（高麗）が起つて古朝鮮國の舊領土を占領し、さらに約二十年を經てから、百濟が起つて馬韓を統一し、三國鼎立の有樣となつた。神功皇后の新羅征伐は後漢の最後の頃（赤壁の戰の頃）であつた。やがて、新羅は勢が強くなつて、遂に任那の日本府を陷れ（南北朝時代の末頃）、しきりに百濟を侵した。そこで、百濟は高句麗と結び、又我が國に保護を求めたので、新羅は之に對抗する爲に、助けを隋・唐に請うた。隋の煬帝は之に應じ、高句麗を攻めて大敗し、ついで、唐の太宗もまた之を討つて敗れたが、やがて、高宗は新羅を助け、我が軍を破つて遂に百濟を滅ぼし（西紀六六三年、天智天皇二年）、ついで、高句麗をも滅ぼし（西紀六六八年、藤原鎌足薨去の頃）、平壤に安東都護府を置いて治めさせた。



朝鮮半島圖

（二）突厥征服　突厥（トルコ族に屬す）は、もと外蒙古に住む蠻族で、南北朝の頃から漸く興り、蒙古・中央亞細亞を占領し、一時亞細亞の最強國となり、屢〻支那の北邊を侵したが、太宗及び高宗は大軍を發して遂に之を征服した。

百濟平定記念碑塔及び碑銘

塔は朝鮮忠淸南道扶餘郡に在り、當時の建設に係る。

日・唐交通の始（約一三〇〇年前）

し、安南地方をして入貢せしめ、印度にも兵威を輝かした。

三　唐と外國との交際　唐は太宗・高宗の時隆盛を極め、其の盛名が遠くとどろいたので、諸外國の之と交際を結ぶものが甚だ多かつた。

（一）我が國との交際　我が國は、推古天皇の時、始めて隋と國交を開いたが、唐が興るに及び、舒明天皇は更に國使を太宗の朝廷に遣はし、唐と國交を結ばしめられた（西紀六三〇年）。これが日・唐交通の始めである。

（二）サラセン國との交際　太宗の時、マホメット教（支那人は之を回回教又は回教といふ）の開祖マホメット（Mahomet）は、アラビヤ半島（Arabia）を統一し、サラセン（Saracen）國を建てたが、其の相續（Caliph）

サラセン國と唐との交際

唐土・唐人

則天武后

則天武后の像
元代の石刻による(轉載を禁ず)。

者(即ち回教主)は、高宗の時、使者を唐に遣はして交際を結んだ(西紀六五一年孝德天皇の時)。當時、唐とサラセン國とは實に世界の二大文明國であつた。

アラビヤ人の貿易　アラビヤ人は、唐の高宗の後も、印度洋を航して南支那海に入り、今の廣東・東京(安南)等に來て貿易を營み、支那人に香料・胡椒・象牙・犀角等を賣渡し、近世、歐洲人が東洋に來るまで、東洋の貿易權を握つてゐた。

かくて、唐の盛名が遠く傳つたので、唐土・唐人の名はいつの間にか、支那・支那人の別名となつた。

四　則天武后　高宗の皇后武氏は、高宗在世の時から常に政にたづさはつてゐたが、其の死後、遂に唐の天子を廢して自ら帝位に即いた(西紀六九〇年、持統天皇の世)。之を則天武后といふ。武后は性質明敏で、權略に富み、よく人を用ひ、國威を維持した。武后の晩年に、中宗は位に復したが、その皇后韋氏は不德の婦人で、みだりに政權を弄び、遂に中宗を弑したが、中宗の甥は之を誅し、やが

玄宗の治世

安祿山の亂(約一一六〇年前)

唐代貴女風俗圖
唐代古畫の模寫による。楊貴妃などの有樣がこれでほゞ想像される。

玄宗の像
元代の石刻による(轉載を禁ず)。

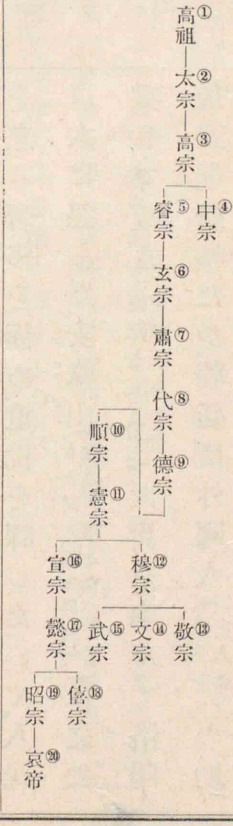
て、帝位に即いた(西紀七一二年元明天皇の世)。之を唐の玄宗といふ。

女中の怪傑　則天武后は、東西の歷史上、殆ど比類なき女中の英傑で、年十四の時召されて太宗の宮中に入り、太宗の死んだ時、年二十六で一時尼となり、やがて、年三十一の時また高宗の宮中に入り、其の死後、年六十七で自ら帝位に登り、それから十六年間政治を左右し、八十二歳で死んだ。

五　玄宗の世　玄宗は、即位の初、よく賢相を任用し、熱心に政をつとめたので、其の初世は、天下よく治まり、國威四隣に振ひ、文學者・藝術家が多くあらはれ、文華燦然として大に輝いた。然るに、晩年に至り楊貴妃を寵し、政を怠り奢侈を極め、重稅を課したので、人民は大に怨んだ。安祿山(もと胡人(即ち異族で唐の將軍となつた者))は之に乘じて叛き(西紀七五五年孝謙天皇の世)、大兵を率ゐて洛陽・長安を陷れたが、朝廷は外國人(アラビヤ人等)の助けをかり、九年の後やうやく賊徒を平げた。

唐の滅亡（約一〇〇〇年前）

㈥ 唐の衰亡　唐朝は、安祿山の亂の後、なほ約百五十年間程（唐朝は全體二百九十年間）續いたが、この間に、(1)武人（主として節度使）の横暴、(2)宦官の專横、(3)異族の侵入、(4)財政の困難等によつて國勢が衰へ、遂に動亂が始まつて賊徒が蜂起した。やがて、賊魁朱全忠は唐をうばつて帝位に卽き、國號を梁（世に之を後梁といふ）と稱した（西紀九〇七年醍醐天皇の世）。これから支那はまたしばらく大騷亂の時代となつた。



第九章　唐代の制度及び文化

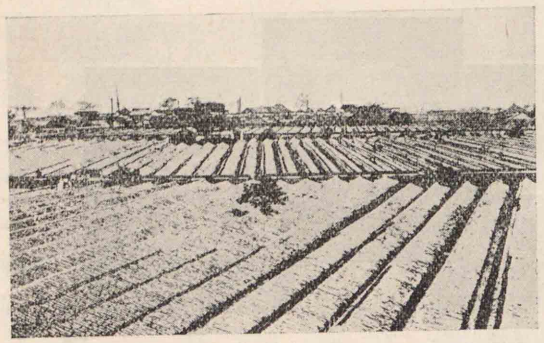
唐代は漢族の勢力及び文化の隆盛を極めた時代で、其の制度・文物は後世の支那及び東洋諸國の模範となつた。我が大化の新政や大寶律令なども大抵これに倣つたものである。

中央—三省・六部
地方—道・州・縣

清代試驗場の跡　南京貢院（試驗場）の遺跡である。圖示の長屋は各數十室に分れ、受驗者は各その一室（三尺四方位）に入つて答案を作るのであつた。中央の高樓は監督者の見張所である。

均田法
租・庸・調
學校と試驗

㈠ 制度　(一)官制　中央政府は中書（詔勅の起草を掌る）・門下（詔勅の審査を掌る）・尚書（詔勅の實行卽ち行政を掌る）の三省より成り、更に尚書省の下に六部があつて各〻行政を分擔し、地方は全國を十道に分け、道の下に州と縣とがあつた。(二)田制・稅制　周代の井田法は戰國時代から既に破れ、富者は土地を併せ、貧富の差が甚しくなつた。唐は之を救濟する爲に、土地國有を厲行し、均田法（十八歳以上の男子に各〻官田百畝を授けて耕さしむ）を行ひ、又租（均田法によつて分配した田地の收穫の一部を上納せしむ）・庸（十八歳以上の男子をして、毎年二十日間公事の勞働をなさしむ）・調（地方の人民をして各其の地方に產する物產を上納せしむ）の三稅を納めさせた。(三)學制　國都に大學等を置き、州・縣にも各〻學校を設け、又試驗によつて官吏を採用した。



官吏任用法　支那の官吏任用法は、唐代から清代の末に至るまで大差なく、大抵それぞれ試驗を行ひ、其の及第者に官吏となり得る資格を與へた。そして、官吏となれば、忽ち名譽・權勢・利益を得る機會が多いから、支那の學生は、大抵眞理研究の爲でなく、試驗のためにのみ勉强した。これが支那の學術のあま

り發達しなかつた一大原因である。

(四)刑法　刑罰には笞・杖・徒・流・死の五刑があり、特に、君・親に對する大惡(謀叛・不孝の類)は之を嚴罰した。

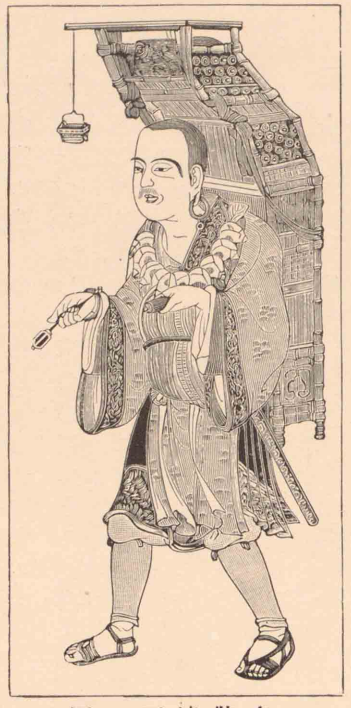
文學

李白(中)・杜甫(右)・韓愈(左)の像
元代の石刻による(轉載を禁ず)。

(二)文藝　唐代文化の中、最も優秀なのは、文學・藝術である。文學の中、特に詩は、玄宗の時を以て支那の最盛期とし、李白(字は太白)・杜甫(字は子美)の二大詩人がこの時出たが、それから凡そ五十年を經て、詩人白居易(字は樂天)・文章家韓愈(字は退之)等が出た。杜甫の詩と韓愈の文とは、共に支那第一と稱せられてゐる。藝術もまた玄宗の時を以て最盛期とし、畫には吳道玄(字は道子、佛畫の名手)・王維(山水畫の名手、南宗畫(南畫)の祖)・李思訓(山水畫の名手、北宗畫(北畫)の祖)等、書には顏眞卿等の大家が現はれ、其の他音樂等も發達し、織物・染物・鑄物等の工藝もまた頗る進歩した。

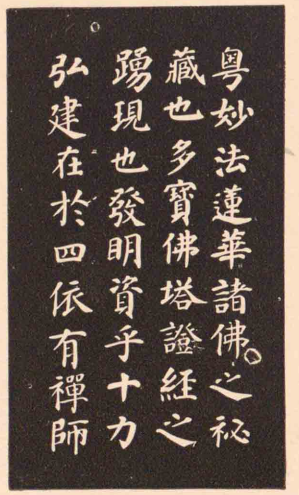
佛教・道教

(三)宗教　佛教及び道教は、南北朝時代の流行の後を受けて唐代にも

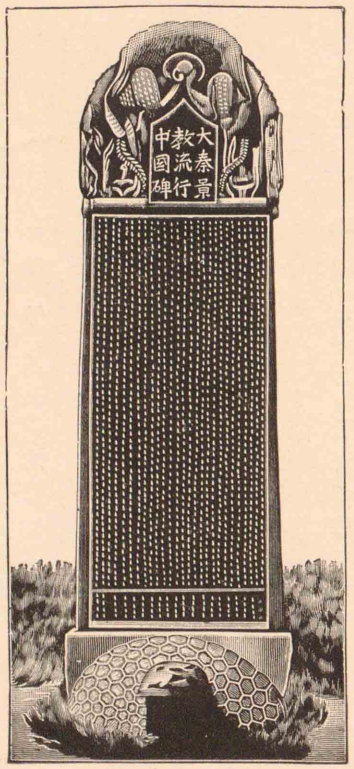


玄奘渡天の圖

耶蘇と景教派僧侶



顏眞卿の書



大秦景教流行中國碑

玄奘渡天の圖　僧玄奘は、唐の太宗の時、年二十六にして印度(天竺)に向つて出發し、凡そ一年を經て到着し、それから印度の各地を巡歴して佛教を研究すること十四年、やがて歸途につき、凡そ一年を經て長安に歸り、その持つて來た多くの經文を翻譯した。この圖は玄奘の旅行中の有樣をゑがいたもので、原圖は宋代又は元代に出來たものであらうといふ。

顏眞卿の書　顏眞卿は、安祿山の亂の時、大名をあらはした唐の忠臣であるが、書家としてもまた甚だ有名である。こゝに掲げたのは、名高い千福寺多寶佛塔感應碑の首文で、其の文句は、粤妙法蓮華、諸佛之祕藏也。多寶佛塔、證經之踴(踊)現也。發明資乎十力。弘建在於四時。有禪師(云々)である。

耶蘇と景教派の僧侶　原圖は支那人のゑがいた古畫であるといふ。左方は耶蘇、右方の二人は景教派の僧侶を示したものである。

大秦景教流行中國碑　この碑は現に長安にある。唐の德宗の時、大秦寺(唐の太宗の時創建した景教の寺)の僧景淨の建てたもので、久しく土中に埋まつてゐたが、明代の末頃に發掘された。碑の高さ、上部(雙龍彫刻の部分)・下部(臺石)を除いて約六尺五寸(日本尺)、幅約三尺ある。正面の最下部にはシリヤ文字、その他には漢字、側面には漢字・シリヤ文字を混じて彫刻し、太宗より德宗に至るまで、凡そ百五十年間の景教の流行の有樣を述べてゐる。

玄奘
景教
回回教
年中行事

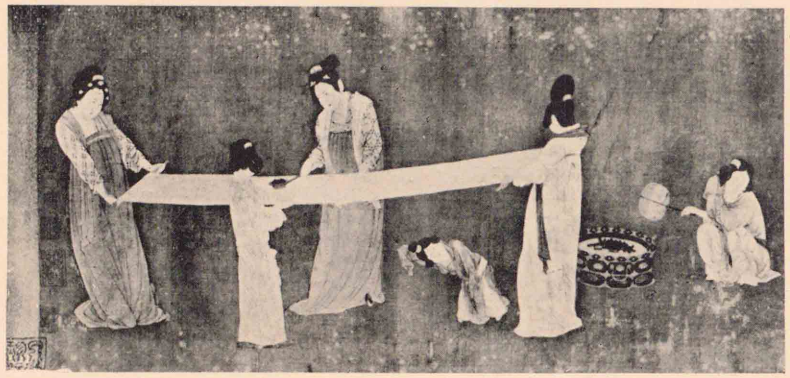
隆盛を極め、有名な佛僧・道士(道教の僧)が多く出たが、其の中で最も名高いのは佛僧玄奘である。又東西交通の盛になるにつれて、種々の外國宗教も支那に入つて來た。其の中、景教(本名ネストリウス教、キリスト教の一派)は、唐の太宗の時始めて唐に傳はり、これについで、回回教(卽ちマホメット教)は初め唐の西北の邊境に行はれ、後、漸く支那の內地に流行するやうになつた。

唐代文化の日本傳來　我が國は、昔から支那文化のおかげを被ること多く、特に最も多く唐代文化の感化を受けた。我が奈良時代及び平安時代の初期に、唐から其の優秀なる文學・美術・工藝及び佛教の諸宗派等が傳はつた。阿倍仲麻呂・吉備眞備の唐に留學したのは、玄宗の時で、李白・杜甫等が在世の頃であり、最澄・空海の唐に留學したのは、德宗の時で、白樂天・韓愈等が在世の頃であつた。なほまた唐代の風俗・習慣で我が國に傳はつたものが甚だ多く、吾々の今日着用する和服の如きも、おもに唐服の變化したものである。又年中行事卽ち正月元旦に屠蘇酒を飲み、同七日に七菜を食し、三月三日に曲水の遊(流水に杯を浮べて遊ぶこと)をなし、四月八日に灌佛の式を行ひ、五月五日に『ちまき』を食し、菖蒲の湯に入り、七月七日に七夕祭を催し、同十五日に盂蘭盆の供養を行ひ、九月九日に山に上つて菊酒等を飲み、歲末の除夜に『豆まき』の式を行ふことなどは大抵秦・漢時代から起り、唐代に至つて完成したものであるが、今日もなほ

纏足の風

支那に行はれ、又我が國及び朝鮮にも早くから傳はつて、今でも多く其の風が殘つてゐる。又世界の一奇觀たる支那婦人の纏足(テンソク)の風は、唐の末頃から起つたものの如く思はれる。

唐代文化の優秀　唐代の文化は頗る優秀で、當時唐は世界第一の文明國に位し、其の文化を傳へた我が國の如きも實に立派な文明國であつたが、其の頃の歐洲諸國は、文化頗る低く、甚だ憐(アハレ)むべき有樣であつた。一千年前の支那・西洋と一千年後の支那・西洋とを比較すると、實に今昔(コンシヤク)の感に堪へない。



搗練圖　傳・唐張萱筆・宋徽宗皇帝摹

婦女嬉遊圖

◎**搗練圖**　表面に掲げた搗練(タウレン)圖に、唐の風俗畫家として名高い張萱(ケン)のゑがいた原圖について、宋の徽宗(キソウ)皇帝が摹寫(モシヤ)したものであると傳へられてゐる。しかし、その信僞はわからないが、要するに、唐代の原圖を宋代頃に摹寫したものであらう。その婦女・童幼の服飾や、調度・器具の類は、正に唐代のそれを寫し出してゐる。この圖は、今、アメリカ合衆國ボストン博物館に藏されてゐるが、上圖は下圖の右方に接續する絹本の圖卷である。

◎**婦女嬉遊圖**　これは正倉院の御物の尺八にゑがかれてゐる婦女嬉遊の圖を摹寫したものである。甚だ粗末な略畫であるが、よく唐代婦女の嬉遊する有樣をうつし出してゐる。

| 南北 | 南北 | 南北 |

概說　中古期（秦の一統より唐の滅亡に至る。我が孝靈天皇より醍醐天皇（平安時代の中頃）に至る。約一千一百年間。）

中古期は大勢の上から觀察して、左の三期に分けることが出來る。

(一)漢族隆興時代（秦・漢（前漢・後漢）・三國の時代。我が孝靈天皇より應神天皇に至る。約五百年間。）　上古期（特に春秋・戰國時代）に於て、漸く異族を驅逐（クチク）して發展した漢族は、この時代に於て、秦の始皇帝、漢の武帝の如き英雄の力により、更に大に異族を壓迫して勢威を四隣に振つた。　この時代に、支那は西域（サイイキ）及び羅馬（ローマ）と交通して、西方の宗教（即ち佛教）・文化・物産等を傳へ、文化の上に新しい色彩（シキサイ）を加へることになつた。

(二)異族侵入時代（西晉・五胡十六國・南北朝の時代。我が應神天皇より崇峻天皇に至る。約三百年間。）　この時代に、異族は漢族（西晉）の武備がゆるんでゐるのに乘じ、支那の內地に侵入して大に漢族を壓迫し、これが爲に漢族は僅に揚子江の南方の地を保ち、其の北方は大抵異族の占領する所となつた。　この時代に、漢族は武力に於て異族に劣つてゐたけれども、其の優秀なる文化を以て、精神的に彼等を征服した姿であつた。

(三)漢族極盛時代（隋・唐の時代。我が推古天皇より醍醐天皇に至る。約三百年間。）　この時代に、漢族は唐の太宗の如き大英主の力により、大に異族を壓迫して勢力を擴張し、又燦然（サンゼン）たる文化を開いた。　この時代は、實に漢族の極盛時代で、其の文化も當時世界中第一であつたやうである。　又この時代に、支那に諸外敎等が傳はつて、支那の文化に幾分か影響を與へた。

第二年表　中古史年表

支那王朝	支那皇帝	西紀	東洋史	日本史	日本時代
周		前三〇〇			建國發展
周		二七二頃	アショカ王即位す。（釋迦―第一年表を見よ）		
周		二四九	周亡ぶ。		
秦	秦王政（始皇帝）	二二一	秦王政天下を一統し始皇帝と稱す		
秦		二一五	蒙恬匈奴を征す。		
秦		二一三	秦書を焚く。		
秦		二一二	秦書生を坑殺す。		
秦		二〇九	陣勝兵を起す。		
秦		二〇六	秦亡ぶ。		
秦		二〇二	劉邦（漢の高祖）帝位に即く。		
前漢	高祖	前二〇〇			
前漢	文帝	一九四	衛滿古朝鮮王となる。		
前漢	景帝	一七四	匈奴の冒頓單于死す。		
前漢		一五八	………		
前漢		一五四	吳楚七國の亂。		
前漢		一四〇	始めて年號を建つ。		
前漢	武帝	一三八頃	大月氏中央亞細亞に國を建つ。		
前漢		一二六	張騫西域より歸る。		
前漢		一〇八	漢の武帝古朝鮮國を滅ぼす。		
前漢		前一〇〇			
前漢		九七	………	崇神天皇即位。	
前漢	宣帝	前一	………		
前漢		六〇	西域都護を置く。		
前漢		五七	新羅の建國。		
新	王莽	後一			
新		八	王莽の簒立。前漢亡ぶ。		
新		三七	………	任那始めて入貢す。	
新		三三	………		
新		二九	………	垂仁天皇即位。	
新		一八	百濟の建國。		
新		四	（キリスト生る）		
西晉		三〇一			朝鮮半島服屬時代
東晉		三一三	………	仁德天皇即位。	
東晉		三一六	西晉亡ぶ。		
東晉		三一七	東晉興る。		
東晉		三七二	佛教高句麗に傳はる。		
東晉		三七六	苻堅揚子江北を一統す。		
東晉		三八三	淝水の戰。		
東晉		三八四	佛教百濟に傳はる。		
東晉		四〇〇	法顯印度に赴く。		
南北朝		四二〇	東晉亡び、宋興る。		
南北朝		四三九	後魏江北を一統す。南北朝始まる		
南北朝		四五六	………	雄略天皇即位。	
南北朝		四七一	後魏の孝文帝立つ。		
南北朝		四七九	宋亡び、齊興る。		
南北朝		五〇〇			
南北朝		五〇二	齊亡び、梁興る。		
南北朝		五二七	達磨印度より梁に來る。		
南北朝		五三四	後魏東西に分る。		
南北朝		五四〇	………		
南北朝		五五二	北齊東魏を滅ぼす。		
南北朝		五五七	………		
南北朝		五五八	後周西魏を滅ぼす。陳梁を滅ぼす。		
南北朝		五五九	この頃より突厥強大となる。		
南北朝		五六二	………	欽明天皇即位。	
南北朝		五七七	後周北齊を滅ぼす。		
南北朝		五八一	後周亡び、隋興る。		
南北朝		五九三	隋陳を滅ぼして支那を一統す。	推古天皇即位。	
隋	文帝	六〇〇			蘇我氏專權時代
隋		六〇七	………	小野妹子を隋に遣はす。	
隋	煬帝	六一八	隋亡び、唐興る。		
隋		六二六	唐の太宗即位す。		
隋	高祖	六三二	僧玄奘印度に赴く。		

◎一區劃は各、一百年間とす。

王朝	皇帝	年	事	時代
周		前三〇〇		建國發展時代
		二七二頃	アシヨカ王即位す。（釋迦—第一年表を見よ）	
		二四九	周亡ぶ。	
秦	秦始皇帝	二二一	秦王政天下を一統し始皇帝と稱す	
		二一五	蒙恬匈奴を征す。	
		二一三	秦書を焚く。	
		二一二	秦書生を坑殺す。	
		二〇九	陣勝兵を起す。	
		二〇六	秦亡ぶ。	
		二〇二	劉邦（漢の高祖）帝位に即く。	
前漢	高祖	前二〇〇		
		一九四	衛滿古朝鮮王となる。	
	文帝	一七四	匈奴の冒頓單于死す。	
	景帝	一五八	吳楚七國の亂。	
		一五四	始めて年號を建つ。	
	武帝	一四〇	大月氏中央亞細亞に國を建つ。	開化天皇即位。
		一三八頃	張騫西域より歸る。	
		一二六	漢の武帝古朝鮮國を滅ぼす。	
		一〇八		
	宣帝	前一〇〇		崇神天皇即位。
		九七	西域都護を置く。	
		六〇	新羅の建國。	
		五七		
		三七	高句麗の建國。	任那始めて入貢す。 垂仁天皇即位。
		三三		
		二九	百濟の建國。	
		一八		
		一四	（キリスト生る）	
新	王莽	後一		
		八	王莽の簒立。前漢亡ぶ。	
後漢	光武帝	二三	昆陽の戰。王莽亡ぶ。	
		二五	光武帝即位す。後漢興る。	
	明帝	四〇頃	カニシカ王出づ。	
	章帝	六七頃	佛教初めて支那に入る。	景行天皇即位。 日本武尊熊襲を征伐す。
		七一		
	和帝	八九	漢軍大に北匈奴を破る。	
		九七		
		九一	班超西域都護となる。	
		一〇〇		
	桓帝	一六六	ローマ・支那の交通開く。	神功皇后新羅を征す。
		一六七	後漢の黨錮。	
		一三一		成務天皇即位。
	獻帝	二〇八	赤壁の戰。	
		二二〇	後漢亡ぶ。魏の曹丕帝と稱す。	
三國		二二一	蜀漢の劉備帝と稱す。	
		二二九	吳の孫權帝と稱す。	
		二三四	諸葛孔明死す。	
西晉	武帝	二六三	蜀漢亡ぶ。	
		二六五	魏亡ぶ。西晉興る。	
		二八〇	吳亡ぶ。西晉の一統。	
		二八五		
		三〇〇		王仁來朝

◎一區劃は各、一百年間とす。

王朝	皇帝	年	事	時代
東晉		三一〇		朝鮮半島服屬時代
		三一三		
		三一六	西晉亡ぶ。	
		三一七	東晉興る。	
		三七二	佛教高句麗に傳はる。	
		三七六	苻堅揚子江北を一統す。	
		三八三	淝水の戰。	
		三八四	佛教百濟に傳はる。	
		四〇〇	法顯印度に赴く。	仁德天皇即位。
		四二〇	東晉亡び、宋興る。	
		四三九	後魏江北を一統す。南北朝始まる	
南北朝		四五六		雄略天皇即位。
		四七一	後魏の孝文帝立つ。	
		四七九	宋亡び、齊興る。	
		五〇〇		
		五〇二	齊亡び、梁興る。	
		五二七	達磨印度より梁に來る。	
		五三四		
		五四〇	後魏東西に分る。	
		五五二	北齊東魏を滅ぼす。	
		五五七	後周西魏を滅ぼす。陳梁を滅ぼす。	
		五六二	この頃より突厥強大となる。	
		五七七	後周北齊を滅ぼす。	
		五八一	後周亡び、隋興る。	
		五八九	隋陳を滅ぼして支那を一統す。	
		六〇〇		
		六〇三		欽明天皇即位。
		六一八	隋亡び、唐興る。	
隋	文帝	六二六	唐の太宗即位す。	佛教傳來
	煬帝	六二九	僧玄奘印度に赴く。	
		六三〇	東突厥亡ぶ。	日本府亡ぶ。
		六三二	マホメット歿す。	
	高祖	六三五	景教唐に入る。	
		六三七	律令を定む。	
	太宗	六四二頃	サラセン人ペルシヤを滅ぼす。	推古天皇即位。
		六四五		
		六四七	西突厥亡ぶ。	
		六五〇		小野妹子を隋に遣はす。
		六五五	百濟亡ぶ。	
		六六二	高句麗亡ぶ。	大化元年天智天皇即位。
		六六三	僧義淨印度に赴く。	
		六六四		
		六六七	則天武后帝位に即く。	
		七〇〇		遣唐使の始め。
		七〇一		
唐	高宗	七〇一	韋氏の亂。	大寶律令成る。 奈良奠都
		七一〇		
		七一二	唐の玄宗即位す。	眞備仲麻呂唐に渡る。
		七一三	渤海國興る。	
	玄宗	七一六		渤海始めて入貢す
		七二八		
		七五五	安祿山叛く（安史の亂始まる）。	
		七六三	安史の亂終る。	
		七六九		和氣清麻呂流さる。
		七八一		桓武天皇即位。
		七九四		安奠都
		八〇〇		
	德宗	八〇二		僧最澄唐に渡る
		八〇四	僧空海唐に渡る。	
	宗宗	八四五	武宗諸外教を禁ず。	
	憲宗	八九四		遣唐使停止
		八九七		醍醐天皇即位。
	武宗	九〇〇		
		九〇七	唐亡ぶ。	

五代（九〇七—九六〇年、約五十年間）

後梁—二代・十七年
後唐—四代・十四年
後晉—二代・十一年
後漢—二代・四年
後周—三代・九年

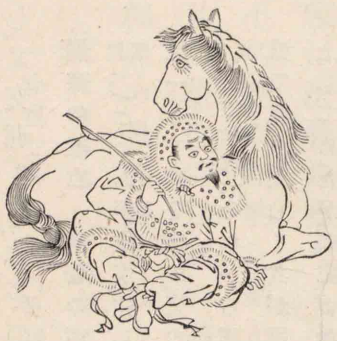
契丹の風俗　支那の古書による。

遼の興起（約一〇〇〇年前）

第三編　近古史（五代の初より明代の末頃に至る約七百年間。）

第十章　五代　遼・宋の對立　宋・金の對立

㊀五代　唐の滅亡の後、約五十年間（醍醐・朱雀・村上三天皇の世）に、揚子江の北方に後梁・後唐・後晉・後漢・後周の五國（即ち五朝）が相ついで忽ち興り、忽ち亡んだ。世に之を五代といふ。當時この外に獨立するものが十國ほどあつて頗る混雜してゐたが、なほ其の上に、契丹人が新に北方に起り、漸く南に下つて支那本部に侵入して來たので、益々さわがしくなつた。



㊁遼の興起　契丹人（蒙古族に屬す）は、もと内蒙古の東部に散在する蠻民であつたが、五代の初頃、其の酋長エリ＝アポキ（耶律阿保機）は之を統一して皇帝と稱し（西紀九一六年、醍醐天皇の世）、遂に蒙古の大部分を併せ、又東隣の渤海國を滅ぼした

渤海の滅亡
渤海—十四代・二百十五年

*貢物獻上といふも、其の實貿易で、下記の物産を我が國に持つて來て、我が國の産物を持ち歸つたといふ。

宋の太祖の像及び陵

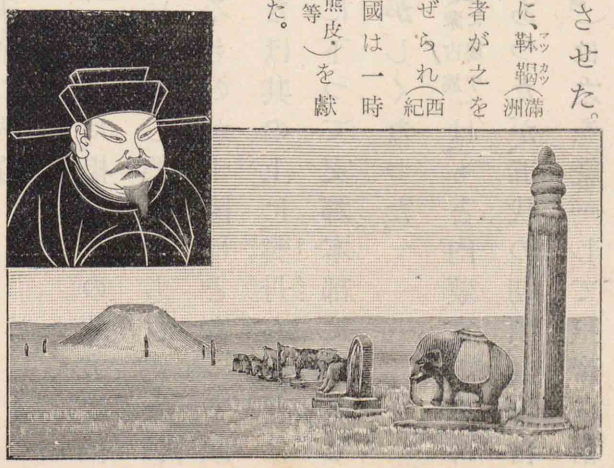
宋の太祖の即位（約九五〇年前）

宋の太宗の一統

（西紀九二六年、醍醐天皇の世）。之を契丹（即ち遼）の太祖（タイソ）といふ。其の子太宗（タイソウ）は國號を遼（レウ）と稱し、又支那をしてその北邊（今の北平附近）を割讓させた。

渤海の興亡　東晉の頃から、今の滿洲の東北部に、靺鞨（マツカツ）（滿洲族に屬す）といふ蠻族が住んでゐたが、大祚榮（タイソテイ）といふ者が之を統一して國を建て、唐の玄宗から渤海郡王に封ぜられ（西紀七一三年、奈良奠都の頃）、それから國號を渤海と稱した。この國は一時盛で、且つ久しく我が國とも交通し、屢*貢物（虎皮・熊皮・人參等）を獻上してゐたが、前記の如く遂に契丹に滅ぼされた。

㊂宋の一統　遼の太宗が支那の北邊を占領してから間もなく、後周（五代最後の朝）の將軍趙匡胤（テウキヤウイン）は衆に推されて帝位に即き、國號を宋（ソウ）と稱し、開封（カイホウ）に都した（西紀九六〇年、村上天皇の世）。之を宋の太祖といふ。太祖及び其の弟太宗は群雄を平げて支那本部を一統した（西紀九七九年）。是に於て、宋・遼の二國は南北に對立するやうになつた。



*刀伊の賊が我が國に寇したのは、遼の聖宗の時で、この賊は遼の領内の女眞人であつたといふ。

高麗の建國（約一〇〇〇年前）

新羅の滅亡

新羅—五十六代・約一千年

宋の太祖　宋の太祖は、武人出身であるが、平和主義を以て民を治めたので、唐末以來、兵亂に苦んでゐる人民は喜んで之に服從した。又太祖は性質仁孝で、節儉を重んじ、宮中に粗末な青布を以て緣（フチ）をとつた葦（アシ）の簾（スダレ）を垂れ、洗ひざらした衣を常服とし、常に皇女達を戒めて『汝等は富貴の中に育つたから、とかく福を粗末にする惡風があるが、よく注意して福を大切にせよ』と云ひ、其の美服することを禁じた。

遼
太祖①
太祖②
（三代略）聖宗⑥

㊃遼の隆盛　宋の太宗の次に其の子眞宗が立つた。眞宗の時、遼の聖宗（太宗の玄孫、ほぼ藤原道長・同時代の皇帝）は其の母承天（ショウテン）皇太后と共に大擧して南侵したが、宋は決戰の勇なく、年々多くの贈物（銀及び絹）を遼に與へることを約して、不名譽の和約を結んだ。かくて、遼は*聖宗の時、宋と有利な和約を結び、又高麗（カウリ）を降し、其の領土、東は日本海より、西は天山に達し、一時東方亞細亞（カウライ）の最强國となつた。

「高麗の興起　百濟・高句麗が亡んでから、暫くたつて新羅は朝鮮半島を統一し、國勢一時盛であつたが、後漸く衰へて遂に分裂した。王建（ワウケン）といふ者が之に乘じて起り、國號を高麗と稱し（西紀九一八年、醍醐天皇の世）、後、新羅を滅ぼして半島を一統した（西紀九三五年、平將門の亂の起つた頃）。これが即ち高麗の太祖である。其の後高麗は宋と好を通じてゐたが、やがて、前記の

如く、遼に降つて其の朝貢國となつた。

宋の仁宗の治世

㊄宋の仁宗及び神宗　宋の眞宗の子仁宗は名高い仁君で、よく國内を治めたが、外交は依然として振はず、遼に強迫されて贈物の額を增し、姑息の平和を保つてゐた。仁宗から一代を經て神宗（眞宗の曾孫の弟）が卽位した（西紀一〇六七年、後三條天皇卽位の頃）。神宗は年わかくして氣慨あり、外夷を征伐して國辱をすすがんと欲し、王安石の說に從ひ、富國・强兵を目的として種々の新法を行つたが、其の實効が擧がらない中に、屢〻外征軍を起し、悉く失敗に終つた。

宋の神宗の改革

王安石の像　清人の描いたものによる。

王安石　王安石はかつて仁宗に召されて賞花・釣魚の宴會に列し、誤つて釣に用ふる餌を食ひ、途中で之を悟つたが、しひて食ひ盡した。仁宗は之を見て、其の剛情で非を改めざるを惡み、之を重く用ひなかつた。然るに、神宗は王安石の博學・能文に感心し、其の富强の說に從つて改革を行つたが、遂に失敗に終つた。

㊅宋の黨爭　神宗の死後、其の母宣仁皇太后は政を攝し、名臣司馬光等

宣仁皇太后

宣仁皇太后の像　清國朝廷所藏の肖像畫による。

司馬光

司馬光の像　元代の石刻による（轉載を禁ず）。

宋の徽宗の失政

め、自分の實家に私することなく、司馬光に之を敬稱して『女中の堯舜』といふ。

司馬光　司馬光（卽ち司馬溫公）が幼時から英敏であつたことは、甕を破つて溺れる小兒を救つた話でもわかる。彼が宣仁皇太后に認められて宰相となるや、至誠を盡して政に當つたが、惜しいかな、僅に八箇月で病死した。この時人民は恰も父母を喪つたやうに悲しみ、其の繪姿（肖像畫）を揭げて祀り、之が爲に一時畫工で富をつくつたものがあつたといふ。

㊆宋・遼の衰微　宋は新舊兩黨の爭がある上に其の主徽宗（神宗の子）は愚で小人を用ひ、奢侈にふ

（卽ち舊法黨）を用ひて舊法を復し、一時天下をよく治めたが、其の死後、王安石の餘黨（卽ち新法黨）はまた用ひられ、かくて、新法黨・舊法黨の爭が三十餘年に及んだ。

宣仁皇太后　宣仁皇太后は賢明にして婦德高く、政を攝すること九年、公平・誠實を以て民を治め、司馬光等の賢人を用ひて善政を行つた。よつて、世ふ。

金の太祖の卽位（約八〇〇年前）

女眞の風俗

支那の古書による。

遼—九代・二百十年

北宋の滅亡

遼の滅亡

南宋興る（約八〇〇年前）

けつて政を怠つたから、國勢が益〻衰へ、遼もまた聖宗の後明君がなかつたので漸く衰へた。かかる時に當り、たまたま宋の東北方にある滿洲に一大强族が起つた。女眞（ヂョシン）人（ヂュルチン）は卽ちそれである。

八 金の興起　女眞人（靺鞨族の一部で、後に清朝を建てた滿洲人と同種族）は、もと遼に屬してゐたが、其の酋長アクダ（阿骨打）は遼の衰微に乘じて獨立し、自ら皇帝と稱し、國號を金と稱した（西紀一一一五年、白河法皇院政の世）。之を金の太祖といふ。太祖は宋の徽宗と同盟して遼をはさみ擊ち、ついで、其の弟太宗は遂に遼を攻め滅ぼした（西紀一一二五年、白河法皇院政の末年）。

是に於て、宋・遼の對立は一轉して宋・金の對立となつた。

九 宋・金の交戰　やがて、金の太宗は宋の衰微に乘じて南侵し、遂に其の國都（開封）を陷れ、上皇（徽宗）・皇帝（欽宗（キンソウ）、徽宗（ヰソウ）の子）以下三千餘人を捕へて北に歸つた（西紀一一二七年、崇德天皇の世）。其の後間もなく、宋の高宗（欽宗の弟）は卽位し、金軍を避けて江南に退き、都を今の杭州（カウシウ）（今の本名は杭縣、當時の名は臨安）に遷した（西紀一一三八年、保元の亂の前十八年）。世に高宗

岳飛と秦檜

岳飛の像と其の墓

像は元代の石刻による（轉載を禁ず）。墓は杭州に在り、墓碑（ボヒ）に題して宋岳鄂王墓といふ。鄂王は岳飛の死後に贈られた爵で、墓の門等は近時修造したものである。

以後を南宋、それ以前を北宋といふ。

南宋の忠臣岳飛（ガクヒ）は、力戰奮鬪、金軍を破つて舊都（開封）附近に達し、將に黃河の平原を恢復しようとしたが、高宗は奸臣秦檜（シンクワイ）の說を容れて金と和し、岳飛を殺した（西紀一一四一年、保元の亂の前十五年）。

岳飛　岳飛は忠勇ならびなく、金軍と戰つた時、大小百餘戰、未だかつて敗れたことがなかつた。其の秦檜に讒言（ザンゲン）されて、獄に下るや、獄吏が其の罪を責めたところ、岳飛は衣を裂いて背を示した。之を見ると『盡忠報國』の四大字の入墨があつたので、聞く者皆感動して涙を流したといふ。今でも其の墓に參拜する者が絕えない。

北宋（九代・一六八年）

- ① 太祖
- ② 太宗
- ③ 眞宗
- ④ 仁宗
- ⑤ 英宗
- ⑥ 神宗
- ⑦ 哲宗
- ⑧ 徽宗
- ⑨ 欽宗
- ① 南宋高宗

十 宋・金の平和　其の後、金の世宗（セイソウ）（金の太祖の孫）と、南宋の孝宗（宋の太祖の七世の孫）と時を同じくして君臨したが、この二帝はいづれも賢明であつたので、兩國の平和

金・宋の衰微

は三十餘年間續いた（我が源平時代の頃）。然るに、二帝の死後、兩國の平和が破れ、共に衰微しつつある時に當り、金の北方に一大强族が起つた。それは卽ち蒙古人である。

金
①太祖―□―⑤世宗
②太宗

第十一章　宋代の文化

宋は兵力は甚だ弱かつたが、文の方面は頗る優秀であつた。

禪宗の流行

蘇東坡（右）・朱子（左）の像
元代の石刻による（轉載を禁ず）。
朱子――朱子學
蘇東坡

㊀佛教・儒學・文學　宋代には禪宗（佛教の一派）が最も流行したが、當時の儒者は其の影響を受けて儒學の哲理を研究することになつた。この新學風から生れ出た學說は朱子（名は熹）に至つて大成したので、世に之を朱子學といふ。又宋代は唐代についで詩文が興つたが、文學者の中で最も名高いのは蘇東坡（名は軾）で、詩文共に長じた點に於て支那第一と稱せられてゐる。

花鳥圖　傳・徽皇帝筆

宋代の陶器

◎**花鳥圖**　唐代に漸く發達した支那の繪畫は、宋代に至つて益〻進歩し、名人・妙手が多くあらはれた。そして宋代繪畫の進歩は畫院の力によることが多い。宋は國初から翰林圖畫院を置き、天下の名高い畫家を集め、祿を與へ、位を授け、以て宮殿・寺（佛寺）・觀（道教の寺）にゑがかしめた。世にこの派の畫を院畫と稱する。徽宗は皇帝の身を以て甚だ畫を好み、名作を世に殘した。こゝに掲げた花鳥圖は徽宗の傑作として甚だ有名なもので、世に院畫體の好標本と稱せられてゐる。

◎**宋代の陶器**　支那の陶器は、今日世界的の名聲を博してゐるが、其の製造業の大に發達したのは、宋代からである。抑も、支那では、太古から銅器が專ら用ひられてゐたが、宋代に至つて陶器製造業が大に興り、その頃から、陶器は銅器に代つて專ら用ひられるやうになつた。そして、我が鎌倉時代に、加藤景正が宋に行つて陶器製造法を傳習し、歸つて瀨戸燒の祖となつたことは、あまねく人の知るところである。表面の圖は、宋代陶器の優秀なものを寫したのである。

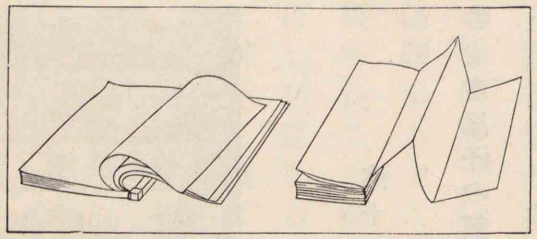
徽宗の奬勵
畫家の輩出

書籍の變遷

右は折本で、唐の頃から行はれ、今でも佛書は大抵この形を傳へてゐる。左は普通の書籍で、唐の末頃から一般に行はれてゐる。

活版印刷術

朱子　古より、孔子・孟子について、後世に最も多く感化を與へた儒者は恐らく朱子であらう。朱子は南宋の中頃の人で、其の七十一年間の生涯は、實に模範的の學者生活であつた。



㊁藝術　宋の徽宗は、甚だ繪畫を好み、畫院を設けて之を奬勵した結果、其の名手が多く現はれた。宋代の畫家中、李龍眠（北宋、佛畫の名手）・夏珪・馬遠（共に南宋、山水畫の名手）・牧谿（時代不明、水墨畫の名手）は最も名高く、徽宗もまた名畫を殘した。又支那の書籍は初め悉く寫本であつたが、唐代に木版の印刷が始まり、北宋時代に至つて、活版印刷術が發明され、民間に書物屋も現はれた。又茶道は唐の中頃から起り、宋代に至つて大に流行し、これにつれて陶器の製法も頗る進歩した。

宋代の文化と日本　我が鎌倉時代の名僧榮西（臨濟宗（禪宗の一）派を傳へた僧）及び其の弟子道元（曹洞宗（禪宗の一）派を傳へた僧）の留學したのは、南宋の孝宗の時で、これから禪宗は我が國に行はれた。又宋代の畫法は我が國に傳はり、其の感化を受けて、後に東山時代（即ち明代）に至り、雪舟等の大畫家が出た。又朱子學は我が國に傳はり、德川時代に大

南宋時代の版畫

支那歷代の名高い美人（右より綠珠・王昭君・趙飛燕・班姬）をえがいたもので、日本の浮世繪に類し、甚だ珍しいものである。

蒙古人

テムヂンの興起

＊蒙古の本に「母夫人の野蒜（ヒル）やらっきようで養つた子どもは帝王を望むに至つた」と書いてある。

第十二章　元の興亡

㊀ 成吉思汗の創業

蒙古人（モウコ・モンゴル）（蒙古族に屬す）は、もと外蒙古のオノン河（黑龍江の上流）の上流地方に住んでゐた蠻族で、初め遼に、次に金に服屬してゐたが、其の酋長テムヂン（鐵木眞）の代に及び、俄に興るやうになつた。テムヂンは幼にして父を失ひ、母＊と共に困難の間に奮勵し、漸く附近の諸部落を

成吉思汗の卽位（約七〇〇年前）

蒙古以外の諸國

成吉思汗の外征

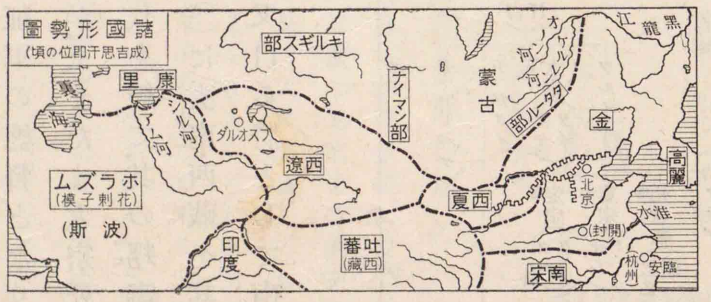
成吉思汗の死

成吉思汗の像

ペルシヤに傳はつた肖像畫による。

併せ、遂に內外蒙古の大部を統一し、大汗（ダイカン）（大君主の意）の位に卽き、成吉思汗（ジンギスカン）（强盛なる君主の意）と號した（西紀一二〇六年、將軍源實朝の時時に年五十二）。當時、蒙古の外に、南宋（漢族の建てた國）・金（滿洲族の建てた國）・西夏（西藏族の建てた國）・西遼（セイレウ）（遼の遺族卽ち蒙古族の一派の建てた國）・ホラズム（花刺子模、トルコ族の建てた國）等の諸國があつた。成吉思汗は破竹の勢で、これらの諸國を伐ち、西進して西遼の地を取り、ホラズムを滅ぼし、部將をして遠くロシヤを侵さしめ、又東進して西夏を滅ぼし、更に金を討たうとして進軍中に病死した（西紀一二二七年、執權北條泰時の時時に年七十三）。之を蒙古（卽ち元）の太祖といふ。

成吉思汗　支那の歷史家は、成吉思汗を『深沈（シンチン）にして大略あり。兵を用ふること神の如し』と評してゐる。されど、彼は獨り軍事のみならず、政治にも長じ、其の定めた法則の中に、後世の模範とすべきものが頗る多いといふ。



金の滅亡

金—九代・百二十年

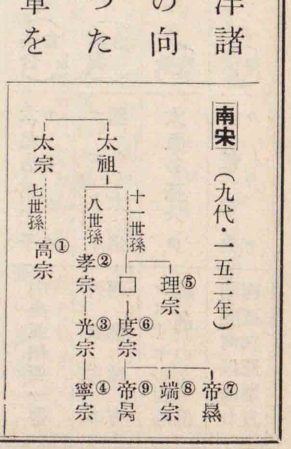
憲宗の外征

世祖の卽位

國號を建つ

㈡太宗及び憲宗の外征　太祖の子太宗は、先づ南宋と同盟して金を攻め滅ぼし（西紀一二三四年、執權北條泰時の時）、都をカラコルム（喀喇和林。外蒙古のオルホン河のほとりに在る）に奠め、次に歐洲遠征軍を起した（西紀一二三六年）。バツ（拔都。太宗の兄の子）はこの遠征軍の總督となり、ロシヤを蹂躪し、進んで歐洲の中部に攻め入つたが、たまたま太宗死去の報に接して歸途についた（西紀一二四二年）。太宗の後一代を經て、其の甥憲宗が卽位した（西紀一二五一年、執權北條時賴の時）。憲宗は弟クビライ（忽必烈）に雲南・西藏を、其の弟クラグにペルシヤ・小亞細亞などを侵略させ、又自ら將として南宋を討つたが、中途で病死した。

㈢世祖の外征　憲宗の次に、弟クビライは大汗の位に卽いた（西紀一二六〇年、龜山天皇卽位の頃）。之を元の世祖といふ。世祖は都を今の北平（當時の名は大都）に遷し、ついで、國號を建てて元と稱し（西紀一二七一年、執權北條時宗の時）、又盛に外征を企て、南宋を討つて其の忠臣文天祥等をとりこにし、遂に之を滅



南宋の滅亡（約六五〇年前）

文天祥の像

宋丞相信國文公像。北京の文山祠堂（文天祥の死處に建てたものと傳ふ）に在る。

元の領土

ぼし（西紀一二七九年、弘安の役の前年）、なほ高麗・印度支那諸國・南洋諸國（ジャヴァ・スマトラ等）をも服屬せしめた。かくて蒙古人の向ふ所、暴風・猛火の如く、敢て敵する者はなかつたが、獨り我が國は、前後二回（文永の役及び弘安の役）、元の大軍を逆擊して大勝利を博した。

文天祥　文天祥は、幼時學校に於て、鄉里（今の江西省吉安府）の立派な先輩達の像を祀つてあるのを見て大に感奮し、『死してこの間に祀らるるにあらざれば男兒でない』といつたが後果して宋の忠臣として永く祀られるやうになつた。有名なる『正氣の歌』は彼が元軍に捕はれ、今の北平の獄中にゐた時の作である。

㈣元の極盛　元（卽ち蒙古）は、成吉思汗の卽位以來七十餘年間に、亞細亞の廣大なる部分や歐羅巴の一部を征服し、世界空前の大帝國となつた。世

元の世祖の像
山東省孔子廟の府庫にある肖像畫による。支那風の帝王の服を著け、蒙古風の辮髪に結び、一種の笠を戴いてゐる樣である。

祖はこの大帝國に君臨し、元の皇帝として、支那本部・滿洲及び蒙古の大部分を直領し、高麗・西藏・印度支那諸國等を屬國とし、又蒙古の大汗として左記の四汗國を間接に支配した。かくて、蒙古人の盛名が東西に傳はり、其の名稱は、いつの間にか黃人種の總稱となつた。

元帝の直領地・屬國及び四汗國

國名	始祖	領土
チャガタイ（察合台）	太祖の第二子チャガタイ	中央亞細亞一帶
オゴタイ（窩濶台）	オゴタイ即ち太宗	外蒙古の西部地方
キプチャク（欽察）	太祖の孫バツ	シベリヤの西部歐洲の東部
イル（伊兒）	世祖の弟クラグ	印度河以西の西亞細亞地方

㊄ 東西の交通　蒙古の領土が歐亞兩大陸に跨るやうになつてから、東西の交通が大に開け、商人及び旅行者の往來が頗る盛になつたが、其の中で最も名高いのはマルコ＝ポーロ（Marco Polo）（イタリヤのヴェニスの人）である。そして、東西交通の結果、双方の文化が互に傳はつたが、特に磁針・火藥・製紙及び印刷術等の西傳は、歐洲の社會に大影響を與へた。

マルコ＝ポーロ

東洋文化の西傳

マルコ＝ポーロ　マルコ＝ポーロは、年十七の時、父と共にヴェニスを去つて元に來り、留まること十七年、世祖に仕へて信任されたが、四十一歲の時、故鄕に歸り、やがて、有名な『東方見聞錄』を公にした。この書中に、元軍がジパング（支那語日本國のなまりでジャパン）（Zipangu）といふ國を擊つて大敗したことや、この國に黃金・珠玉を多く產することなどを書いてあるが、これが非常に西洋人の慾心を刺戟した。彼のコロンブスがアメリカを發見するに至つたのも、實はこの書を讀み、日本に到らんとして偶然發見したものだといふ。

マルコ＝ポーロの東洋談の圖
マルコ＝ポーロは歸國の後、ジェノアとの戰に捕はれ、獄中に於て東洋の談話をしたが、それを集錄したのが東方見聞錄である。圖中立つてゐるのがマルコ＝ポーロである。

衰亡の原因

明の太祖の卽位（約五五〇年前）

㊅ 元の衰亡　元は世祖の時を隆盛の絕頂（ゼツケイヤウ）とし、それから後、(1)諸汗國の叛亂、(2)喇嘛（ラーマ）（喇嘛教の僧侶）の橫暴、(3)財政の困難等によつて漸く衰へた。やがて、漢人は元の惡政を怨んで、叛亂を起したが、その中で朱元璋（シユグヱンシヤウ）は勢最も强く、遂に帝位に上り、都を今の南京（ナンキン）（卽ち江寧、當時の名は金陵（キンリヤウ））に奠（サダ）め、國號を明と稱した。之を明の太祖（洪武（コウブ）帝）といふ。太祖は部將を遣はして北伐せしめたが、時の元帝（順帝）は國都（今の北平）を捨てて蒙古に逃げ去り、かくて、元朝は

元の滅亡

蒙古一四代・五十五年。元一十一代・百九年。合計十五代・百六十三年

明の太祖

山東省孔子廟の府庫にある肖像畫による。

太祖の一統

遂に亡んだ（西紀一三六八年、後龜山天皇卽位の年）。

明の太祖　明の太祖は今の安徽省の人で、家甚だ貧しく、年十七の時、大飢饉・大流行病の爲め、一家殆ど死に絶えたので、やむを得ず、寺に入つて僧となり、遂に乞食にまで成り下つた。たまたま元末の騷亂が始まり、群盜が四方に起るに及び、彼も盜賊の群に入つたが、其の頭は彼の容貌の奇異なのを見て之を重用し、其の養女を以て之にめあはした。これが卽ち後の有名なる馬皇后である。やがて、其の頭が死んだので、彼は代つて盜賊の頭となり、漸く立身して遂に皇帝となつた。

第十三章　明の盛衰

㊀明の一統　明の太祖は、卽位の後凡そ二十年を經て、支那本部を一統し、元の惡政を改め、漢人の衣冠を復した。かくて、漢人はまた漢人出身の天子を戴くことになつた。

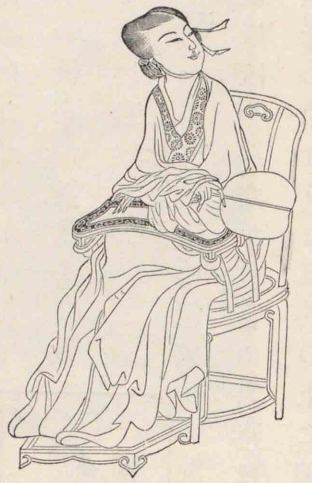
馬王后　明の太祖の成功は、半其の皇后馬氏の內助によると稱せられてゐる。皇后は仁慈・勤儉・謙遜・好學にして婦人の模範と稱せられた。皇后は最高貴の身分となつて後も、太祖の食膳は宮女に任せることなく、必ず自らととのへ、『かくするのは、一は主上の御健康の爲、一は過失のあつた場合に、宮女をして主上の御叱りを受けさせぬためである』といつた。明代の宮中が唐代などの宮中と異なり、比較的清肅であつたのは、主として馬皇后の德化の力であるといふ。

馬皇后の像

明太祖功臣圖による。

成祖の簒立

明の極盛時代



㊁明の隆盛　太祖の死後、孫惠帝位をつぎ、諸王の强大なるを憂ひ、其の封地を削つた。帝の叔父燕王は大に之を憤り、兵を今の北平（當時の名は燕京）に擧げて南侵し、宦官の內應を得て遂に國都（今の南京）を陷れ、自立して皇帝となつた（西紀一四〇二年、足利義滿執政の世）。之を成祖（永樂帝）といふ。成祖は都を今の北平に遷し、北は韃靼（元の遺衆の建てた國）を征し、南は、安南を併せ、南洋諸國を從へ、大に國威を輝かした。成祖及び其の子仁宗・孫宣宗の三代・三十餘年間（將軍足利義持・義量・義教の時）は、實に明の極盛時代であつた。

㊂明の衰微　明は、宣宗の後、內には宦官の禍があり、外には北虜（卽ち蒙古の遺衆）。

北虜・南倭

明の成祖の像
清國朝廷所藏の畫像による。

*倭寇といふも、其の實十中の七八は支那の海賊で、日本人は其の二三に過ぎなかつたといふ。

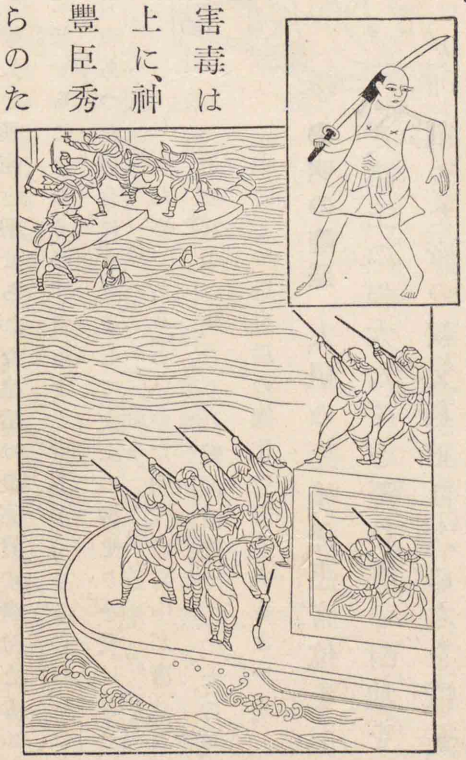
倭寇の衰微

宦官の弊害

倭寇及び明軍（世宗の時）の倭寇討伐の圖
明代の書籍による。

明の神宗と我が出征軍

求に應じて之を抑へたので、一時衰へた。然るに、應仁の亂の頃から、また盛になつたが、やがて、明の世宗の討伐を受けて大に衰へた（西紀一五六三年、補狹間の戰の頃）。かくて、倭寇の慘害はほぼやんだが、宦官の害毒は益〻甚しくなり、なほ其の上に、神宗は朝鮮を助けて我が豐臣秀吉の出征軍と戰ひ、それらのため南倭（即ち倭寇）の患があり、國勢が漸く衰へた。抑も我が鎌倉時代の末頃（即ち元の中頃）から、我が邊民や浮浪の徒等は、屢〻支那・朝鮮の海岸を侵したが、明人は之を稱して倭寇といつた。倭寇は、明の成祖の時、我が足利義滿が其の要



朝鮮の太祖の像
朝鮮咸鏡南道の永興にある太祖の廟に奉祀する圖像による。因にいふ。永興は太祖の興つた處である。

高麗の滅亡（約五三〇年前）
高麗―三十四代・四百七十五年

朝鮮の役

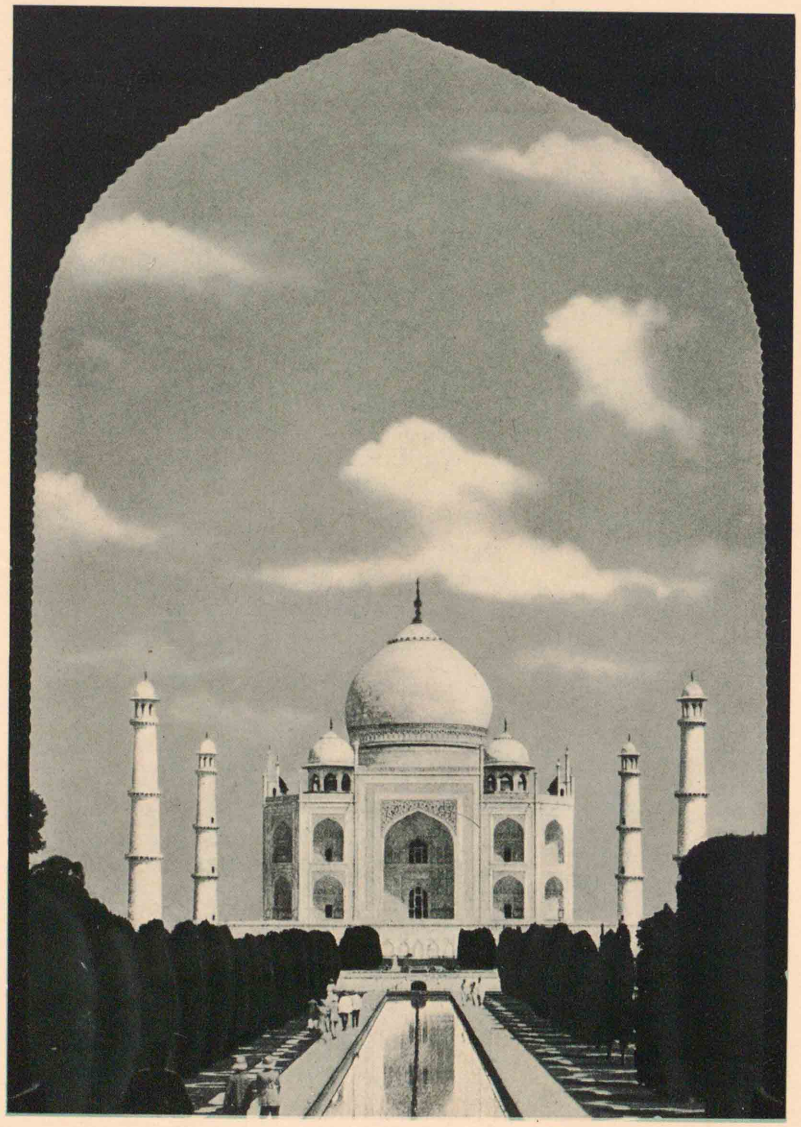
めに國力が大に疲弊した。かかる時に當り、滿洲人は新に北方に起り、漸く南下して明に迫つて來た。

㊃ 朝鮮の興起

高麗は、元の滅亡後に卽き、國號を朝鮮と稱した（西紀一三九二年、吉野朝最後の年）。之を朝鮮の太祖（今の李王家の祖）といふ。太祖は都を漢城（今の京城）に奠め、明の太祖から封册（爵位封祿を受ける時の詔勅）を受けて其の藩屬國となつた。太祖の卽位後、ちやうど二百年を經て、宣祖（太祖の孫）の時に至り、我が豐臣秀吉の大兵をかうむり、辛くも滅亡を免れたが、その國力が甚だしく疲弊した。

明（一）

太祖①（洪武帝）―□―惠帝②（建文帝）
成祖③（永樂帝）―仁宗④―宣宗⑤―英宗⑥⑧
代宗⑦
憲宗⑨―孝宗⑩―武宗⑪
□―世宗⑫（嘉靖帝）―穆宗⑬―神宗⑭（萬曆帝）



タジュマハール

第十四章　蒙古帝國の復興　西洋人の東航

諸汗國の衰微

チムールの興起（約四〇〇年前）

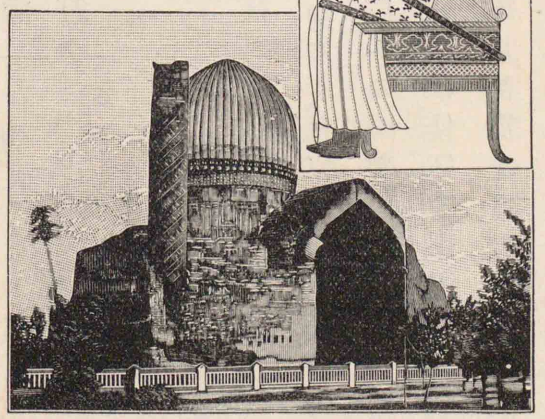
*チムールは帝位に登らなかつたけれども、かくいふのである。

チムールの像と其の廟

廟はサマルカンドに在つて、チムールの靈柩を安置してゐる。

チムール帝國の滅亡

一　チムールの帝國　東方に於て元帝國が衰亡した頃、西方に於て其の支流の諸汗國もまた漸く衰微した。この時、中央亞細亞に英雄チムール（帖木兒、成吉思汗と祖先を同うす）が現はれて諸汗國を一統し、中央亞細亞・北印度・ペルシヤ・小亞細亞に跨（マタガ）る第二の蒙古帝國を建てた。世に之を*チムール帝國といふ。チムールは更に明（成祖の時）を伐たうとして東進中に病死し（西紀一四〇五年、將軍足利義持の時、時に年七十一）、その大國は忽ち分裂して遂に亡んだ。



チムール　チムールは初め失敗して諸方を流浪（ルラウ）してゐる時、或る日、一匹の小蟲が草をよぢ登らう

ダジュ=マハールはアグラの附近に在る。アクバル大帝の孫シャー=ジハン帝がその愛妃の記念の爲に建てた廟で、凡そ二萬人を使役し、二十年を經て出來あがつたものだといふ。この建物はおもに白大理石を用ひ、所々に瑪瑙・珊瑚・碧玉の類をはめこみ、その結構壯麗を極め、晴天の日は、日光これに反射して燦然たる光を放ち、月明の夜は月光これに映じて青光を發し、倒影庭前の池水に入つて金波を動かし、その美觀實に筆紙に盡し難い。實にモゴル帝國全盛期の好記念物で又實に回教建築の好標本である。

(註) アグラはアクバラバードともいふ。「アクバルの都」の意味である。アクバル大帝がこゝに都を奠めてから凡そ九十年間、モゴル帝國の首府であつた。

バベル

モゴル帝國の興起
(約四〇〇年前)

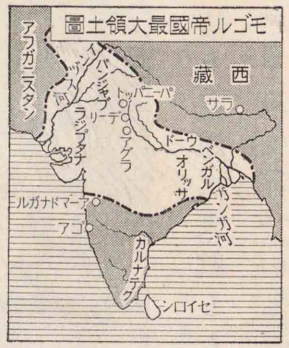
アクバル大帝

アクバル大帝の像

タジュ=マハール

として、屢風のためにふるひ落されたにもかゝはらず、遂に屈しないで其の目的を達したのを見て、大に感激し、それから千辛・萬苦をしのいで、遂に大業を成就したといふ。

(二)モゴル帝國　チムールの死後凡そ百年、其の五世の孫バベル(Baber)は中央亞細亞から印度に行き、その北部を征服して第三の蒙古帝國を建てた(西紀一五二六年、我が戰國時代騷亂の最中)。これが卽ちモゴル(英臥兒。モンゴル(蒙古)のなまり)帝國である。その孫アクバル(Akbar)(織田信長・豐臣秀吉とほぼ同時代の皇帝)は東・西・北の三印度を統一し、善政を行ひ、文學を奬め、大に國民の心服を得た。世に之をアクバル大帝といふ。大帝の卽位後凡そ百五十年間は、モゴル帝國の隆盛時代で、種々の工藝が大に進歩した。彼の名高いタジュ=マハール(Taj Mahal)は其の代表的の



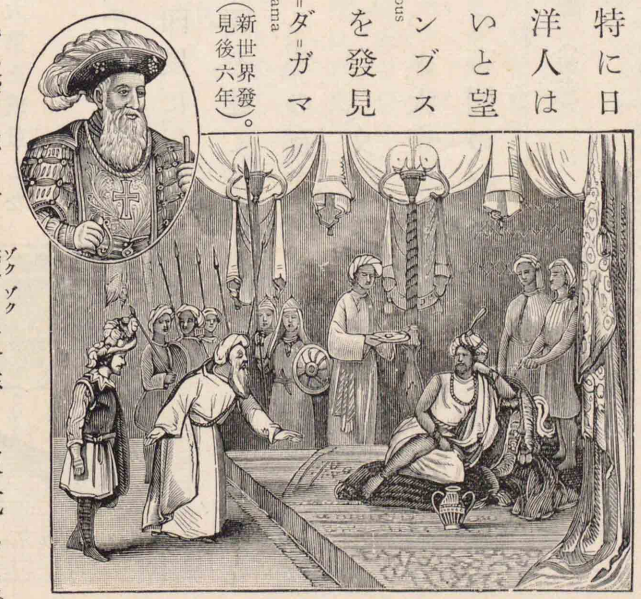
モゴル帝國　(前半)

①バベル—②フマユン—③アクバル—④ジェハンギル—⑤シャー=ジェハン—⑥アウランゲゼブ

タジュ=マハール

一大工藝品で、觀客をして今なほ當時の繁榮をしのばしめる。

㊂印度新航路の發見　蒙古人の西征以來、東方の事情が漸く西洋人に知られ、かのマルコ・ポーロが東洋特に日本の富めることを說いてから、西洋人はしきりに東洋に行つて富を得たいと望んだ。そして、其の目的を以て、コロンブス(Columbus)(イタリヤのジェノア人)は西航して偶然新世界を發見し(西紀一四九二年、明の中頃、我が戰國時代)、ついで、ヴァスコ・ダ・ガマ(Vasco da Gama)(ポルトガル人)は東航して、印度に達した(新世界發見後六年)。これはモゴル帝國の創建(サウケン)前約三十年(明の中頃、我が戰國時代)のことで、西力東侵の歷史はこの時に始まつた。



新世界・新航路發見の因由

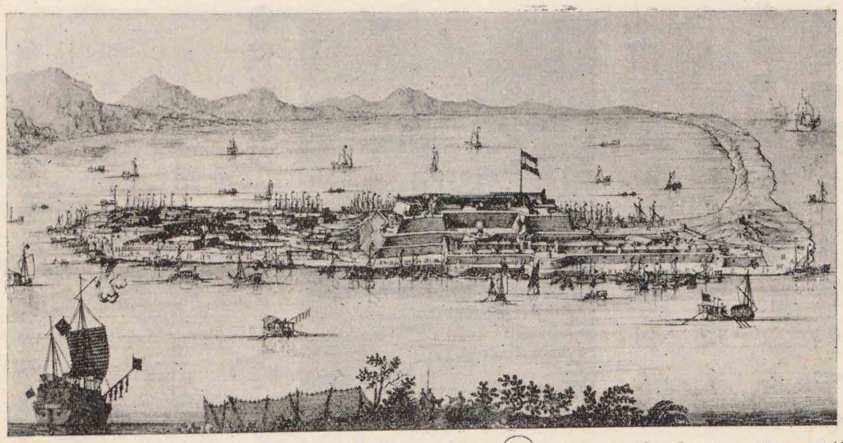
ヴァスコ・ダ・ガマの像と其の印度のカリカット(ガマの初めて達した地名)の王に謁見する圖

新世界・新航路の發見(約四三〇年前)

葡人ゴアに據る(約四〇〇年前)

㊃西洋人の東航　印度新航路の發見後、西洋人は續々(ゾクゾク)東洋に來航した。

(一)ポルトガル人(葡萄牙人)(Portugal)は最初に來航し、印度のゴア(Goa)を取り(西紀一五一〇年、モゴル帝國創建前十五年)、ここを根據地として益々東進し、明と貿易を開き、又我が國にも來航した。(二)イスパニヤ人(西班牙人)(Hispania(Spain))はポルトガル人よりも少し後れて東洋に來り、フィリッピン(Philippin)群島を占領し(西紀一五六五年、我が戰國時代)、我が國にも來て貿易した。(三)オランダ人(和蘭人)(Hailand)は葡・西兩國人よりも後れて東洋に來り、漸く其の勢力範圍を侵し、南洋諸島を奪ひ、一時臺灣をも占領し、島原の亂の後は日本との貿易を獨占し、久しく極東貿易の覇權を握つた。かくて、西洋諸國の東洋侵略が始まり、黃・白兩人種の競爭が漸く烈しくなつて來た。



西班牙人の東航

和蘭人の東航

和蘭人の據つた臺灣の城市(當時の光景)

この城市はゼーランヂヤといひ、其のあとは今の臺南の西南の安平に在る。

臺灣と支那　臺灣が支那と關係を有し始めたのは隋代である。その後、兩者の關係は久しく絕えたが、明

代に至つてまた密接となり、支那人の移住する者が漸く多くなつた。明の末頃、倭寇は一時この島に據つて之を高砂と稱したが、やがて、オランダ人はこれを占領して遂に清代に至つた。

第十五章　元・明時代の文化

㈠ 儒學及び文藝　元・明時代には、朱子學は最も盛であつたが、明の中世に至り、王陽明（名は守仁）が現はれ、朱子學派に對して別に陽明學派を開いた。又元・明時代の詩文は唐・宋時代に及ばないが、戲曲・小說は大に發達し、其の名作は今もなほ普く世人に愛讀せられ、一般人心に非常な影響を及ぼしてゐる。

王陽明—陽明學派

王陽明の像
明代の石刻による。

戲曲・小說の發達

又明の沈石田（名は周）・仇英は畫家として、元の趙子昂・明の文徵明は書家として、いづれも甚だ名高い。

書畫の大家

㈡ 宗教　元・明時代には、佛教も道教も衰へ、獨り、喇嘛教のみ盛んであつた。喇嘛教は佛教の一種で、唐の中頃、西藏に起り、頗る低級のもので

喇嘛教
＊其の僧侶を喇嘛といふ。

あるが、元の世祖が之を尊信してから、漸く內外蒙古地方にも流行し、其の法主は達賴喇嘛と稱し、今でも西藏の政治・宗教兩方面の權を握つてゐる。又、景教はいつの間にか亡んだが、元の世祖の時、羅馬舊教（卽ち天主教、キリスト教の一派）の僧侶は、北京に來て布教した。明の末頃、西洋人の東航するに及び、舊教派の僧侶は續續支那に來たが、其の中マテオ＝リッチ（伊太利人、漢譯名利瑪竇）は、明の神宗の許可を得て、北京に會堂を建て、布教に從事すること三十年に及び、明人徐光啓等は其の信者となつた。かくて、キリスト教は再び支那に流行するやうになつた。

Matteo Ricci

大學
大學之道在明明德
在新民在止於至善

達賴喇嘛

趙子昂の筆蹟
大學の首句。大學之道。在明明德。在新民。在止於至善。

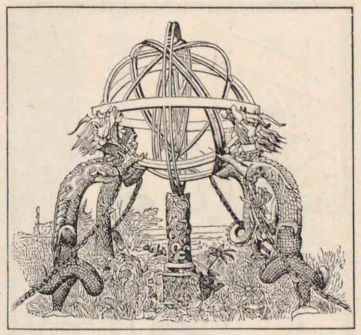
羅馬舊教の傳來

マテオ＝リッチと徐光啓

マテオ＝リッチ（左）と徐光啓（右）

㈢ 科學の傳來　元・明時代の文化に異

圖俗風代明



元代の天球儀

元の世祖の時の製作に係り、天文觀測に用ひたものだといふ。これも西洋科學の影響を示すもので、現に北京の天文臺（世祖の時創設）の構内に在る。

彩（サイ）を添へたものは、西洋科學の傳來である。元代から西洋科學は漸く支那に傳はり、其の影響を受けて郭守敬（クワクシュケイ）（元の世祖の時の人）のやうな立派な曆學者が現はれた。又、明の末頃に支那に來た天主教の宣教師等は、西洋の天文・曆學・數學・砲術等を傳へ、支那の文化に特殊（トクシュ）の影響を與へた。

表面の圖は、明代に造られた七寶燒（東京市松山米太郎氏藏）の繪畫を複寫したもので、明代婦人の風俗及び明代陶器の精華を見るに最も良い材料である。抑も、支那に於ては、太古から銅器が專ら用ひられてゐたが、宋代に至つて陶器製造業が大に興り、この頃より陶器は銅器に代つて專ら用ひられ、それから明代に至つてこの業が益〻發達し、遂に支那の陶器は世界的名產の譽れを博するやうになつた。我が加藤景正（鎌倉時代の人、瀨戸燒の祖）が宋に渡り、又、祥瑞五郎太夫（室町時代の人、唐津燒の祖）が明に行き、各〻陶器製造の新法を傳へたことは、あまねく人の知る所であるが、我が國の七寶燒の方法もまた明から傳つたものである。

宋					
蒙古卽元					
太祖					
元太祖	一二〇一	西遼亡ぶ。			
	一二〇六	蒙古のテムヂン成吉思汗と稱す。			
	一二一九	……			
	一二二〇	ホラズム亡ぶ。			
	一二二一	……			
	一二二四	カルカ河畔の戰。			
	一二二七	西夏亡ぶ。成吉思汗死す。			
太宗	一二二三四	金亡ぶ。			
	一二三六	バツ西征の途に上る。			
	一二四一	……ワールスタットの戰。			
	一二四二	……	泰時卒す		
	一二五〇				
憲宗	一二五三	……	日蓮法華宗を唱ふ		
	一二五四	フラーグ西征の途に上る。			
	一二五八	バグダード王國亡ぶ。			
世祖	一二六三	……	時賴卒す		
	一二六四	世祖今の北京に都す。			
	一二七一	蒙古國號を立てゝ元といふ。	文永の役		
	一二七四	元日本を襲うて敗る。……			
	一二七五	マルコ＝ポロ元に來る。			
	一二七九	南宋亡ぶ。	弘安の役		
	一二八一	元日本を襲うて大敗す。……			
	一二八三	元ビルマを征す。……			
	一二八四	……	時宗卒す		
	一二九二	元ジャヴァを征す。			
	一三〇〇				
倉時代					
清					
明	一三六九	チムール都をサマルカンドに奠む			
宗	一六〇一	……オランダ人長崎に會堂を築く。			
	一六〇三	……			
	一六〇九	……			
清太祖	一六一五	後金（卽ち清）の太祖卽位す。……			
	一六一九	蘭人バタヴィヤに總督府を開く。			
	一六二三	……			
太宗	一六二四	……一六六一。蘭人臺灣に據る。			
	一六二八	……			
	一六三七	……一六三八。……			
	一六四四	明亡ぶ。			
	一六五〇				
聖祖	一七〇〇				
世祖	一六五八	……一七〇七。アウランゲゼブ帝の世。			
江戸時代					

◎一區劃は各〻五十年とす。

◎一區劃は各〻五十年間とす。

概說　近古期

（唐の滅亡後より清の太祖の卽位前に至る。我が平安時代の中頃（醍醐天皇）より江戸時代の初頃（將軍德川秀忠）に至る。約七百年間）

近古期は、大勢の上から觀察して、左の三期に分けることが出來る。

(一)漢族・異族競爭時代（五代・宋（北宋・南宋）の時代。卽ち宋・遼對立及び宋・金對立時代。我が平安時代の中頃より鎌倉時代の初頃（將軍源實朝）に至る。約三百年間。）　この時代に、漢族は南方に據つて國（北宋・南宋）を建て、異族（契丹・女眞）は北方に據つて國（遼・金）を興し、相對立して互に勝敗を爭つた。そして大體漢族は文に於て優り、異族は武に於て優つてゐた。

(二)蒙古族極盛時代（蒙古の勃興より元の滅亡に至る。我が鎌倉時代の初頃より室町時代の初頃（將軍足利義滿）に至る。約百五十年間。）　この時代に、蒙古族は漢族其の他の多くの民族を征服し、歐洲に遠征を試みて白人種を壓倒し、世界空前の大帝國を建てた。この時代は實に蒙古族の極盛時代で、又實に黃人種の最盛時代であつた。この時代に、西方の文化は東方に傳はり、東方の文化は西方に傳はつた。そして西洋人は其の傳へた東方の文化を利用して、發展の資料とし、以て今日の盛況を開くに至つたのである。

(三)漢族復興時代（明の興起より其の末頃に至る。我が室町時代の初頃より江戸時代の初頃（將軍德川秀忠）に至る。約二百五十年間。）　この時代に、漢族は全く異族（蒙古人）の束縛を脫して、再び漢人の天子（卽ち明の帝室）に統治せられた。又この時代には、支那の外にチムール・バベル等の英雄が起つて、各〻別個の帝國を建てた。

第三年表　近古史年表

支那王朝	支那皇帝	西紀	東洋史	日本史	日本時代
唐	北宋	九〇一	……唐亡ぶ。	菅原道眞流さる。	平安
渤海	太祖	九〇七	契丹のエリ＝アボキ、皇帝と稱す。		
契丹		九一六	高麗興る。		
		九二七	契丹渤海國を滅ぼす。		
		九三五	高麗新羅を滅ぼす。		
		九三七	契丹國號を立てゝ遼といふ。		
		九四〇	……遼の太宗後晉を滅ぼす。	平將門誅せらる。	
		九四六			
		九五〇			
		九六〇	宋興る。		
	太宗	九七九	宋の太宗支那を一統す。		
		九八〇	宋の太宗安南を征して失敗す。		
		九八三	一〇三一。遼の聖宗の世（遼の最盛時代）。		
		九九四	高麗遼に降る。		
		一〇〇〇			
	眞宗	一〇〇四	澶州の役。宋遼に贈物を約して和す。		
		一〇一六	………		
		一〇一九	………		
	仁宗	一〇二七	………	藤原道長攝政となる。	
		一〇三八	西夏國興る。		
		一〇四三	西夏宋と和す。	刀伊の賊來寇す。	
		一〇五〇		藤原道長薨ず	
元	成宗	一〇〇一頃	オゴタイ汗國亡ぶ。		鎌倉時代
		一三〇六			
	順宗	一三一八	………	後醍醐天皇卽位。	
		一三二四	………	正中の變	
		一三三一	………	元弘の亂起る。	
		一三三三	………	北條氏亡ぶ。	
		一三三六	………	吉野朝廷始まる。	
		一三五〇			
	明太祖	一三五八	………	尊氏死す	建武中興及吉野時代
		一三六八	明興り、元亡ぶ。		
		一三六九	チムール都をサマルカンドに奠む		
	惠帝	一三九二	高麗亡び、朝鮮興る。	吉野朝廷終る。	
		一三九八	チムール印度の一部を降す。		
		一三九九	燕王（後の成祖）兵を擧ぐ。		
		一四〇〇			
	成祖	一四〇一	………	義滿明に通ず。	室
		一四〇二	明の成祖の簒立。アンゴラの戰。		
		一四〇五	チムール死す。鄭和南洋に航す。		
		一四〇六	明安南を併合す。		
		一四〇八	………	義滿薨ず	
	宣宗	一四二七	安南明より獨立す。		
	英宗	一四四九	土木堡の變。	義政將軍となる。	
		一四五〇			

◎一區劃は各〻五十年とす。

| 宋 | 南 | 宋 | 遼 | 即 | 即 | 即

第四編　近世史（清の太祖の即位より、現時に至る約三百年間。）

第十六章　清の興起及び其の盛世

清の興起（約三〇〇年前）

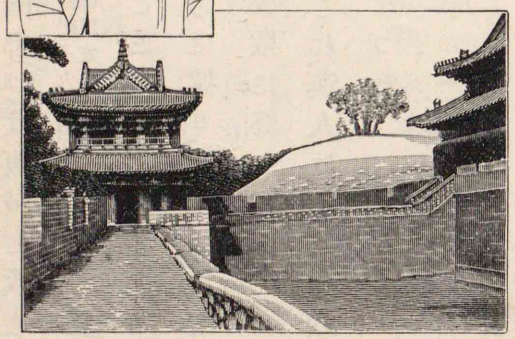
清の太祖

清の太祖の像と其の陵

清の太祖の像は太宗の時作つた太祖實錄圖による。陵は奉天の郊外に在り、圖の中央の饅頭形の小丘は太祖の遺骸を埋めた所である。

一　清の太祖　滿洲人（清洲族の一派）は、金の滅亡の後、元・明に服屬してゐたが、明の神宗の頃、其の一部の酋長ヌルハチ（努爾哈赤）は、興京附近から興つて、漸く諸部落を統一し、遂に明に叛いて、自ら皇帝と稱し、國號を後金（ゴキン）と稱した（西紀一六一六年、豐臣氏滅亡の翌年）。これが清（シン）の太祖である。やがて、太祖は明（神宗）の討伐軍を破り、進んで奉天（即ち瀋陽（シンヤウ））を取つてここに都を奠めた。

二　清の一統　太祖の子太宗は國號を清（シン）と改め（西紀一六三六年、將軍德川家光の時）、朝鮮を攻め降して藩屬國とし（西紀一六三七年）、又

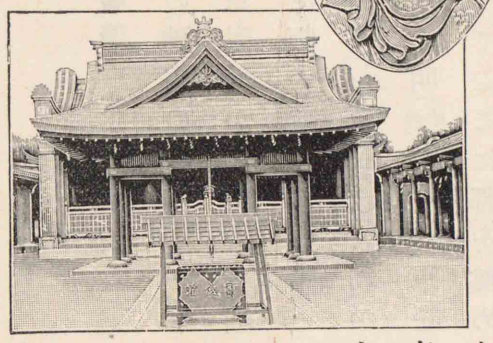


明の滅亡

しきりに明を侵した。當時明に内亂が起り、其の國都(北京)は叛賊に攻め落され、其の皇帝(毅宗)は自殺し、明朝は遂に亡んだ(西紀一六四四年、徳川家光の時)。清の世祖(太宗の子)は之に乘じて益〻南侵し、北京を取つて都をここに遷し、辮髪の令を下した。明の遺臣等は南方に據り、明の皇族を奉じて恢復を圖つたが、皆失敗に終つた。かくて、支那本部は遂に清に一統され、漢人はまた異族の下に支配されることになつた。

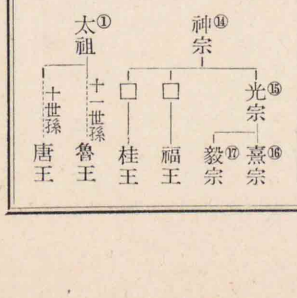
開山神社と鄭成功の像

開山神社は臺南市に在る。もと開山王廟と稱したが、明治三十年に改めた。今の名に見ゆる拜殿は近時建造したもので、其の後方に從來の廟がある。祭神は鄭成功で、圖示の像は即ち安置の神像である。



鄭成功　明の遺臣中最も名高いのは鄭成功(明の國姓(朱)を賜はつて朱成功といひ國姓爺と稱せられた)で、其の父は明人、母は我が平戸の人であつた。鄭成功は初め父と共に明のために戰ひ、後、父は清に降つたけれども、母は節義を守り、泉州城(福建省)陷落の時、自殺して日本女子の意氣を示した。其の後、鄭成功は厦門に據り、明の皇族を奉じて清に抗すること十四年、後、轉じて臺灣に向ひ、オランダ人を逐ひはらつてここに據つた(西紀一六六一年、徳川家綱の時)。鄭成功の死後、其の子孫は引き續き臺灣に據つて、明朝の恢復を圖つたが、やがて、清の聖祖の時、力盡きて遂に降伏した。

明
(二)
(一七代・二九四年)



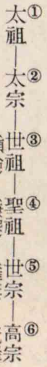
清の聖祖の像

康熙・乾隆時代

㊂清朝の極盛　清の世祖の次に其の子聖祖が即位した(西紀一六六一年、徳川家綱の時)。聖祖(康熙帝)及び其の子世宗・孫高宗(乾隆帝)の三代・約百三十年間(徳川家綱の時より同家齊の時に至る)は、實に清朝の極盛時代で、國運の隆盛・文化の發達共に漢・唐の盛時をしのぎ、支那歷代中最も光輝ある世であつた。世に之を康熙・乾隆時代といふ。

清の聖祖　聖祖は文武の大才を有する大英主で、細心にして大膽、大事を總べると共に小事を忽にせず、學を好み、德を積み、公明の政治を行ひ、人民を愛撫し、公德及び私德の上に於て、殆ど非難すべき點がなかつた。されば、歷史家の中には、帝を以て支那古今第一の明君と稱し、其の政治があまり立派過ぎた爲に、後世子孫の代に、少しの失政があつても、人民は帝の政治と比較して之を怨み、かくて、帝の仁政は、かへつて其の子孫に禍するやうになつたと論ず

清
(一)



る者がある位である。

四 清國の隆盛　清國は、康熙・乾隆時代に、内、叛亂を平げ、外、國威を輝かした。卽ち、(一)清はさきに明の降將三人をそれぞれ王(雲南王・廣東王・福建王)に封じた。世に之を三藩といふ。聖祖の時、三藩の叛亂を平げ、又臺灣の鄭氏(鄭成功の孫)を降した。(二)聖祖は蒙古全部及び西藏を從へ、高宗は天山地方を征服した。(三)高宗は印度支那にも手を延ばし、バルマ(緬甸)・シャム(羅暹)・安南等の諸國をして朝貢せしめた。

三藩の亂の平定

蒙古・西藏等の征服

清の高宗の像

印度支那諸國の朝貢

シャム　明の末頃、シャム國王プラチョーソンタムは、我が山田長政を用ひて大に國勢を振興したが、王の死後内亂が起り、長政も遂に殺された(清の太宗、將軍、德川家光の頃)。其の後凡そ百五十年を經て、シャム國王鄭華(ティクワ)(漢人)は、清の高宗の封冊(ホウサク)を受けて入貢した(西紀一七八六年、德川家治の時)。これが卽ち今のシャム王家の祖である。

雜田南惲圖　東

惲南田、名は格、字を壽平といひ、南田はその號であるが、なほそのほかに白雲外史・雲溪外史等の數號がある。惲南田は、山水畫を捨てて、專ら力を花卉畫に盡したと傳へられる程あつて、ここに掲げた東籬秋菊圖の如きは、その濃豔妍麗、實に目を眩せしむる觀がある。

清國の隆盛

學術の奬勵

考證學の發達

*宋代以來の學者が、やゝもすると、根據のない空論を事とする反動として起つたものである。

顧炎武の像と北京の文淵閣

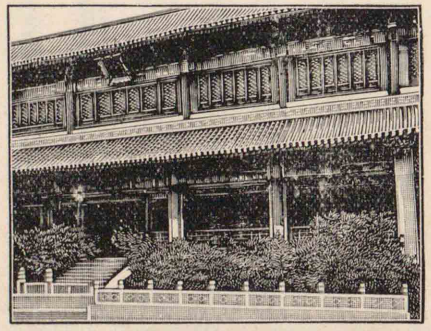
文淵閣は四庫全書を收藏する所である。

寫生畫の發達

かくて、清國は支那本部・滿洲・蒙古・天山地方・西藏・臺灣等を領し、朝鮮・印度支那諸國を朝貢國とし、其の命令の及ぶ所、元代につぎ、漢・唐の上に出で、非常の隆盛を現はした。

㊄ 清初の文化 聖祖及び高宗は學者を優遇し、學術を奬勵し、康熙字典・四庫全書等を編纂せしめ、大に文運を興した。そして、清初の學術の特色は考*證學（證據を古書に求め、一々事實によつて立論する學問）の發達で、明の遺臣顧炎武等はこの學の開祖である。考證學によつて經書・歷史・地理・文字等の諸學は大に進步した。

又、清代の美術は概して明代に及ばないが、唯花鳥の寫生畫だけは、支那歷代中最も發達し、我が圓山應擧なども、清初の寫生畫の大家惲南田等にならふところが多いといふ。

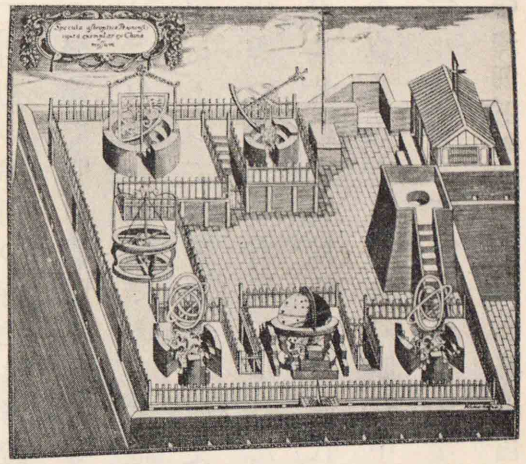


㊅ 清朝とキリスト教 羅馬舊教の宣教師は、清朝に至つても、天文・數學・

宣教師の貢獻

北京天文臺

元の世祖の時創設し、清の聖祖の時改造し、新規の機械をする。然るに付けた清事變の際其の北の機械類は獨逸人に持去られたが、世界大戰役の講和條約の結果、獨逸から取り戻した。



測量術等を傳へ、曆法の改正・地圖の製作・大砲の製造等、清國に貢獻する所が多かつた。かくて、彼等は清國政府に重んぜられてゐたが、其の中に支那人の思想・風習を顧みず、孔子を侮り、祖先の祀りを非難する者などが漸く出て來たので、世宗の時(將軍德川吉宗の時)、遂に退去を命ぜられた。されど、其の後、舊教派は漸く勢を恢復し、キリスト新教もまた傳來した。後に至り、キリスト教の宣教師及び教民(キリスト教を奉ずる支那人)と清國官憲との間に、屢〻紛議が起り、清國政府は常に之に苦められた。

第十七章　清の內亂及び外戰

阿片戰役(四年間)(約八〇年前)

(一)阿片戰役　清朝は、高宗の時を隆盛の絕頂として、それから常に絕えざる大小の內亂と、西洋諸國の壓迫とによつて漸く衰へた。そして、西洋諸國の壓迫は阿片戰役から始まつた。抑〻英國は印度に勢力を得てから、英國商人は盛に印度產の阿片を清國に輸入した。清帝宣宗(高宗の孫)は其の大害を知り、大臣林則徐を廣東に遣はし、其の在留英人の所有の阿片を沒收して之を燒き、其の貿易を禁ぜしめた。そこで、英國は大に怒り、貿易保護を名として、戰を開き(西紀一八三九年、德川家慶の時)、艦隊を以て廣東・上海等を攻撃し、進んで南京(江寧)に迫つたが、清國政府は大に驚き、南京條約を結び、(1)香港を與へ、(2)償金を出し、(3)五港(上海・寧波・廈門・福州・廣東)を開き、(4)對等の交際をすることを約して局を結んだ(西紀一八四二年、ペルリ渡來前十一年)。これが卽ち清國が近世西洋諸國と條約を結んだ始め(卽ち支那開國の始め)である。

原因

林則徐の像と廣東の外國商館

外國商館は阿片戰役の頃の景である。

南京條約

支那の開國

(二)長髮賊の亂(其一)　阿片戰役が終つて後數年、廣東・廣西の地方は、凶作の

長髮賊の亂(十五年間)

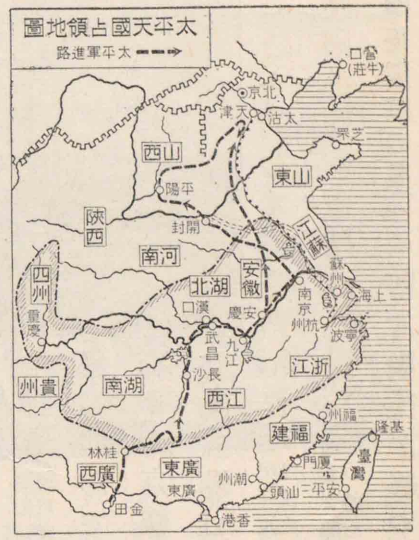
洪秀全の叛（約七〇年前）

太平天國

*剃頭・辮髪しないから、かく名づけた。

曾國藩等の討伐

洪秀全の像　原圖は當時支那在留の英人の描いたものだといふ。



ため、盜賊が蜂起した。洪秀全（廣東の人）といふ者が之に乘じて亂を廣西に起し（西紀一八五〇年、ペルリ渡來前三年）、滿洲人排斥を名として漢人を煽動し、國を建てて太平天國と號し、進んで南京（江寧）を陷れてここに據つた。世に之を長髮賊といふ。名士曾國藩・李鴻章等は清帝文宗（宣宗の子）の詔を奉じ、義勇兵を募つて之を伐つたが、賊勢が中中盛で容易に平げることが出來なかつた。

洪秀全　洪秀全は、外國人の同情を得る爲に、キリスト教を奉じ、神を天父と稱し、キリストは其の長子で、自分は次子であると唱へ、婦人の纏足及び人身賣買等を嚴禁し、又檄文を四方に傳へて漢人の奮起を促し、胡服（今の支那服）・辮髪を禁じ、明代の衣冠を復した。清朝では洪秀全を以て逆賊と稱したが、今の支那共和國

交戰の原因

英・佛聯合軍の進擊

北京條約

*漢口・牛莊・登州・潮州・瓊州・九江及び臺灣（其の內の一港）。

曾國藩の像

長髮賊の亂終る（約六〇年前）

*戰鬪・流行病・飢餓等直接間接に失はれた數。

人中には却つて之を義人と見なし、革命の先驅者として賞讃する者が多い。

㊂英・佛との交戰　かかる間に、清國は又英・佛とも戰を開いた。初め清國官吏は、廣東港に於てみだりに英船を檢査し、又清國人は廣西に於て佛國宣教師を殺した。そこで、英・佛二國は聯合軍を出して廣東を占領し、進んで天津・北京を陷れたが、清國は恐れて北京條約を結び、(1)償金を出し、(2)七*港を開き、(3)九龍地方（香港の對岸）を英國に與へ、(4)キリスト教の傳導を公許した（西紀一八六〇年、櫻田門の變の年）。

㊃長髮賊の亂（其二）　清朝は、英・佛と講和の後、力を專らにして長髮賊と戰つた。やがて、穆宗（文宗の子）の時、英人ゴルドン（漢譯名戈登）は外人義勇兵を率ゐて清軍を助けたので、賊勢が漸く衰へ、遂に洪秀全は自殺し、南京は陷り、前後十五年にわたり、二*千萬の人命を失つたといはるる大亂が終りを告げた（西紀一八六四年、長州と外艦と交戰の年）。

ゴルドンの像
ゴルドンの支那服を著けてゐる有樣である。

清朝の衰微

といふ。

清國朝廷は、阿片戰役以來、內亂・外戰のため、財政頗る困難に陷り、又主に漢人の力で、長髮賊を平定したので、大に其の威信を損し、日を追うて益〻衰へるやうになつた。

ゴルドン　ゴルドンは長髮賊を討つ時、常に一本の鞭（ムチ）と一個の雙眼鏡とを携へ、自ら戰線に立つて指揮し、以て大に士氣を皷舞（コブ）し、凡そ十六箇月間に三十三戰し、常勝軍の名を得た。ゴルドンは性質仁俠で清廉（セイレン）であつた。長髮賊の亂平ぐや、清國朝廷は、其の功勞に酬ゆるために、多額の金圓を贈つたところ、ゴルドンは固く辭して受けなかつた

第十八章　西洋諸國の亞細亞侵略

㊀亞細亞侵略者

印度新航路發見以來、西洋人の亞細亞侵略が始まり、

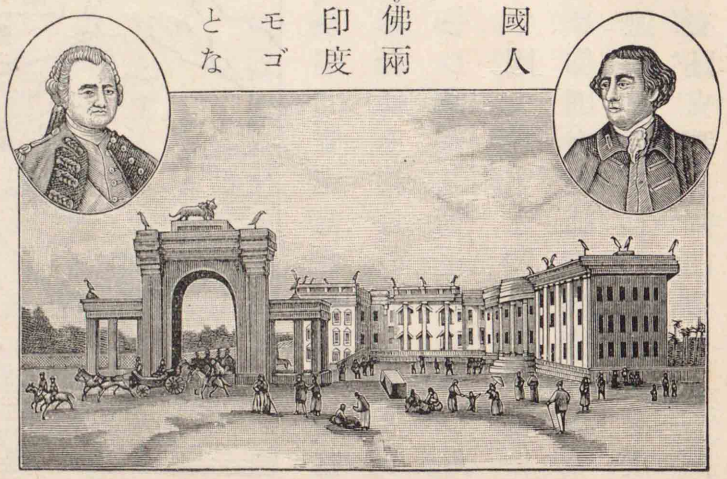
葡・西二國人
蘭・英・佛三國人
露人

英國の印度古政廳（カルカッタ）とクライヴの像
各國東印度會社の設立
英・佛兩國人の衝突
クライブの勝利（約一六〇年前）
モゴル帝國の滅亡（約六〇年前）
モゴル帝國—十五代・三百三十二年

ポルトガル人は其の先驅（サキガケ）となり、イスパニヤ人はこれにつぎ、蘭・英・佛の三國人は又これにつぎ、別にロシヤ人は陸上から侵略して來た。これらの中で、英・佛・露の三國人は最も著しい侵略者である。

㊁英國人の侵略

明の末頃（神宗の時、關ヶ原の戰の頃）、英・佛兩國人は各〻東印度會社を設立し、東洋特に印度の貿易權を握らうとした。やがて、印度のモゴル帝國が衰へて、國內が四分・五裂の有樣となつた。英・佛兩國人は、之に乘じて各〻勢力を得ようとして遂に衝突を起したが、英人クライヴ（Clive）（元東印度會社書記）は遂に佛人を破り（西紀一七五七年、清の高宗、將軍德川家重の時）、英國の勢力を確立した。それから英人は漸く印度を侵略して遂にモゴル帝國を滅ぼし（西紀一八五七年、ペルリ渡來後三年）、其の翌年、印度を東印度

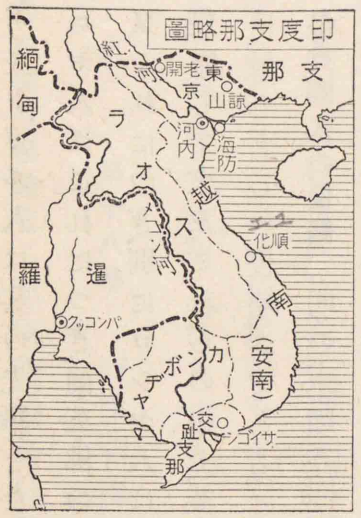


阮福映の統一

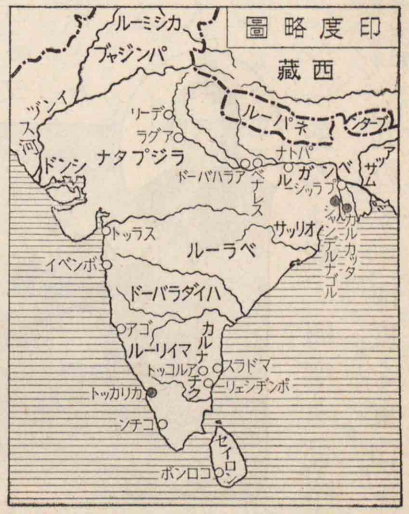
越南國

佛國の蠶食

會社の手から離して王室の直轄に移した。其の後、英國女王ヴィクトリヤ(Victoria)は印度皇帝の位に卽き(明治二〇年)、又英國はバルマを併せた(明治一九年)。かくて、英國人は東洋に於て西洋人中第一の勢力者となつた。



㊂ 佛國人の侵略　明の末頃から、佛國の宣教師は漸く安南に入り込んで來たが、やがて、安南に內亂起るや、阮福映(フクエイ)といふ者は、それらの力をかりて安南を統一し(西紀一八〇二年、將軍德川家齊の時)、清國の封冊(ホウサク)を受けて國を越南(エツナン)と號した。然るに、其の子孫は佛國宣教師を虐待したので、佛國は遠征軍を出して越南國を攻め、其の領交趾支那(コーチシナ)を割讓せしめ(西紀一八六二年、明治天皇卽位前五年)、ついで、カンボヂヤ(東埔寨)をも保護國とした。やがて、越南王は佛人の橫暴を憤つて戰を開いたが、遂に敗れて和を請ひ、東京(トンキン)地方を佛國に與へ、且つ其の保護國となることを約した(明治六年)。然るに清國は越南國の宗主國であると稱して佛國に抗議し、遂に戰を開いたが、やがて、和を結び、佛國の東京占領を承認した(明治一八年)。其の翌々年、佛國は越南・カンボヂヤ・交趾支那・東京(後ラオスを加ふ)を統合して佛領印度支那を建設し、總督を河內(ハノイ)に置いて之を治めることにした。



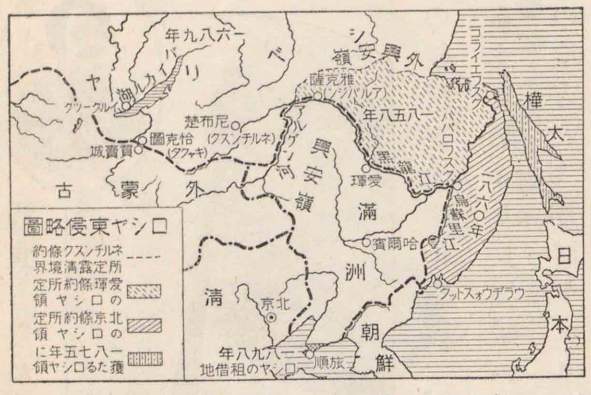
佛國・越南の戰

清・佛戰役(明治十七八年)

佛領印度支那の建設

シベリヤ侵略

滿洲蠶食


ロシヤ東侵略圖
約條クスンチルネ
界境清露定所
定所約條琿愛
領ヤシロの
定所約條北京
領ヤシロの
に年五七八一
領ヤシロるた獲
年九八六一
年五五八一
年〇六八一
年八九八一
地借租のヤシロ
ウラジオストク
ハバロフスク
黑龍江
琿愛
瑷琿
ウスリー河
興安嶺
興安嶺
ヤクーツク
ヤクーツク
ベリヤ
ブリヤート
ウランバトル
庫倫
ツェツェルレグ
ツェツェルレグ
ウルガ
ウルガ
ハルビン
ハルビン
ニコライエフスク
ウラジオストク
樺太
日本
滿洲
清
朝鮮
京北
順旅
ポートアルツール
ポートアルツール
ポートアルツール

ネルチンスク條約

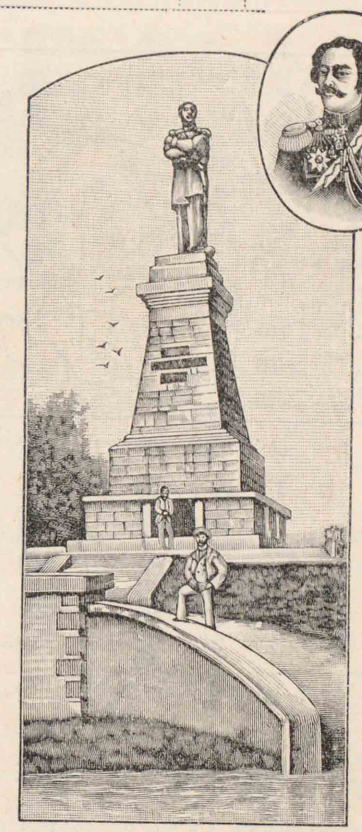
ムラヴィヨフの像と其の銅像

銅像はシベリヤのハバロフスクに在る。

ムラヴィヨフ

中央亞細亞侵略

英・露協商



蠶食(サンショク)したが、清の聖祖は兵を出して露人を伐ち、遂に露國とネルチンスク(尼布楚)條約を結び、外興安嶺(コウアンレイ)を以て兩國の境界と定めた(西紀一六八九年、將軍德川綱吉の時)。かくて、露國の滿洲侵略は一時止んだが、其の後百五十餘年を經て、ムラヴィヨフ(Muravief)が東部シベリヤ總督となつてからまた始まり、長髮賊の亂の時、露人は清國の混亂に乘じて、黑龍江北の地方(一八五八年)及びウスリ(烏蘇里)江東の地方を占領した(西紀一八六〇年、孝明天皇の世)。

露人はまた清の聖祖の頃から中央亞細亞の侵略を始めたが、明治九年頃には其の大部分を占領し、更に進んでアフガニスタンに迫つた。英國は之を以て印度の安全を害するものと見なして、抗議を申込み、遂に露國と協議して露國・アフガニスタン間の境界を定めた(明治二〇年)。その後、英・露兩國はパミール高原方面についての境界を定め(明治二八年)、ついで、ペルシヤ・アフガニスタン・西藏の領土に關して協約を結んだ(明治四〇年)。

英・露再協商

西太后の攝政

清の德宗の像

寫眞による。

德宗の親政

第十九章　西洋諸國の清國壓迫

(一)西太后の攝政

さきに、長髮賊の亂の末頃、清帝穆宗(ボクソウ)(同治帝、時に六歲)は位に即き、其の母西太后(セイタイコウ)は政を攝したが、これから四十餘年間、清國の政權は、大抵西太后の握る所となつた。やがて、穆宗は死し、其の從弟(ジュウテイ)(イトコ)德宗(光緒帝、時に四歲)は位をつぎ(明治七年)、西太后は引き續き政を攝してゐたが、十六年を經て政を還し(光緒十五年、明治二二年)、德宗は親ら政をとつた。そして、其の後數年たつて日・清戰役

清(二)(一二代・二九七年)

⑦仁宗(嘉慶帝)
⑧宣宗(道光帝)
⑨文宗(咸豐帝)　西太后
⑩穆宗(同治帝)
醇親王
西太后妹
⑪德宗(光緒帝)
醇親王
⑫宣統帝

が起つた。

朝鮮の獨立明言

㊁日・清戰役　朝鮮は、さきに、清國に降つてその藩屬國となつたが、明治九年我が國は之と條約を結び、その獨立國たることを明言せしめた。

戰役の發端

然るに、清國はなほ朝鮮を屬國と見なし、朝鮮に東學黨の亂が起つた時、屬國の亂を鎭めると稱して、大兵を朝鮮に出し、遂に我が國に對して戰を開いた（明治二七年（光緒二〇年）七月）。やがて、清國は、連戰連敗の結果、李鴻章を遣はして下關條約を結ばしめ、(1)朝鮮の獨立を認め、(2)*遼東半島・臺灣・澎湖島を割き、(3)償金（銀二億兩（テール）（約金三億圓））を出し、(4)四港（沙市・重慶・蘇州・杭州）を開くことにした（明治二八年四月）。

李鴻章の像と其の祠

祠は李鴻章が官吏として最も活動した天津に在る。

*後、我が國は露・獨・佛三國の勸告により、代償金三千萬兩（約金四千五百萬圓）を取つて之を清國に還附した。

各國の利權獲得

㊂列强の清國壓迫　清國は土地大にして人口が多いので、西洋列國は之を『眠れる獅子』として恐れてゐたが、日・清戰役に敗れて其の眞相が暴露（バクロ）するに及び、競うて之を壓迫し、各〻利權を强奪（ガウダツ）した。卽ち、(1)獨逸は

日本では福建不割讓

清國有志の改革說

其の宣教師が清人に殺されたのを口實として、膠州灣地方の租借權（九十九箇年間）等を得、(2)露國は遼東半島還附盡力の報酬を口實として東清鐵道（今の東支鐵道）の敷設權等を得、ついで、旅順・大連地方の租借權（二十五箇年間）等を得、(3)英國は露國との勢力平均を口實として威海衞地方（二十五箇年間）及び九龍半島地方（香港の對岸、九十九箇年間）の租借權を得（以上皆明治三一年）、(4)佛國は其の士官の殺されたのを口實として、廣州灣地方の租借權（九十九箇年間）を得た（明治三二年）。

かくて、清國は將に分割せられんとし、東洋の形勢が日に益〻險惡となつた。

改革黨の失敗

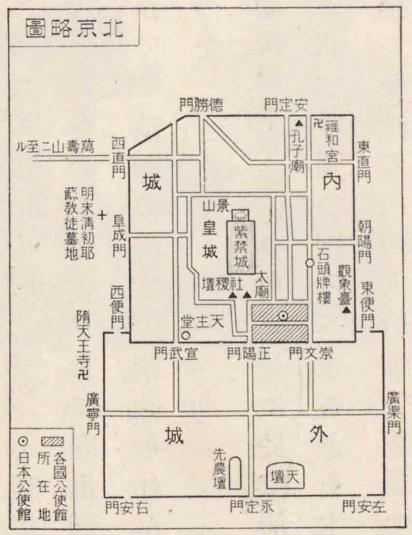
㊃清國改革派の失敗　是に於て、清國の有志者は大に憤慨し、國政を改革して富强を圖るべきことを主張したが、德宗は之に從つて改革を企てた。然るに、西太后は守舊派の說を容れ、遂に德宗を幽（イウ）して再び政をとり（明治三一年（光緒二四年））、大に改革派を壓迫した。そこで、守舊派は再び勢力を得て、排外の氣風がまた盛になつた。

義和團の蜂起

㊄北清事變　明治三十二年義和團と稱する排外主義の暴民が山東省

聯合軍の進擊

に起り、翌年天津の外國居留地を侵し、進んで北京に入つた。この時、清國政府は密に團匪を援け、官兵も之に加はり、我が公使館員及び獨逸公使を殺し、各國公使館を圍んだが、やがて、各國聯合軍は北京に進擊して公使館の圍を解いた（明治三三年西紀一九〇〇年八月）。この時、德宗・西太后等は長安（時の名は西安）に逃げたが、やがて、清國は和を列國に請ひ、(1)日・獨兩國に謝罪使を特派し、(2)暴徒の巨魁を罰し、(3)償金（四億五千萬兩（約金六億七千五百萬圓）、三十九箇年賦）を支拂ふことを約して局を結んだ（明治三四年九月）。世に之を



北清事變（ホクシンジヘン）といふ。

六　日・露戰役　露國は北清事變を機會とし、名を鐵道保護にかりて兵を滿洲に派遣し、我が忠告をしりぞけて滿洲占領の野心を遂げようとしたので、我が國は、自衛上已むを得ず、之に對して戰を開き（明治三七年二月）、海

講和條約

陸共に全勝を博し、翌年ポーツマス條約（明治三十八年九月）を以て其の局を結んだ。この戰役は世界（特に東洋）の形勢及び東洋人の精神に大影響を與へた。

ポーツマス條約

七　日本の盡力　我が國は、かねてから支那領土の保全及び東洋平和の維持を以て外交の大方針と定め、之に從つて、日・露戰役前、英國と同盟協約を結び（明治三五年一月）、日・露講和談判中、之と再び同盟協約を結び（明治三八年八月）、日・露戰役後、佛國（明治四〇年）及び露國（明治四〇年同四三年の二回）と各〻協約を結び、米國と外交文書を交換し（明治四年）、又、韓國を併合して（明治四三年宣統二年）、禍亂の源をふさぎ、英國と三たび同盟協約を結んだ（明治四年）。これらの我が盡力の効果が漸くあらはれ、清國はからうじて分割の禍を免れ、東洋の天地は聊か安定するやうになつた。かくて、我が國は西方から押し寄せ來る大波浪に對して、東洋全體の防波堤（ボウハテイ）となつたのである。

日・英同盟

日・佛協約、日・露協約

韓國併合

東洋の防波堤

日本の功績　日本の最大功績は歐洲諸國の亞細亞侵略を制止したことである。日本は是等諸國の侵略を制止したるのみならず、彼の自ら誇（ホコ）つて天下無敵と稱し、亞細亞人の戰鬪力を輕視したる歐洲諸強國をして其の良心に反省（ハンセイ）せしめた。否之のみならず、日本は其の速かなる勃興（ボツコウ）と進歩とによつて、全亞細亞人をして覺醒（カクセイ）せし

下の文章は、明治天皇崩御の時、哀悼（アイトウ）し奉つた論說の一節である。

め、其の現狀を改良し、世界文明國の間に相當の位置を占めんことを謀るに至らしめた。豈ただに之のみならんや、日本の勃興は、歐洲諸國をして黑色・黃色・褐色の諸族（卽ち歐洲諸國の屬領の人民）に對し、なるべく其の政治上の自由を許し、其の感情を和ぐるの得策なるを悟らしむるに至つた（印度ボンベイ市ジャムシエッド新聞所載）。

支那人の覺醒

國會開設の豫約（明治四一年）

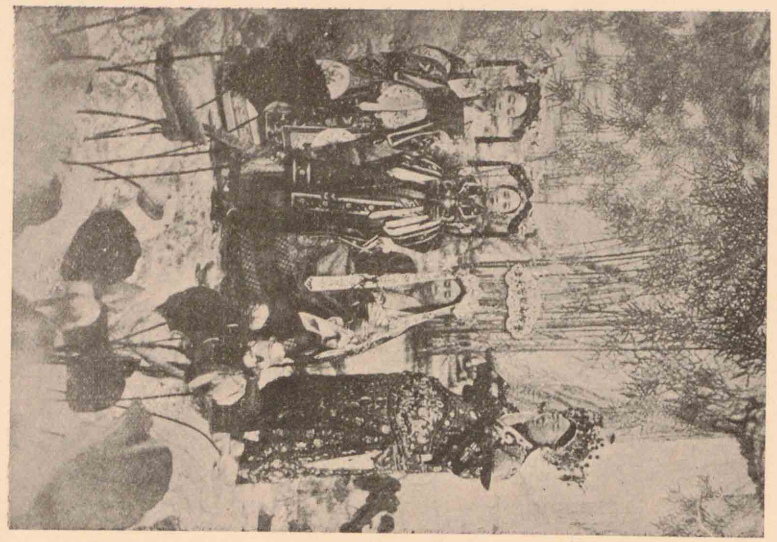
宣統帝の卽位

醇親王・宣統帝・宣統帝の弟

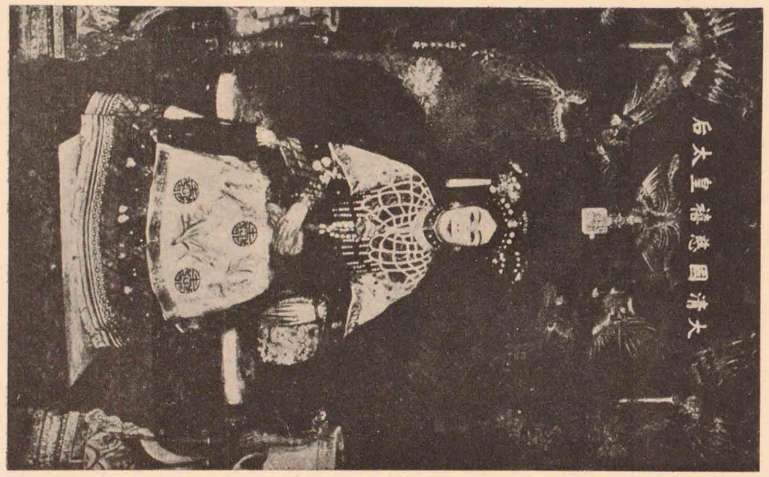
革命黨の企

第二十章　清朝の滅亡　支那共和國の成立

一　清朝と革命黨　支那人は北清事變や日・露戰役などによつて益〻覺醒する所があり、又、清國朝廷は日本の勃興を以て憲政（憲法政治）實施の結果であると信じ、憲政によつて國勢を恢復せんと欲し、遂に國會を開設することを國民に豫約した（明治四一年光緒三四年）。この年、德宗・西太后（七十四年）は相ついで俄に死し、宣統帝（三時に歲）は卽位し、其の父醇親王（德宗の弟）は政を攝して、立憲の準備をした。然るに、孫文（號は逸仙、廣東人）を中心とする革命黨は、清國朝廷を信用せず、是非と



圖裝扮后太西



像肖后太西

西太后は、滿洲の名族の女で、年十八の時、東太后（西太后の親族の女、時に年十六）と共に文宗の宮中に入り、東太后は皇后、西太后は皇后よりも一段下の妃となつた。やがて、西太后の年二十七の時、文宗は死んだが、それから、彼女は穆宗（西太后の所生、在位十三年）・德宗（西太后の妹の所生、在位三十四年）の兩朝・約五十年にわたつて直接・間接に清國の政をとり、よく李鴻章・袁世凱等の諸豪傑を操縦して國運を維持した。

西太后の筆蹟

そして、彼女が七十四歳の高齢を以て死するや、間もなく清朝は大厦の倒るゝが如く、顚覆したところを以て見ると、彼女もまた實に女中の豪傑といふべきである。

表面の兩圖は、共に英人ブランド・バックハウス二氏の合著によつたもので、右の肖像圖は、西太后の比較的わかい時の姿である。又、西太后は非常に演劇を好んだが、左の圖は、西太后自ら觀音に扮裝し、その寵幸する宦官李蓮英や宮女だちと、演劇のまねごとをして樂んでゐる有樣である。

孫文の像

革命亂（明治四四年）

中華民國

袁世凱の勸告

も之を顚覆して理想の國家を建てようと企てた。

孫文　清朝全盛の頃から、滿洲人の下に支配されるのを喜ばない漢人の中に、革命を目的として秘密に種々の會を組織する者が多かつた。孫文もまた夙に革命思想を抱き、清國官吏の迫害を避けて多年外國に流浪し、其の我が國に寄留してゐた頃には、自分が醫者出身であるところから、我が高野長英を慕ひ、高野長雄と假名してゐた。孫文が明治二十五年興中會を組織してから、少壯新知識の漢人等は續々之に加入し、革命黨の勢が漸く強大となつた。

㊁ 清朝の滅亡

たまたま、清國朝廷は鐵道國有を計畫したところ、民間の反對が大に起つた。革命黨は之を機會として武昌（湖北省）の軍隊と共謀し、黎元洪を擁して革命亂を起し（明治四四年十月）、忽ち南京を占領し、共和國を建てて中華民國と號し、ついで、召集された參議院は孫文を臨時大總統に選任した（明治四四年十二月）。清國朝廷は大に狼狽し、醇親王の攝政をやめ、專ら袁世凱をして事に當らしめた。やがて、袁世凱と革命黨と交渉の

清の滅亡（明治四五年）

革命軍記念繪葉書　黄興・黎元洪及び黄鶴樓（武昌の名所）

袁世凱假大總統となる

袁世凱大總統となる

支那共和國の承認（大正二年）

副總統に選ばれたので、支那共和國（即ち中華民國）は列國の承認を得て正式に成立した（大正二年十月）。

結果、清國朝廷も民意に從つて、共和國體を認めることになり、遂に宣統帝（時に七歳）は皇帝の尊號及び年金を得て、統治權を捨てる旨を宣言した（明治四五年（西紀一九一二年）、宣統四年、中華民國元年）二月）。かくて、清朝は遂に亡び、世界最古の老帝國が終りを告げ、東洋に始めて共和國が現はれた。

㊂支那共和國の成立　清朝が亡んで間もなく、孫文は臨時大總統を辭し、袁世凱は參議院に選擧されて中華民國假大總統となり、ついで、第一回民國國會が北京に開かれ、袁世凱は大總統に（任期五年）、黎元洪は

政變屢〻起る

袁世凱の帝制宣言

袁世凱の像

討袁軍起る

黎元洪大總統となる

內閣と國會との爭

第二十一章　支那共和國の政變

支那人は數千年來行つて來た君主政治を廢して共和政治を建てたが、之が爲にかへつて國家の中心を失ひ、政變が屢〻起り、あたかも走馬燈（ソウマトウ）を見るが如き感がある。左に其の政變の大要を語らう。

㊀袁世凱の失敗　袁世凱は大總統となつてから、專ら權勢の擴張を謀り、先づ國會を停止し（大正三年一月）、ついで、國體を變更して、自ら帝位に卽くことを宣言したが（大正四年十二月）、舊革命黨員等は大に憤り、討袁軍を起したので、遂に目的を果さず、憂憤の間に病死した（大正五年六月）。

㊁黎元洪の進退　袁世凱の死後、副總統黎元洪は大總統となり、國會を再興し、一時紛亂を鎭めた。これよりさき、世界大戰が起り（大正三年、袁世凱の大總統となつた翌年）七月）、支那は初め中立を守つてゐたが、黎元洪が大總統となつて間

張勳の事變

馮國璋大總統代理となる

南方の新政府

徐世昌の像

南北の分裂

徐世昌大總統となる

直隸・奉天兩派の戰

もなく、内閣は獨逸に宣戰せんと欲し、國會は之に反對して大紛爭が起つた。この時、張勳（安徽督軍）は先づ黎元洪に迫つて國會を解散せしめ、ついで、北京に入つて宣統帝の復位（即ち清朝の恢復）を宣言したが、忽ち失敗した（大正六年七月）。この事變の結果、黎元洪は責を引いて大總統を辭し、副總統馮國璋は代つて大總統の職を行ひ、獨逸に對して宣戰した（大正六年八月）。

三 南北の紛爭　さきに、黎元洪が國會を強迫して其の首領曹錕を大總統に選擧させた（大正一二年十月）。

に逃げ去つたが、やがて、彼等は廣東に新政府を建て、孫文を其の首領と仰ぎ、舊國會の再興を唱へ、之に對して馮國璋は新國會を北京に召集した。これから支那は大體南北に分裂したが、やがて、馮國璋は辭職し、徐世昌は新國會に選擧されて大總統となつた（大正七年十月）。

四 直隸派と奉天派との爭　かくて、支那は南北の爭がある上に、南方派も北方派も各〻内部に於て爭が絶えない。やがて、北方派の中の直隸派

張作霖の像

黎元洪再び大總統となる

曹錕大總統となる

段祺瑞臨時執政となる

張作霖と馮玉祥との戰

段祺瑞の像

は奉天派の首領張作霖と戰つて之を破つたが、この時大總統徐世昌は之を制し得なかつた理由で辭職し、黎元洪は之に代つて再び大總統となつた（大正一一年六月）。然るに、直隸派は政權を一手に握らんと欲し、遂に黎元洪を逐ひ出し、

五 臨時執政府　其の後、直隸派は勢の盛なるに乘じ、武力を以て全國を統一せんと企て、またもや奉天派と開戰したが、遂に敗れて、曹錕は大總統をやめ、段祺瑞は臨時執政となつて、國政をとつた（大正一三年十一月）。この臨時執政府は、主として張作霖及び馮玉祥によつて支持されたが、やがて、この二人の間に戰爭が起り、微力な段祺瑞は之を抑へることが出來ないで遂に辭職した（大正一五年四月）。其の後、支那には正式の政府なくして紛擾を極めたが、や

張作霖大元帥となる

孫文の病死

蔣介石の北伐

日本の出兵

蔣介石の像

日本の再出兵

がて、張作霖は北京に入つて中華民國軍政府を建て、其の大元帥として北方を支配した（昭和二年六月）。

六 南北の交戰　段祺瑞の臨時執政在職中、孫文はその招きに應じ、北京に入つて遂に病死したが（大正一四年三月）、彼の唱へた三民主義（民族・民權・民生）を奉ずる南方政府の總司令蔣介石（シャウカイセキ）は、國民革命軍を率ゐて北伐の途に就き（昭和元年十月）、翌年南京を占領し、遂に山東・河南兩省の境まで進出した。其の南京占領の際、部下の暴兵は我が居留民等に凌辱を加へたので、我が政府は之にかんがみ、山東省に出兵した（昭和二年五月）。其の後、南方派の間に內訌（ナイコウ）が起り、蔣介石は北伐の軍を引揚げて南に歸つたが（昭和二年七月）、やがて再び北伐軍を起し（昭和三年四月）、馮玉祥・閻錫山（エンシヤクザン）等と聯合して北進した。我が政府は居留民保護のため、また山東省に出兵したが、遂に南軍の暴兵と衝突を起した（昭和三年五月）。既にして、南軍の勢が日に益〻盛であるので、北方派の首領張作

張作霖の傷死

外蒙古の獨立宣言

西藏の自治

達賴喇嘛

霖は不安を感じ、急に北京を引揚げて奉天に歸着する際、突然暗擊を受けて傷死した（昭和三年六月）。是に於て、南方派は北京を占領し、更に滿洲をも統一せんと企てつつあるが、例の如く、各巨頭の間に勢力爭ひなどがあつて、混亂してゐる。

七 外蒙古と西藏　支那の混亂に乘じ、外蒙古や西藏などは漸く離脫せんとする傾向がある。(1)外蒙古は、さきに露國の後援を得て獨立を宣言したが（明治四四年、清朝滅亡の前年）、其の後、露人の勢力は漸く外蒙古に加はつて來た。やがて、露國は外蒙古が支那の領土であることを承認したけれども（大正三年一）、今や、外蒙古はむしろ露國の一部なるが如き觀がある。(2)西藏もまた清朝が亡んで間もなく、英國の後援をたのんで獨立を唱へ、それ以來、達賴喇嘛（ダライラマ）の下に自治の政を行つてゐるが、次第に英國の勢力の下になびきつつある。かくて、支那は國內の統一未だ成らざるに、國土は將に

解體せんとし、實に危險の情態に瀕しつつある。

第二十二章　日・支の交渉　日・露の關係

日本の對獨宣戰（大正三年）

日・支條約（大正四年）

㊀日・支條約　さきに、世界大戰の始まるや、我が國は東洋平和維持の大方針に基き、獨逸に對して戰を宣し（大正三年八月）、遂に膠州灣を占領し（大正三年十一月）、ついで、日・支條約を結んだ（大正四年五月、袁世凱大總統時代）。この條約は、(1)日本の有する旅順・大連等の租借期限を、其の露國設定の年から通算して九十九箇年に延長すること、(2)支那は日本の南滿洲・東蒙古に於ける特殊（トクシュ）の地位・利益を認めること、(3)日本は獨逸の山東省に於て有する權利を繼承し、將來條件を附して支那に還附すべきことなどを定めたものである。

日・支條約の內容　右の日・支條約の草案が二十一箇條であつたので、俗に之を二十一箇條の條約といふ。されど、實際に結ばれた條約は十三箇條で、右に記した(3)即ち山東省問題の解決した今日では、單に(1)及び(2)に關する規定が殘存するに過ぎない。しかも、それがいづれも當然の規定のみである。然るに、支那の無智の學生や職業

世界大戰後の形勢

ワシントン會議（大正一〇—一一年）

日・英同盟の解散

膠州灣の還附

的煽動家等が、この條約の結ばれた五月七日を國恥日と稱して、毎年さわいでゐるのは、實にいはれなきことである。

㊁ワシントン會議　やがて、世界大戰が終つたが、各國軍備の競爭が止まず、不安の空氣が世界を蔽ひ、特に、支那方面の形勢が甚だ憂ふべきものがある。そこで、米國の提議（テイギ）により、五大國（日・英・米・佛・伊）及び四國（支・白・蘭・葡）の全權委員はワシントン（Washington）に集つて會議を開き（大正一〇年十一月）、(1)五大國は、主要海軍力の比率を約し、(2)五大國及び四國は、支那の主權・領土を尊重することを約し（九箇國條約）、(3)四大國（日・英・米・佛）は互に太平洋方面に於て領有する島嶼（タウショ）の保全を約し、竝びに日・英同盟を廢棄せしむべきことを定めた（大正一一年二月、徐世昌大總統時代）。又、この會議に於て、日・支兩國間に膠州灣地方還附等の約を結んだが、やがて、我が國はこの約に從ひ、膠州灣地方を支那に還附し、山東省駐屯の軍隊を引き揚げた。

㊂滿洲國の建設　滿洲は昔から漢族の勢力の外に立つて別に國を建つることが多かつた。清朝が亡んでからは、張作霖が奉天に據つて久

滿洲軍閥の暴政

しく勢力を振つてゐたが、その死後、子張學良に至つて惡政益〻募り、住民は塗炭の苦しみに陷つた。抑〻滿洲の今日あるは、我が國の努力の結果である。然るに、張學良等は却つて我が國を侮蔑し、條約上承認されたる我が既得權益を無視するばかりでなく、我が軍人を殺害し、はては我が鐵道を破壞するなどの暴擧を敢てするに至つた。そこで、我が國は斷然自衞のため、昭和六年九月、關東軍を動かし、國家自衞權行使の範圍内に於て軍事行動を起さしめた。爾來五箇月に亙つて、精鋭なる我が軍は所在に兵匪を討伐して、禍亂の根源を一掃した。かくて、多年惡政に苦しんだ滿洲住民は、此の機會を利用し、ここに安住の樂土を建設せんとの希望を起し、滿洲と蒙古の一部とを併せて滿洲國を建設することとなり、昭和七年二月十八日先づ獨立の宣言を發し、ついで、三月一日建國式を行つたので、東洋に更に一つの共和國が現はれた。

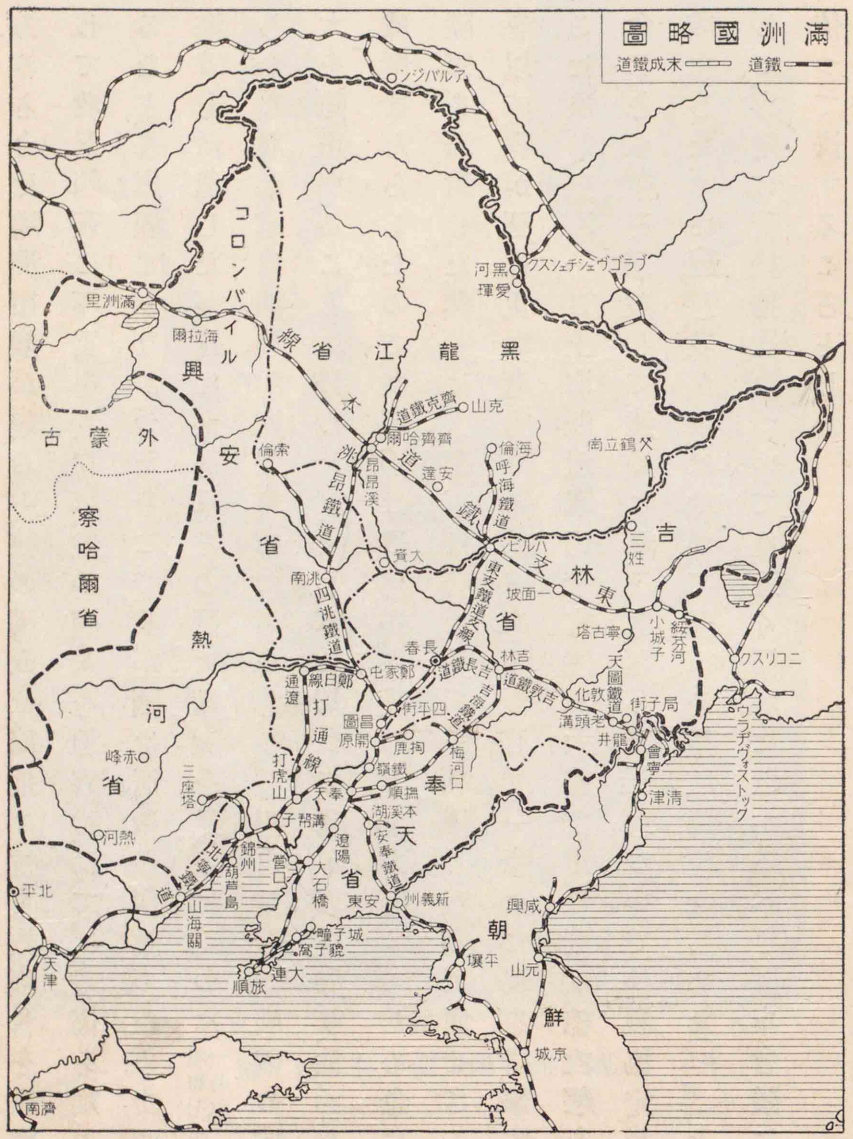
滿洲事變

滿洲國の建設

上海事變の由來

四　上海事變　上海は東洋屈指の貿易港で、我が居留民は數萬に達して

滿洲國　新滿洲國の領土は奉天・吉林・黑龍江・熱河・興安の五省から成り、長春（新京とよぶ）を首府とし、年號を大同と定め、大同元年（昭和七年）三月九日宣統帝溥儀を執政に推戴した。


滿洲國略圖
道鐵成末
道鐵
ハルビン
クスンチェヴゴラブ
河黑
琿愛
滿洲里
海拉爾
興安省
黑龍江省
吉林省
奉天省
熱河省
察哈爾省
蒙古
朝鮮
ウラヂヴォストック
クスリコニ
清津
會寧
局子街
龍井
老頭溝
敦化
圖們
吉林
長春
四平街
鄭家屯
洮南
齊齊哈爾
昂昂溪
滿洲里
錦州
山海關
天津
瀋陽
撫順
本溪湖
安奉線
新義州
大連
旅順
興咸
元山
平壤
京城
南濟
北平
熱河
赤峰
三座塔
打虎山
營口
大石橋
鳳凰城
通化
吉林
敦化
圖們
琿春
綏芬河
寧古塔
三姓
小城子
海倫
呼蘭
綏化
安達
齊齊哈爾
克山
索倫
興安
東支鐵道
南滿鐵道
吉林鐵道
四洮鐵道
洮昂鐵道
京奉鐵道
奉天
撫順
本溪湖
安奉鐵道
新義州
大連
旅順
營口
錦州
山海關
天津
北平
熱河
赤峰
三座塔
打虎山

滿洲國關係諸圖

海軍派遣

日・支兩軍の衝突

陸軍派遣

總攻撃

停戰協定

ゐる。さきに滿洲事變が起ると、彼の國人は同地に抗日救國會を組織して我が國產の不買を實行し、我が國人を迫害し、はては殺傷を加ふるなど、暴虐(バウギヤク)極まりなかつた。そこで、我が國は居留民保護のためまづ海軍を派遣(ハケン)したが、遂に支那軍との間に衝突を見るに至つた(昭和七年一月末)。しかし、我が軍は同地が國際都市たるを思ひ、隱忍(インニン)・自重(ジチヨウ)して戰禍の擴大を防止することに努めたが、支那軍は却つて我が軍を侮り、益ゝ吾を威壓せんとしたので、我が國は居留民保護の萬全を期するため急に陸軍を派遣した。然るに、支那軍は巧に地形を利用し容易に屈せざるを以て、我が國は更に有力なる部隊を增派して一擧にこれを排擊するに決し、三月一日上海派遣軍司令官陸軍大將白川義則は總攻擊を命じ、忽ち敵を擊破して遠くこれを驅逐した(三月三日)。ついで、停戰協定が成立したので(五月五日)、我が國はやがて全軍を撤收(テツシウ)歸還せしめた(五月末)。そして、事變の善後措置(ソチ)については、近く同地に開かるべき圓卓(エンタク)會議に依つて決することとした。

上圖　執政溥儀の寫眞。

中圖　昭和七年(大同元年)三月九日、滿洲國執政就任式を終へて後、溥儀を始め、參列者一同、威儀を正して滿洲國旗揭揚式を擧げた時の寫眞。

下圖　滿洲國旗揭揚式を終へて後、一同庭前に集つて記念撮影を行つた時の寫眞。中央は溥儀、その右は本庄關東軍司令官・內田南滿洲鐵道會社總裁・森獨立守備隊司令官等、左は張海鵬(侍從武官長)・鄭孝胥・張景惠等である。

兩事變の影響

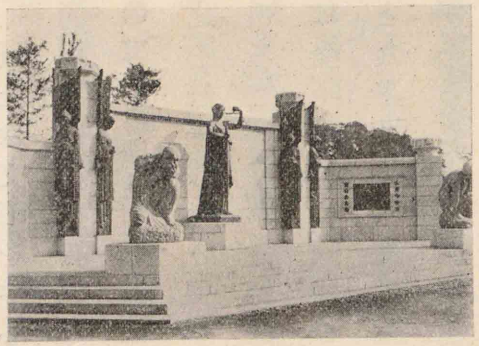
露軍の敗北

尼港記念碑
東京市九段坂の上にある。

シベリヤ出兵
(大正七年)

ニコライエフスクの變
(大正九年)

日・露の國交恢復
(大正十四年)



滿洲・上海兩事變のために我が國の蒙つた損失は多大であつたが、これに依つて、我が軍の眞價や我が國の公正なる態度などが漸く諸外國に認められ、强國たる我が國の面目が充分に發揮された。

五 日・露の關係

これよりさき、世界大戰の際、露國の過激派政府と獨逸側と講和の結果、當時露國に居つたチェッコ=スロヴァック人(Czecho-Slovaks)(聯合側の味方)は頗る苦境に陷つた。そこで、我が國は、米國の提議に應じ、之を救援する爲にシベリヤに出兵した(大正七年八月)。それから、我が軍隊は、或は敵軍を擊破し、或は要地に屯(タムロ)して警備に任じてゐたが、たまたま露國兇徒の一團は、ニコライエフスク(尼港)(Nicolaievsk)に在る我が守備隊及び居留民を襲つて之を虐殺(ギヤクサツ)した(大正九年三月)。かくて、シベリヤ出兵以來、日・露の國交は斷絕のままであつたが、其の後、交渉の結果、我が國は彼がその奉ずる過激な社會主義を宣傳しないことを條件とし

て國交を恢復した（大正一四年一月）。

第二十三章　約　說

以上は支那を中心とした東洋歴史の大要であるが、終りに臨んで簡單に約說を試みたいと思ふ。

支那の存立
王朝の變更
日・支國體の相異
異族の壓迫

㊀支那の國體　支那は世界の舊國で、今から凡そ四千五百年前、黃帝が之を統一したと傳へる頃から、今日に至るまで、依然として存在してゐる。されど、革命が屢〻行はれ、王朝が常に變更した（東洋諸國興亡及塞表參照）。これは全く支那の國體の然らしめる所で、明の太祖が乞食から起つたことなどは、よく支那の國體をあらはしたもので、我が國體と天地の差があることは說明を俟たずして明かである。

㊁漢族と異族　支那は大陸に位し、其の周圍には、異族が常に割據してゐる。支那國を建てた漢族は、常にこれらの異族の壓迫をかうむり、特に、元・清の時代には全く其の支配を受けた。されど、漢族は其の文化が

漢族文化の優秀
不斷の騷亂
悲慘な歴史
日本人の幸福
支那文化の不進步
科學の不發達

異族に比して遙に發達してゐるから、常に文化を以て異族を同化した。言葉をかへていへば、漢族は屢〻異族の暴力に征服されたけれども、常に文化の力を以て彼等を征服したのである。

㊂支那の騷亂　支那は國土大にして人口多く、統治が極めて困難である上に、革命の亂が屢〻起り、異族の侵入が引續き、騷亂（サウラン）が常に絶えることがない。そして支那は異姓・異族の混合して出來た國だから、其の爭鬪が殘忍を極め、支那歴史を讀む者をして悲慘の感に堪へざらしめる。日本歴史と支那歴史とを對照すると、萬世一系の天皇に治められる我が國民が如何に幸福であるかを直に悟（サト）り得るであらう。

㊃支那の文化　支那の文化は早く發達し、特に、唐代の如きは、實に當時世界第一の文明國であつた。されど、支那の文化は早く發達した割合に、其の進步がにぶく、學術の如きも、極端にいへば、殆ど春秋・戰國時代の學說をくり返してゐるに過ぎない有樣で、特に、科學の方面に於て發達を缺き、現今に於ては、著しく西洋の文化よりも劣つてゐる。

支那人の惡風

支那人の將來

㊄支那人の將來　支那人は古より外國人を輕蔑する惡風がある。其の結果、我が國民よりも早く西洋の文化に接觸したにもかかはらず、今では遙に我が國民よりも文化の程度が低い。されど、支那人はかつて政治上及び文化上、優秀な成績を示した民族であるから、將來或は大に興らないとも限らない。從つて之を輕蔑することは大に戒むべきことで、むしろ、よく之を導き、互に提携して東亞の振興を圖ることが肝要である。

支那の現勢

吾等の覺悟

㊅吾等の覺悟　之を要するに、支那は過去に於て、其の文化及び勢力が西洋諸國をしのいだこともあつたが、今では大に西洋に劣り、ややもすると、列强に分割され、又は自ら土崩瓦解せんとする形勢である。そして、支那の興亡・盛衰は我が帝國の運命に關することが頗る大きいから、吾等は常に東洋問題特に支那問題に注意し、其の過去の歷史に照して、將來の對策を誤ることなく、以て我が帝國及び民族の發達をはかり、東洋の平和を維持し、なほ進んで東西の文化を融合して世界の文明に貢獻することをつとめなければならぬ。

三女學校用訂　**東洋歷史教科書**　終

附錄（支那歷代一覽表）

國名	始祖	帝都	現代名	繼續年數
唐	堯	平陽		
虞	舜	蒲阪		
夏	禹	安邑		十七代四百三十九年
商（殷）	成湯	商邱		
		亳		二十八代六百四十四年
周	發	鎬京	陝西省長安	三十七代八百六十七年
		洛邑	河南省洛陽	
秦	政（始皇帝）	咸陽	長安	三代十五年
前漢	劉邦	長安		十三代二百十一年
新	王莽	長安		一代十五年
後漢	劉秀	洛陽		十三代百九十六年
三國 魏	曹丕	洛陽		五代四十六年
三國 蜀漢	劉備	成都	四川省成都	二代四十三年
三國 吳	孫權	建業	江蘇省江寧	四代五十二年
西晉	司馬炎	洛陽		四代五十三年
東晉	司馬睿	建康	江寧	十一代百三年
宋	劉裕	江寧		
南朝 齊	蕭道成	同		
南朝 梁	蕭衍	同		
南朝 陳	陳霸先	同		
後魏	拓跋珪	平城	山西省大同	
北朝 東魏	鄴	鄴	河南省彰德	
北朝 西魏		長安		
北朝 北齊	高洋	鄴		
北朝 北周	宇文覺	長安		
隋	楊堅	長安		四代三十七年
唐	李淵	同		二十代二百九十年
渤海	大祚榮	忽汗城	吉林省寧古塔附近	十四代二百十六年
後梁		汴京	河南省開封	
五代 後唐		洛陽		
五代 後晉		汴京		十三代五十五年
五代 後漢		同		

朝鮮歷代一覽表

國名	始祖	帝都	現代名	繼續年數
後周	趙匡胤	汴京		九代百六十八年
北宋		臨安	浙江省杭州	九代百五十二年
南宋				
西夏	趙元昊	興慶	甘肅省寧夏	十代百九十年
遼	耶律阿保機	臨潢		九代二百十年
金	阿骨打	會寧	吉林省ハルビン東方	九代百二十年
		燕京	北平	
元	忽必烈	大都	北平	十一代百九年
明	朱元璋	應天	南京	十七代二百七十七年
		順天	北平	
清	愛親覺羅努爾哈赤	瀋陽	奉天	十二代二百九十七年
		順天		
中華民國		北京		
		南京		

國名	始祖	帝都	現代名	繼續年數
古朝鮮	箕子	王儉城		三十一代六百八十年
箕氏		平壤		五十六代九百九十二年
衛氏	衛滿	同		三十四代四百七十五年
三國				
高句麗	高朱蒙	國內城		二十七代五百十八年
		奉天省寬仁附近		
				二十八代七百五年
百濟	扶餘溫祚	泗沘城	忠清南道扶餘	
新羅	朴赫居世	慶州		
高麗	王建	松嶽	開城	
朝鮮	李成桂	京城		

清	一六一五	……ヌルハチ（清の太祖）皇帝と稱す。
	一六一六	……サルホ山の戰。蘭人バタヴィヤ市を建つ。
	一六一九	
	一六二五	安南清の封册を受く。
	一七八九	
	一七九〇	……バルマ清の封册を受く。
	一七九二	……清國白蓮教徒の亂起る。
	一七九六	
	一七九八	
仁宗	一八〇〇	露艦根室に來る。近藤重藏蝦夷を巡察す。
	一八〇一	……間宮林藏探檢の途に上る。
	一八〇二	……越南國の建設。
	一八〇四	英人モガル帝國の實權を握る。
	一八一七	……仁孝天皇即位
宣宗	一八二五	……外船擊攘令を發す
	一八三七	……大鹽の亂
	一八三九	―一八四二。阿片戰役。
	一八四六	……孝明天皇即位。
	一八五〇	長髮賊の亂起る。

◎一區劃は各〻十年間とす。

	一八六七	佛國カンボヂャを保護國とす。……
	一八六八	明治元 露國ブカラ汗國を降す。……
支那（中華民國）	一九一一	明治天皇即位。五箇條の御誓文。
	一九一二	大正元 清國亡ぶ。袁世凱臨時大總統となる。……
	一九一三	支那國會開設。第二次革命軍起る。
	一九一四	中華民國承認せらる。
	一九一五	世界大戰起る。……袁世凱帝制を企つ。第三次革命軍起る。
	一九一六	袁世凱死し、黎元洪大總統となる。
	一九一七	張勳帝制恢復失敗。馮國璋代行大總統となる。支那の對獨宣戰。
	一九一八	徐世昌大總統となる。シベリヤ出兵。世界大戰休止。
	一九一九	上海和平會議開かる。……
	一九二〇	巴里講和條約調印
共和國（民國）	一九二一	ニコライエフスクの變。安徽派・直隸派の戰。
	一九二二	
	一九二三	
	一九二四	
	一九二五	
	一九二六	
	一九二七	昭和元
	一九二八	
	一九二九	
	一九三〇	
	一九三一	裕仁親王攝政。
	一九三二	一一。ワシントン會議。外蒙古の獨立宣言。……一一。奉天派・直隸派の戰。黎元洪再び大總統となる。
	一九三三	曹錕大總統となる。……
	一九三四	奉天派・直隸派の再戰。段祺瑞臨時執政となる。
	一九三五	一四。孫文死す。……
	一九三六	段祺瑞の辭職。蔣介石の北進。……
	一九三七	日本の濟南出兵。
	一九三八	日露國交恢復。
	一九三九	今上天皇踐祚。
	一九四〇	日本の濟南再出兵。張作霖死す。……
	一九四一	馮玉祥・閻錫山對蔣介石の戰。
	一九四二	關東大震火災。
	一九四三	即位式。

概說　近世期

近世期は、大勢の上から觀察して、左の三期に分けることが出來る。

(一)清朝隆興時代（清の太祖の卽位より現時に至る。江戸時代の初頃（將軍德川秀忠）より現時に至る。約三百年間。）　この時代に、漢族はまた異族（滿洲人）に支配せられた。清朝は太祖の時より漸く興り、特に康熙・乾隆時代（聖祖・世宗・高宗の世、約百三十年間）に極盛に達した。そしてこの時代には、明代に始まつた西洋人の東洋侵略は漸く進んで來た。

(二)西力東侵時代（清の仁宗より德宗の中頃に至る。我が將軍德川家齊の世より日清戰役前に至る。約百年間）　この時代に、英・佛・露三國の東洋侵略は大に進んで來て、支那も漸く其の壓迫をかうむるやうになつた。清朝は阿片戰役に敗れ、ついで英・佛聯合軍の侵入を受け、之が爲に外人及び漢族の侮（アナド）りを招き、又長髮賊の平定について益〻漢族に對する威信を損し、其の基礎が漸く動搖して來た。

(三)清朝衰亡時代（日清戰役より現時に至る。約三十年間。）　支那は國土大にして民衆が多いので、西洋人は窃（ヒソカ）に之を恐れてゐたが、日清戰役によつて其の眞相が暴露（バクロ）するに及び、彼等は俄に之を强奪（ガウダツ）せんとした。是に於て我が國は奮然起つて、東洋平和の大旗をひるがへし、先づ露國を懲らし、彼等の横暴を防止した。これまで支那人は東亞活動の中心者であつたが、日清戰役後、我が國人は漸く之に代るやうになつた。又日露戰役は益〻支那人の覺醒（カクセイ）を促（ウナガ）し、其の結果、やがて清朝は亡び、漢族は新に共和國を建てた。されど支那共和國（卽ち中華民國）は、內、人心和せず、外、屢〻外國人と紛議をかもし、大小の騷亂常に絕えざる有樣である。

第四年表　近世史年表

支那王朝	支那皇帝	西紀	東洋史	日本史	日本時代
明	明神宗（萬曆帝）	一五五一	……	信長入京す。	織田・豐臣時代
		一五六九	……		
		一五八三	ヌルハチ（清の太祖）滿洲に興る。		
		一五九八	……	秀吉薨ず。	
		一六〇〇	英人東印度會社を設立す。	關ヶ原の戰。	
		一六〇二	蘭人東印度會社を設立す。	家康將軍となる。	
		一六〇三	……		
		一六〇四	佛人東印度會社を設立す。	豐臣氏亡ぶ。	
		一六一五	……		
		一六一六	ヌルハチ（清の太祖）皇帝と稱す。		
		一六一九	サルホ山の戰。蘭人バタヴィヤ市を建つ。		
		一六二三	……	家光將軍となる。	
		一六二四	―一六六一。蘭人臺灣に據る。		
		一六二五	清の太祖今の奉天に都す。	濱田彌兵衞蘭人を懲す。	
		一六二八	……		
		一六三一	李自成亂を起す。	海外渡航を禁ず。	
		一六三六	後金國號を清と改む。		
		一六三七	朝鮮清に降る。	島原の亂起る。	
		一六四四	明亡ぶ。清の世祖北京に都す。		
		一六四五	清辮髮の令を下す。	鄭成功援を乞ふ。	
		一六四八	……		
	世祖	一六五〇	……		
		一六五八	―一七〇七。アウランゼブ帝の世。	朱舜水來朝す。	
		一六六一	……		
		一六五九	鄭成功臺灣に據る。		
		一六六三	露人アルバジン城を建つ。		
清	太祖	一八五一	……	ペルリ來朝す。	江戸時代
		一八五二	……		
		一八五三	長髮賊南京を陷る。	安政の開國。	
		一八五四	……		
		一八五五	……		
		一八五六	―一八五八。清・英佛第一回交戰。		
		一八五七	モガル帝國亡ぶ。		
		一八五八	第一回佛越戰役起る。露國黑龍江北岸地方を占領す。英國政府印度を直轄す。	安政假條約。	
		一八五九	佛國サイゴンを占領す。		
		一八六〇	清・英佛第二回交戰。北京條約。露國ウスリ江東の地方を占領す。	櫻田門の變。	
	宗	一八六一	第一回佛越戰役終る。		
		一八六二	……		
	穆	一八六三	朝鮮王李熙卽位す。	英艦薩摩に寇す。	
		一八六四	長髮賊の亂終る。	元治の變	
		一八六五	……		
		一八六六	……	慶喜將軍となる。	
		一八六七	佛國カンボチャを保護國とす。	明治天皇卽位。五箇條の御誓文。	
		一八六八	明治元		
		一八六九	露國ブカラ汗國を降す。		
		一八七〇	……		
		二			
		三			
	宗	一八七一	露國イリを占領す。	廢藩置縣	明治時代
		四			
		一八七二	……		
		五			
		一八七三	露國キヴァ汗國を降す。	征韓論起る。	
		六			
		一八七四	……	臺灣征伐	
		七			
		一八七五	……	千島・樺太交換。	
		八			
		一八七六	露國コーカンド汗國を滅ぼす。	朝鮮の開國。	
		九			
	德	一八七七	……		
		一八七八	……		
		一八七九	英國女王ヴィクトリヤ印度女帝と稱す。	西南の役	
		一八八〇			
		一			
		一八八一			
		二			
		一八八二			
		三			

◎一區劃は各〻五十年間とす。

清　江戸時代

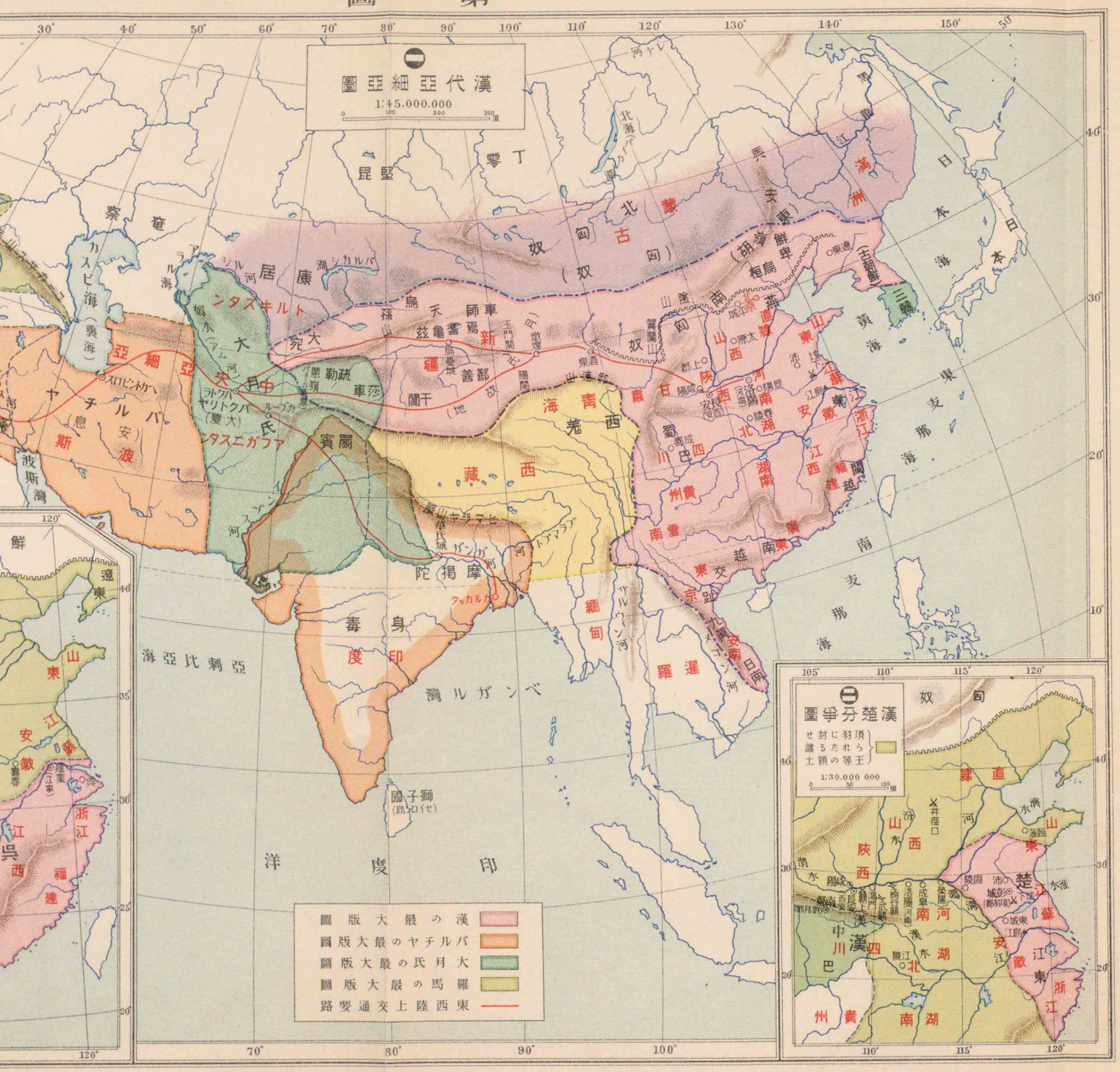
年	事項	時代
一六一九	サルホ山の戰。蘭人バタヴィヤ市を建つ。	清太祖
一六二三	一六六一。蘭人臺灣に據る。	家光將軍となる。
一六二四	清の太祖今の奉天に都す。	
一六二八	李自成亂を起す。	濱田彌兵衛蘭人を懲す。
一六三一	後金國號を清と改む。	海外渡航を禁ず。
一六三六	朝鮮清に降る。	島原の亂起る。
一六三七	明亡ぶ。清の世祖北京に都す。	鄭成功援を乞ふ。
一六四四	清辮髮の令を下す。	
一六四八		
一六五〇		
一六五八	一七〇七。アウランゼブ帝の世。	朱舜水來朝す。
一六五九	鄭成功臺灣に據る。	
一六六一	露人アルバジン城を建つ。	
一六六三		
一七〇〇		
一六七三	一六八一。三藩の亂。	
一六八〇	清臺灣を占領す。	綱吉將軍となる。
一六八三	清軍アルバジン城を陷る。	
一六八五	ネルチンスク條約。	
一六八九		
一六九六	聖祖ズンガル部及び蒙古を征す。	
一七〇二		赤穗義士の復讎。
一七一六	清西藏を占領す。	吉宗將軍となる。
一七二〇	世宗キリスト教を禁ず。	
一七二三	清駐藏大臣を置く。	
一七二四		
一七五〇		
一七四四	英人クライヴ印度に來る。	
一七五七	清ズンガル部を滅ぼし、天山北路を取る。プラッシーの戰。	
一七五九	清マホメット教徒を平げ、天山南路を取る。	
一七七三	安南の阮文惠自立す。この頃より英人阿片を支那に輸出す。	
一七七四		
一七七九	ヘースチングス印度總督となる。	
一七八六	暹羅清の封册を受く。	光格天皇即位。
一七八七		
一七八九	安南清の封册を受く。	家齊將軍となる。
一七九〇	バルマ清の封册を受く。	
一七九二		露艦根室に來る
一七九六	清國白蓮教徒の亂起る。	近藤重藏蝦夷を巡察す。
一七九八		
一八〇〇		
一八〇一	越南國の建設。	間宮林藏探檢の途に上る。
一八〇二		
一八〇四	英人モガル帝國の實權を握る。	
一八一七		
一八二五		仁孝天皇即位
一八三七		外船擊攘令を發す
一八三九	一八四二。阿片戰役。	
一八四六		大鹽の亂
一八五〇	長髮賊の亂起る。	孝明天皇即位。

清　明治時代

年	事項	時代
一八六八	露國ブカラ汗國を降す。	五箇條の御誓文。
一八六九		
一八七〇		
一八七一	露國イリを占領す。	廢藩置縣
一八七二		征韓論起る。
一八七三	露國キヴァ汗國を降す。	臺灣征伐
一八七四		
一八七五		千島・樺太交換。朝鮮の開國。
一八七六	露國コーカンド汗國を滅ぼす。	
一八七七	英國女王ヴィクトリヤ印度女帝と稱す。	西南の役
一八八〇		
一八八一	イリ事件落着。	
一八八二	第二回佛越戰役起る。	朝鮮事變
一八八三	同上終る。佛國越南を保護國とす。	
一八八四	清佛戰役起る。	
一八八五	同上終る。	朝鮮事變
一八八六	英國バルマを併呑す。	天津條約
一八八七		
一八八八	英・露間のアフガニスタン問題落着す。	
一八九〇		
一八八九		憲法發布
一八九一		國會開設
一八九二		
一八九三	佛國メコン河岸の地を占領す。	
一八九四		
一八九五	パミール問題落着。	日清講和
一八九六	露國東清鐵道敷設權を得。孫文興中會を起す。	
一八九七		
一八九八	獨・露・英、清國の港灣を租借す。德宗康有爲を登用す。	
一八九九	佛國廣州灣を租借す。義和團の亂起る。露國の滿洲占領始まる。	日露協商
一九〇〇	列國聯合軍北京に入る。	
一九〇一		
一九〇二		日英第一次盟約。
一九〇三		
一九〇四		日露開戰
一九〇五		日露講和
一九〇六		日英第二次盟約
一九〇七		日佛協約
一九〇八	清朝憲政綱領發布。西太后・德宗死す。	日露協約
一九〇九		日米外交文書交換
一九一〇	清國資政院開會。	日露協約 韓國併合
一九一一		
一九一二	第一次革命軍起る。袁世凱起用せらる。	日英第三次盟約。明治天皇崩御。
大正元	清國革命黨中華民國を建つ。清朝亡ぶ。袁世凱臨時大總統となる。支那國會開設。第二次革命軍起る。	
一九一三		
二	中華民國承認せらる。	
三	世界大戰起る。	
一九一四	袁世凱帝制を企つ。第三次革命軍起る。	日獨開戰
四	袁世凱死し、黎元洪大總統となる。	
五		日支條約
一九一六	清朝憲政準備の詔を下す。	日露協約
一九一七	張勳帝制恢復失敗。馮國璋代行大總統となる。支那の對獨宣戰。	
六		
一九一八	徐世昌大總統となる。シベリヤ出兵。	巴里講和條約調印
七	世界大戰休止。	
八	上海和平會議開かる。	
一九一九	ニコライエフスクの變。安徽派・直隸派の戰。	
一九二〇		
九		
一九二一		
一〇	一一。ワシントン會議。外蒙古の獨立宣言。	裕仁親王攝政。
一九二二	奉天派・直隸派の戰。黎元洪再び大總統となる。	
一一		
一九二三	曹錕大總統となる。	關東大震火災。
一二	奉天派・直隸派の再戰。段祺瑞臨時執政となる。	
一九二四		
一三		
一九二五	孫文死す。	日露國交恢復。
一四	段祺瑞の辭職。蔣介石の北進。	今上天皇踐祚。
一九二六		
一五	日本の濟南出兵。	
一九二七		
一九二八	日本の濟南再出兵。張作霖死す。	即位式。
一九二九		
一九三〇	馮玉祥・閻錫山對蔣介石の戰。	

◎一區劃は各〻十年間とす。

第一圖


漢代亞細亞圖
1:45.000.000
圖版大最の漢
圖版大最のヤチルパ
圖版大最の氏月大
圖版大最の馬羅
路要通交上陸西東
亞細亞
ヤチルパ
月氏
大宛
烏孫
烏丸
鮮卑
匈奴
北匈奴
南匈奴
高句麗
新羅
百濟
倭
遼東
樂浪
帶方
滿洲
日本海
黃海
東支那海
南支那海
印度
緬甸
暹羅
安南
交趾
東京
九龍
香港
廣州
南雲
蜀
川
四
中
巴
漢
荊州
南湖
北湖
安徽
江東
浙江
福建
閩越
東海
山東
遼東
朝鮮
國子獅
(ライオン島)
印度洋
ベンガル灣
亞刺比亞海
毒身度
摩揭陀
タッカルカ
ガンガ河
ヒマラヤ
ヒンドスタン
ヒンドクシ
ヒンドクシ
ヒンドクシ

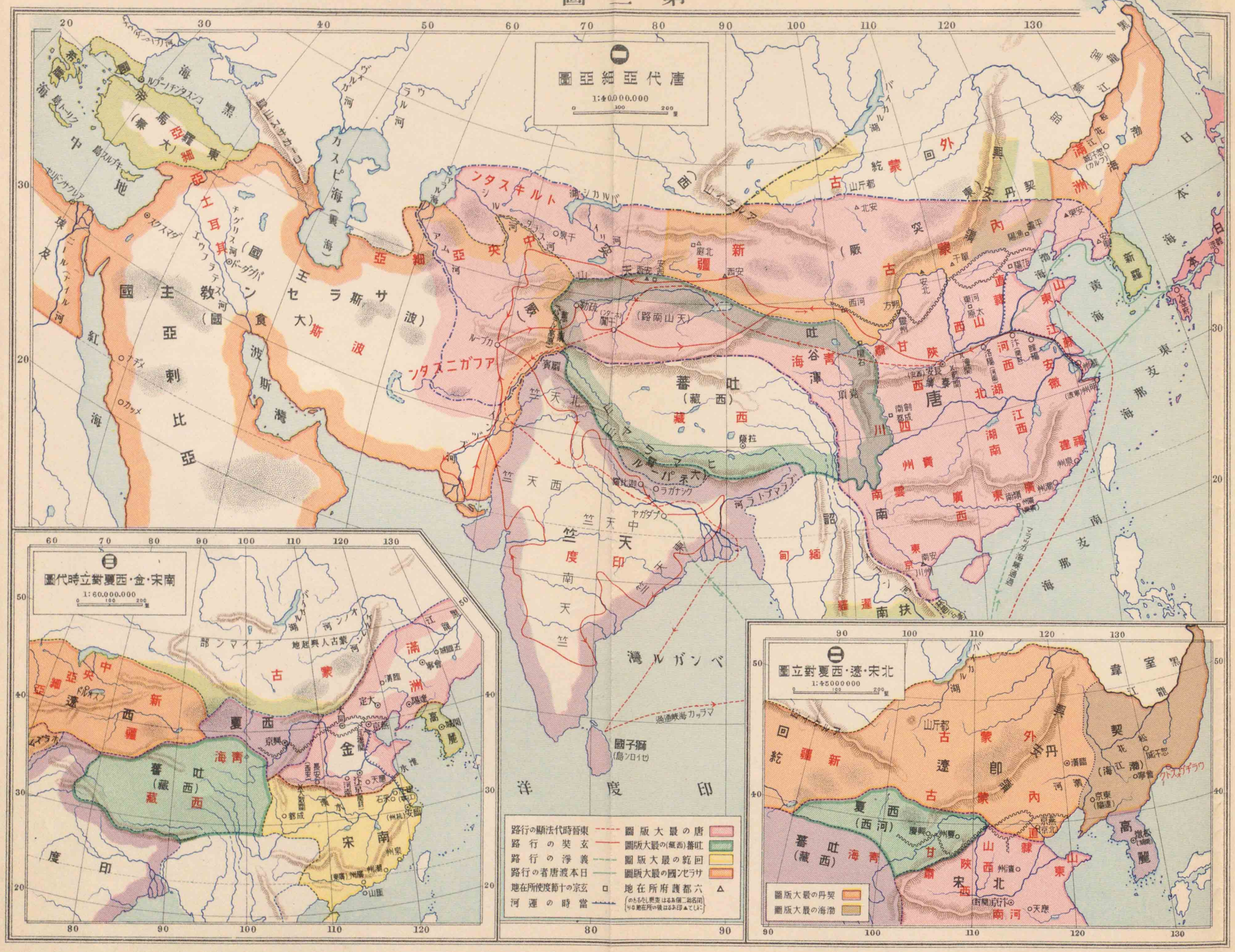
第一圖

漢代亞細亞圖
1:45.000.000
三國鼎立圖
諸葛亮の進路
1:30.000.000
漢楚分爭圖
1:30.000.000
最大の漢版圖
最大のパルチヤ版圖
最大の月氏版圖
最大の羅馬版圖
東西陸上交通路

第二圖

唐代亞細亞圖
1:40000000
北宋・遼・西夏對立圖
1:45000000
路行の顯法代時晉東
路行の奘玄
路行の淨義
路行の者唐渡本日
地在所使度節十の宗玄
河運の時當
圖版大最の唐
圖版大最の(氣西)蕃吐
圖版大最の鈍回
圖版大最の國ンゼラサ
地在所府護都六
圖版大最の丹契
圖版大最の海渤
ベンガル灣
印度洋
獅子國
(島ンロイセ)
過通峽給カッラマ
ルーブカ
ヤガダブ
ラガナシク
ラトブマラブ
ルーブ系大
(天山南路)
(路南山天)
ルーブ系大
ルーブ系大
ルーブ系大

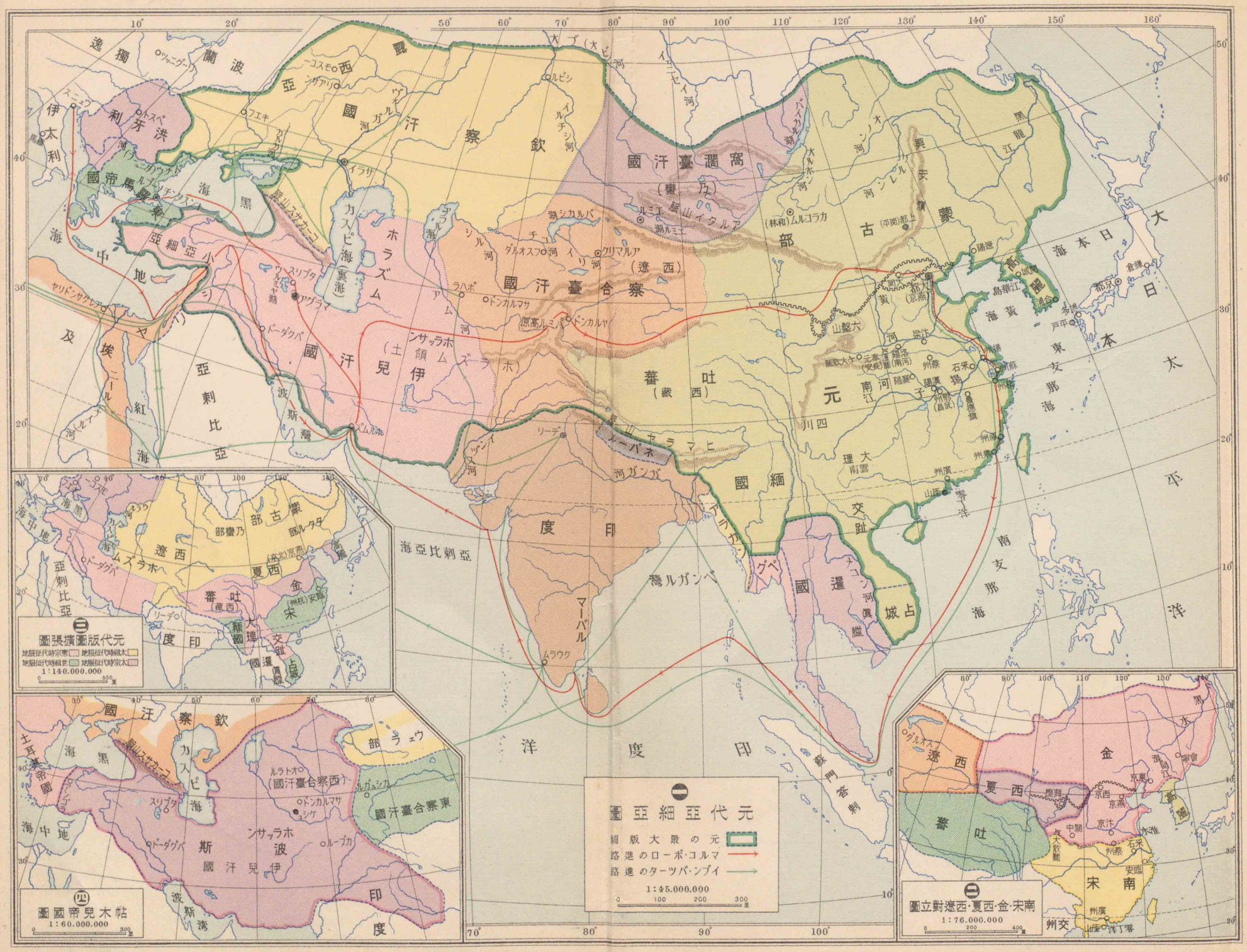
第二圖


唐代亞細亞圖
1:40,000,000
南宋・金・西夏對立時代圖
1:60,000,000
北宋・遼・西夏對立圖
1:45,000,000
路行の顯法代時晉東
路行の奘玄
路行の淨義
路行の者唐渡本日
地在所使度節十の宗玄
河運の時當
唐の最大版圖
吐蕃(藏西)最大版圖
回紇最大版圖
國ソセラサ最大版圖
地在所府護都六
丹契最大版圖
渤海最大版圖
國子獅(島ソロイセ)
ベンガル灣
印度洋
東洋
南洋
日本海
黃海
東支那海
南支那海
黑海
紅海
波斯灣
中亞細亞
土耳其
國主教(國)
波斯(大)
東羅馬(帝國)
新疆
吐蕃(藏西)
唐
回紇
契丹
渤海
高麗
宋
金
夏
遼
西夏
北宋
南宋
天竺
印度

第三圖

元代亞細亞圖
國版大最の元
路進のローポ・コルマ
路進のターツバ・ンブイ
1:45.000.000
0 100 200 300 里
南宋・金・西夏・西遼對立圖
1:76.000.000
0 200 400 里
大日本海
日本海
太平洋
印度洋
亞剌比海
蘇門答剌
蒙古部
察哈臺汗國
窩濶臺汗國
察合臺汗國
吐蕃
(西藏)
元
緬國
交趾
暹羅國
占城
南支那海
東支那海
黃海
遼西
夏西
金
宋南
交州
(土耳其)
(伊兒汗)
(ホラズム)
(遼西)
(乃蠻)
(林和)ムルコラカ
(平岡)都上
都大(京燕)
都京
倉鎮
戶平
多德
浦合
城鎮
島華江
黑龍江
大ンゴル河
ケルレン河
ヤブロノヴイ山脈
ルビシ
イルチシ河
ヴォルガ
ウラル
ヤイツ河
ツンイ河
ガンガ河
ヒマラヤ山脈
ヒンドスタン
ムラウク
マーバル
ペグー
ナコン河眞臘
ルミエ
湖ルミエ
湖シカルバ
ダルオスフ
クリマルア
ラハボ
ドンカルマサ
ドンカルヤ
原高ルミ
ンサッラポ
ムズラ(ホ)
リーデ
ツンイ河
ヒンドスタン
ムラウク
ウェ
國汗臺合察東
度
印
洋
度
印
洋
ダルオスフ
遼西
夏西
金
宋南
交州
吐蕃
中興
京西
京燕
京東
京汴
水淮
州蔡
石采
安臨
州廣
山廣
洋丁署
淮河
汴河
黃河
大運河
黑龍江
水
混同江
會寧
高麗
遼陽
城鎮
島華江
黃海
東支那海
南支那海
太平洋
日本海
大日本海
倉鎮
戶平
多德
浦合
都京
都大(京燕)
都上(平岡)
ムルコラカ
(林和)
(土耳其)
(伊兒汗)
(ホラズム)
(遼西)
(乃蠻)
(藏西)
(土耳其)
(伊兒汗)
(ホラズム)
(遼西)
(乃蠻)
(藏西)

第三圖


元代亞細亞圖版最大
路進のローポ・コルマ
路進のターツバ・ンブイ
1:45.000.000
元代版圖擴張圖
1:140.000.000
國帝馬羅拜
1:60.000.000
元・宋・遼・西夏・金・南宋對立圖
1:76.000.000

第四圖

清初亞細亞圖
域領大最の部ルガンズ
1:45,000,000
清初滿洲圖
遼瀋(一種の城長)
1:12000000
ベンガル灣
ルガンズ部
ルガンズ山
ルガンズ海
ルガンズ河
ルガンズ
ルガンズ地領占徒教回
ルガンズ地領占喇嘛
ルガンズ地領占
ルガンズ地領
ルガンズ地領回
ルガンズ地領回
ルガンズ地領回

第四圖

亞西利伯西
黑海
地中海
紅海
波斯灣
亞剌比亞
ルガンベ灣
日本海
黃海
東支那海
臺灣
ルガンズ部
ルガンズ山
青海
藏西
地領占嗚喇
地領占徒敎同
ルガンズ山系
ルガンズ山脈
ルーパチラマヒ
ムサア
緬甸
ルーパチ
ルーパチ山
ルーパチ河
ルーパチ山系
ルーパチ山脈
ルーパチ山系
ルーパチ山脈
ルーパチ山系
ルーパチ山脈

大正十四年九月十八日印刷
大正十四年九月二十一日發行
昭和三年八月九日修正三版印刷
昭和三年八月十二日修正三版發行
大正十五年一月九日修正再版印刷
昭和四年一月十二日修正四版印刷
大正十五年一月十二日修正再版發行
昭和四年一月十五日修正四版發行
昭和七年八月二十九日修正五版印刷
昭和七年九月二日修正五版發行
昭和八年一月七日修正六版印刷
昭和八年一月十一日修正六版發行

三女學校用 東洋歷史教科書

定價金八十五錢

不許複製

著作者　三省堂編輯所　代表者　龜井寅雄

發行兼印刷者　東京市神田區通神保町一番地　株式會社三省堂　代表者　龜井寅雄

印刷所　東京市蒲田區出雲町一〇一番地　株式會社三省堂蒲田工場

發行所　東京市神田區通神保町（振替東京三一五五五）　株式會社三省堂

大阪市西區阿波座下通二ノ六（振替大阪八一三〇〇）　株式會社三省堂大阪支店

広島大学図書
2000064447